



* 0022319000 *

0022319-000

332. 225-H685m

満州経済誌

法制経済研究会・編

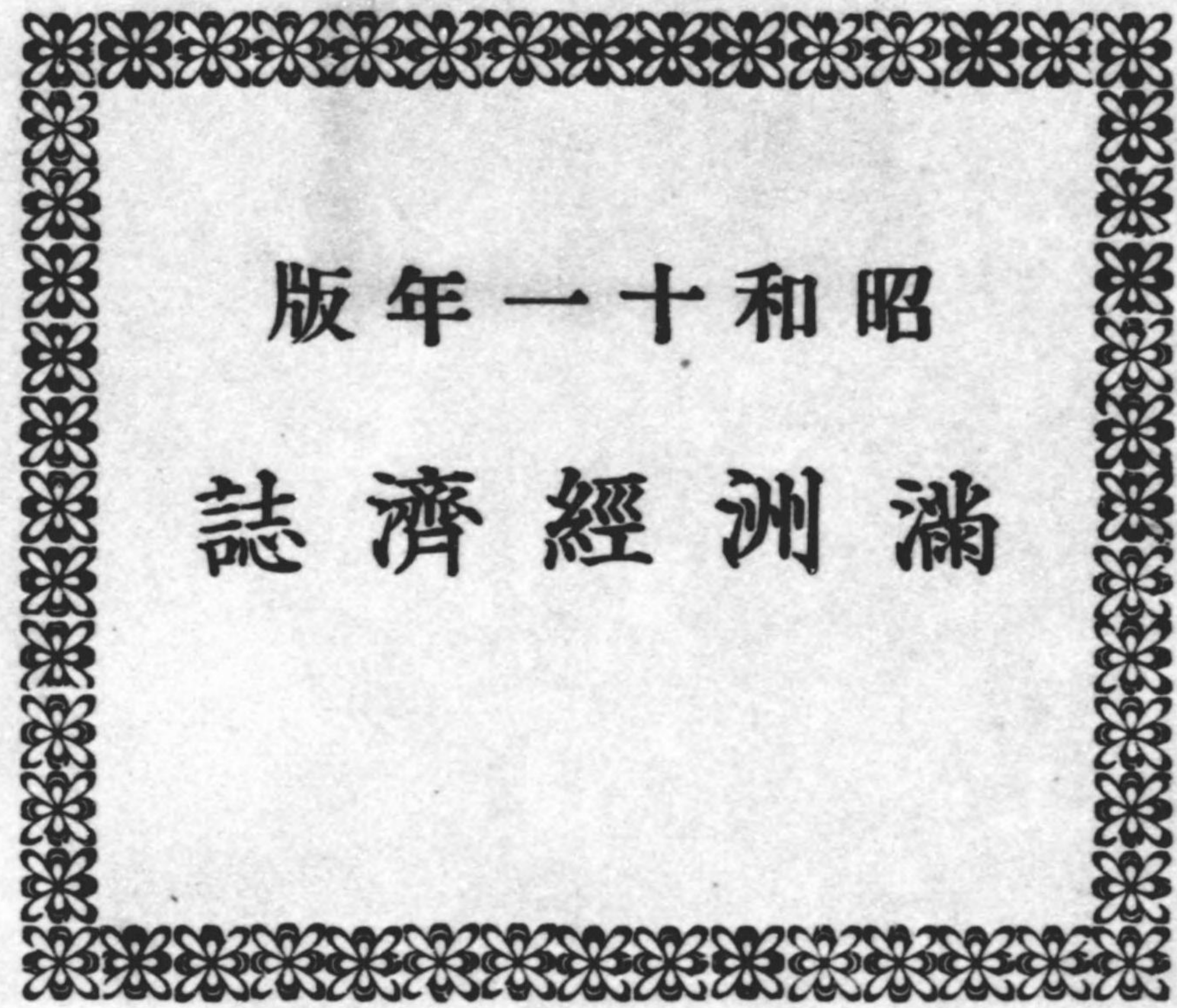
東京図書

昭和11年版

1936

ADC



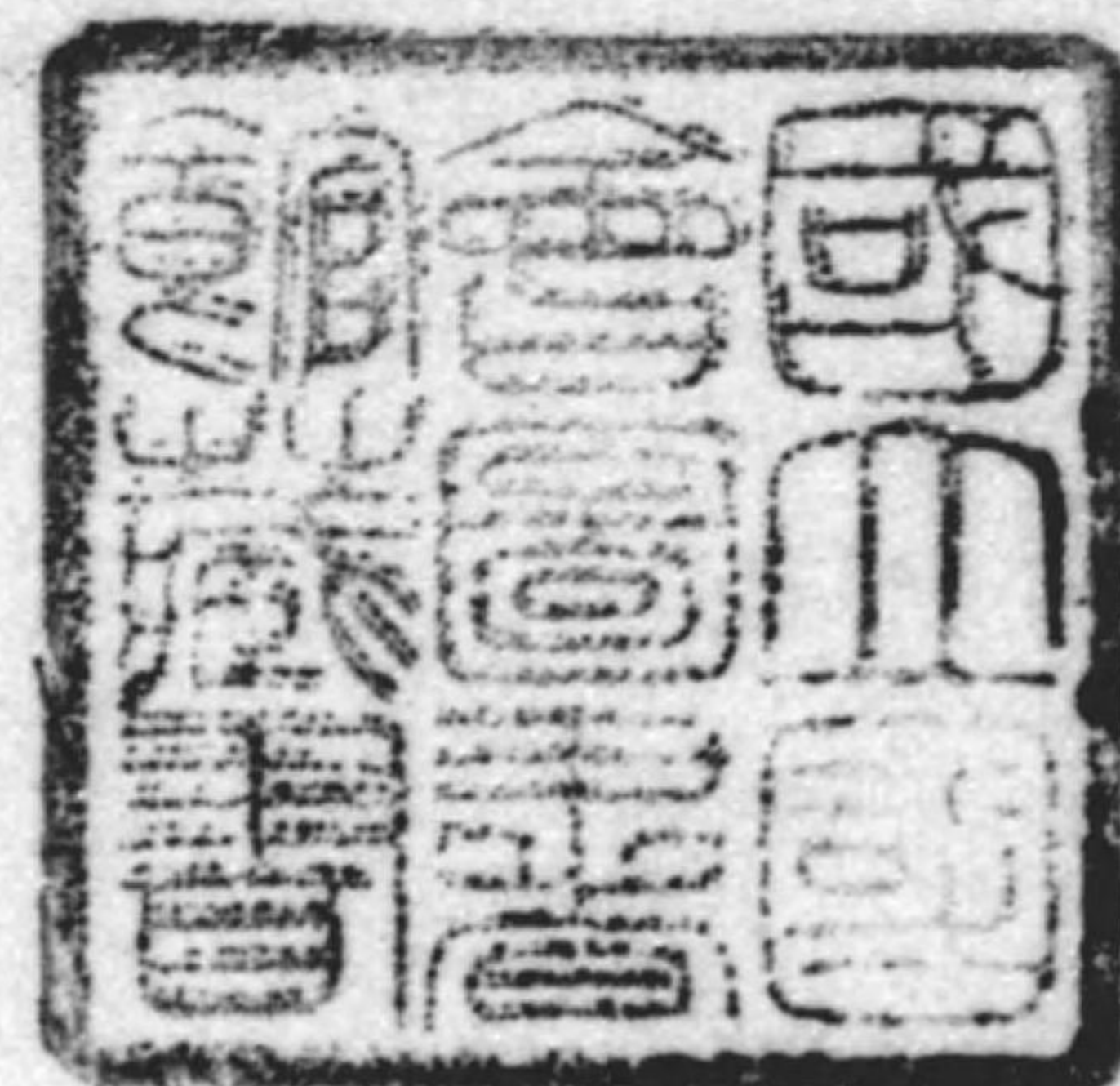


昭和十一年版

滿洲經濟誌

法製經濟研究會編

332.225
H685m



32601

序

抑々友邦滿洲帝國は愈々去る康德元年三月一日即ち昭和九年三月一日を以て、天意と三千萬民意との總意に依つて極東の一角に立憲君主國として出現したのであります。これ因より萬民の安寧福利を本とし、斯くて東洋に於ける嚴然たる大帝國として東洋平和は勿論世界平和に寄與貢獻せんが爲め敢然として滿洲の地に其の建國の新旗幟も鮮かに全世界へと聲明せられたことを吾等は衷心から祝福するものであります。

願みれば日露の戦役後こゝに三十有餘年常に我が同胞がその開發進展に心血を注いだ滿蒙が今や大滿洲帝國として其の全貌を世界の前に現したる結果は我等が過去數十年に亘る特殊權益の擁護を愈々確然たらしめたるは勿論なるも過去の久しき間常に支那の惡逆なる舊軍閥の支配下にありし三千萬民衆の歡天喜地感激又幾何なりやを思ふのとき誠に今回の曠古の大業たる帝政の實施

[1]

は滿洲帝國史上に燦然として輝き、斯くて大滿洲國民は愈々一大飛躍的なる國家的行進曲を奏でて全世界に雄飛すること又必せりと確信するものであります。

然して今我が新興滿洲國を検討するに建國日尙ほ淺しと雖も去る昭和七年十月逸早くも日本の承認を得て日滿議定書の成立を見、昭和九年三月一日即ち康德元年三月一日滿洲國建國祭の當日國都新京に於て曠古の即位大典は舉行せられ、今や若き皇帝を載く三千萬民衆は王道樂土の實現を謳歌しつゝ而も内憂外患の中にあつて新興國の毅然たる國礎は一步もゆるがず、ひたすら大理想を目標として邁進しつゝ遂に建國滿三週年を迎へんとするのであります。

斯くて内にあつては治安・文教・財政・産業等長足の進歩をなし外に向つては建國宣言に於て國際信義を尊重し、門戸開放の主義に則る等其の國策は將來愈々益々強調さるべきことを確信いたして止みません。

茲に於て哉弊社は深く感ずるところがあつて大方の御賛同御支援の下に敢然本書の編纂を企劃

し、斯くて在來の文獻不備を償ひ進んでは彼我文化の向上發達を促進し日滿兩國間善隣の關係を永遠に鞏固ならしむるは勿論日滿事業の啓發に資せんとするものでありまして滿洲國建國滿三週年を迎へるを祝すると共に彌増に榮えゆく大滿洲國の前途を謳歌して止まざる次第であります。幸にして其の趣旨完徹に裨益し得ば吾等の欣快措く能はず、更に本書編纂資料提供等多大なる便宜を賜はりし大方へ深く謝をなすところにして茲に一言以て發刊の序とする次第であります。

昭和十一年一月二十日

編 纂 者 謹 識

▲ 目 次 ▼

第一章 滿洲概觀と其の國際關係……………	1
第一節 滿洲の沿革……………	1
第二節 日滿關係の史的考察……………	2
第三節 滿蒙と露國との外交關係……………	4
第四節 滿蒙と日本との外交關係……………	7
第二章 滿洲國の獨立と滿洲事變……………	9
第一節 概 要……………	9
第二節 滿洲事變の勃發と其の過程……………	11

[1]

善政權の崩壊と其の處置……自治指導部の設置……黑龍江省の情勢と張海鵬等の獨立……吉林省の獨立……
錦州假政府の崩壊

第三節 新國家創設の端緒……………16

東北行政委員會の成立……奉天省政府の成立……國號と執政及年號の決定

第四節 滿洲國の成立……………18

宣統廢帝溥儀氏を推戴と建國式……對外宣言

第五節 滿洲事變の効果……………21

總説……邦人進出阻止原因の解消……中央銀行設立と幣制の統一……關稅自主權と邦品の進出……邦人保護の強化……邦人活動區域の擴大……各種事業界の勃興……朝鮮統治に好影響

第六節 滿洲國經濟建設網要の公表……………26

序説……經濟建設の根本方針……經濟統制方策……交通の充實……農産の開發……鑛工業の振興……金融

の整備……商業の助長……私經濟の改善……結論

第七節 滿洲建國一周年の祝典……………31

國都新京に於ける慶祝の日……關東軍司令官の祝辭

第三章 日滿兩國の史的關係と其の結束……………32

第一節 同胞流血の聖地……………32

第二節 開放された滿洲國の鳥瞰……………35

大同維新の翹業……日滿共存共榮の實現

第四章 滿洲國帝政の樹立……………39

第一節 溥儀執政の祖先……………39

第二節 帝政建國の由來……………

42

極東の新帝國出現……………溥儀氏推戴の理由……………執政就任と帝政運動……………第一世皇帝に即位

第三節 滿洲國曠古の大興次第……………

47

郊祭の御儀……………滿洲國々歌……………登極の御儀……………御即位改元詔書……………勅語……………國務院布告……………鄭總理帝制實施宣明……………御饗宴の式……………國務總理大臣賀表

第四節 帝政實施と各國への宣明……………

56

我が政府帝國確認の公文書交換……………聖上御祝電……………聖上陛下に新帝より親電……………滿洲帝國に對する我が國民の總意……………滿洲國大典の外國への反響

第五節 滿洲各地の奉祝……………

67

第六節 日本の奉祝……………

69

第五章 滿洲帝國の機構……………

71

第一節 滿洲帝國政府組織法……………

71

第二節 帝室制度審議會官制……………

76

第六章 滿洲國の地誌及人文……………

77

第一節 區域と山勢……………

77

第二節 面積、人口及住民……………

78

第三節 平原と水系……………

79

第四節 氣象と氣候……………

81

第五節 動植物界……………

83

第六節 地質、鑛山……………

85

第七節 人文……………

88

交通系……民族の動向……聚業と開拓景……經濟的特質

第七章 滿洲國の交通並通信業……………99

第一節 交通に就て……………99

序説……鐵道……道路……河川

第二節 通信事業……………106

序説……電信及電話……郵務

第八章 滿洲國各論……………103

第一節 吉林省……………109

地形と位置……氣象及氣候……吉林省の特農産物……牧畜業と毛皮……水産事業……吉林材の用途……

石炭……鑛業の狀況……工業の狀況……産業上より見たる吉林省……吉林省の河川交通……鐵道の狀況……都邑

第二節 依蘭地方……………134

概説……三姓……樺川と富錦……同江……虎林……密山

第三節 東支沿線の都邑……………137

阿什河(阿城)……一面坡……海林と穆稜及び綏芬河方面

第四節 開島地方……………139

位置……地勢と都市……農林及鑛業……交通の狀況

第五節 奉天省……………142

地域と面積……地勢……河川……氣候と溫度……産業狀態……都邑

第六節 黑龍江省……………171

地勢と位置……山脈……河川……農林業……鑛業及び工業……地方的特産物……住民と風俗……都邑

第七節 熱河省………都邑

地勢と位置……河川……産業と交通一般……都邑

第八節 興安省………都邑

山脈と河川……氣候……交通……都邑……産業

第九章 滿洲國産業の大觀………200

第一節 總 說………200

第二節 農 業………205

農業經營と耕作法……重要農作物……大豆と其の工業に就て

第三節 林 業………230

概説……滿洲林業の沿革……滿洲林業の實態……森林の分布と面積及立木蓄積……樹種……森林の概況
……滿洲材の生産狀況

第四節 牧畜業………266

家畜の種類……家畜の飼養……畜産品の種類……畜産市場及畜産物輸移出額

第五節 水産業………274

淡水漁業に就て……漁業期に就て……漁獲法に就て……魚類……漁獲高……鹽業に就て……關東州の漁業
……水産物製造業……水産施設……製鹽業

第六節 鑛 業………297

鑛業の沿革……鑛産物の種類……炭鑛業……鐵鑛業……金鑛業……其他金屬及非金屬鑛業

第七節 工業

序説……各種工業の態様

第十章 滿洲の商事と金融機關

第一節 貿易

貿易の消長……貿易と貿易港……貿易の將來……昭和六年に於ける我が關東州貿易……關稅の概要

第二節 滿洲商業

序説……各種商業の態様

第三節 金融機關

通貨……金融機關……對外爲替

第十一章 滿洲に於ける日滿事業の一斑

(注) 括弧内ノ數字ハ本文ノ頁ヲ示ス

- (い)之部)石崎商店(一一一)……(は)之部)哈爾濱貯金信託(一〇四)……哈爾濱土地建物(一〇五)……哈爾濱競馬場(一〇七)……哈爾濱演檢番(一〇五)……哈爾濱座(一〇七)……濱崎商店(一一三)……(に)之部)日滿汽船(四)日滿自動車(九三)……日本珪藻セメン(四一)……日清燐寸(七六)……日華銀行(一一〇)……日華特産(一二五)日華興業(二二五)……日華證券信託(九)……日華油房(三四)……日華金融(七四)……西川商店(一一三)……(ほ)之部)奉天金融(八〇)……奉天不動産(八二)……奉天土地建物(八三)……奉天信託(八四)……奉天取引信託(八四)……奉天醫團(八五)……奉天火災公司(八六)……奉天製麻(八九)……奉天石灰セメン(九〇)……奉天温泉(九二)……奉天染工廠(九〇)……奉天電車(九二)……奉天劇場(九二)……奉信無盡(八〇)……北滿興業(一〇四)……北滿電氣(一〇五)……北滿製油(一〇五)……星浦小松濠建物(四四)……星浦土地建物(四五)……蓬米無盡(一一)……(へ)之部)平和銀行(八)……(と)之部)東亞物産館(一〇)……東亞圖書(一一〇)……東亞電氣工業(三六)……東亞煉瓦(三七)……東亞板金工業(三八)……東亞土木企業(四二)……東亞煙草(七七)……東亞興業(七七)……東亞證券(三〇)……東亞勸業(八一)……東洋倉庫建物(六)……東洋商事(三一)……東洋スレート工業(四一)……東海汽船(三)……東海企業(七五)……東海起業(七八)……東省實業(八三)……戸田汽船(三)……德泰公司(二八)……特許甘草(二三)……同和自動車工業(四九)……同和興業(九三)……(ち)之部)中日興業(二三)……中日實業(二三)……中東海林採木(一〇六)……(り)之部)遼陽電灯(一二五)……遼陽

鞍山信託(一二五)……遼陽汽船(五)……遼東信託(一〇)……遼東ホテル(二九)……遼東製氷(四〇)……旅順無盡(九九)……旅順鐵工所(一〇〇)……旅順機業(一〇〇)……旅順殖産(一〇一)……龍王汽船(二)……(お老之部)鴨綠江採木(一一〇)……鴨綠江製材(一一〇)……鴨綠江製紙(一一一)……小野商會(五)……大矢組(一二二)……(か之部)櫻村洋行(一三三)……桂汽船(二)……角田市兵衛商店(一〇)……(た之部)大連佐藤國汽船(四)……大連東和汽船(四)……大連汽船(四)……大連商業銀行(七)……大連取引信託(八)……大連信託(八)……大連株式信託(九)……大連取引錢鈔信託(九)……大連家屋信託(一一)……大連商品信託(一一)……大連實業(一一)……大連火災海上(一七)……大連油脂工業(三四)……大連製油(三四)……大連鑄鐵(三五)大連醬油……(三四)大連工材(三九)……大連製材家具(三九)……大連機械製作所(三九)……大連鑄寸(四〇)……大連製藥所(四一)……大連工業(四四)……大連中央土地(四四)……大連郊外土地(四五)……大連馬車(四六)大連禮裝(四七)……大連製氷(四八)……大連精糧(二四)……大連土木建物(二六)……大連證券(二七)……大連商品取引(二七)……大連農事(二九)……大連電影(三三)……大連牛乳(二二)……大正汽船(四)……大正興業(二七)……大正海運(五)……大華汽船(三)……大日本興業(一三)……大同商事(二六)……大同貿易(一五)大信商事(二八)……大信洋行(一六)……大陸窯業(三三)……第一商事(二七)……第一無盡(二二)……第二大連信託(三三)……第二滿洲肥料(四八)……太陽貿易(一〇七)……多田工務所(四一)……高田ボロチン(一〇五)……(な之部)南滿建物(二四)……南滿硝子(三三)……南滿鑛業(三五)……南滿倉庫(八一)……南滿畜産(一〇〇)……南昌洋行(一九)……永田鑛業(四八)……直木洋行(一五)……(む之部)撫順無盡(一二二)……撫順

建築信用(一二二)……撫順樂天地(一二二)……撫順倉庫(一二二)……撫順印刷(一二二)……撫順窯業(一二三)……撫順市場(一二三)……(の之部)ノ夕運動具(八五)……(や之部)山下汽船(一)……山本海運(五)……大和塗料製布(三七)……大和土地建物(一一六)……(ま之部)滿洲航空(四九)……滿洲化學工業(七二)……滿洲電信電話(七二)……滿洲中央銀行(七二)……滿洲麥酒(三五)……滿洲煙草(三六)……滿洲銀行(七)……滿洲貯金信託(一〇)……滿洲不動産信託(一〇)……滿洲證券信託(一〇)……滿洲不動貯金(一一)……滿洲貿易(一三)滿洲綿業(一七)……滿洲畜産(二二)……滿洲起業(二四)……滿洲自動車(二五)……滿洲特産(二五)……滿洲棉花(三〇)……滿洲興業(三〇)……滿洲建材(三一)……滿洲畜産改良(三二)……滿洲肥料(三三)……滿洲坩堝(三六)……滿洲製紙(三六)……滿洲鑄寸(三六)……滿洲石鹼(三七)……滿洲製陶(三七)……滿洲製布商事(三七)……滿洲製菓(三九)……滿洲船渠(四一)……滿洲福紡(四二)……滿洲製麻(四四)……滿洲電氣(四三)……滿洲日報(四八)……滿洲製油(七六)……滿洲自動車運輸(八〇)……滿洲殖産銀行(八〇)……滿洲土地建物(八二)……滿洲企業(八三)……滿洲取引所滿洲取引信託(八四)……滿洲市場(八五)……滿洲製氷(九〇)滿洲窯業(九〇)……滿洲オフセット(九〇)……滿洲澱粉(一〇〇)……滿洲蠶糸(一〇一)……滿洲飲料(一一一)滿洲盛信商行(一一六)……滿洲タルク(一一九)……滿洲織布(一二二)……滿洲興業(一二七)……滿洲殖産(四〇)……滿蒙土地建物(四五)……滿蒙毛織(八九)……滿蒙證券(八九)……滿蒙收場(九二)……滿鮮杭木(一一〇)滿鮮製函(一一一)……町田汽船(二)……(ふ之部)福原汽船(二)……福昌華工(四六)……福信金融(七四)……福申銀號(一一六)……粉千公司(三八)……藤井公吉(七八)……復州鑛業(二九)……(こ之部)國際運輸(五)……鴻

- 業公司(一一二)……裕昌公司(二二五)……(え之部)營口印刷(一一八)……營口水道電氣(一一九)……營口畜産
 (一一九)……營口興業(一一九)……營口土地建物(一一七)……營住共銀行(一一六)……(て之部)鐵嶺證券信
 託(一一〇)……鐵嶺公益信託(一一〇)……鐵嶺檢番(一一二)……(あ之部)安東實業銀行(一〇九)……安東靈
 夜無靈(一〇九)……安東商事金融(一〇九)……安東取引所(一一〇)……安東窯業(一一二)……安東印刷所
 (一一二)……安東貿易(一一二)……安東劇場(一一二)……安東製氷(一一二)……安美土地建物(一一二)……
 秋田商會木材(八五)……鞍山不動産信託(一二七)……鞍山財事(一二七)……(さ之部)三共藥品販賣所(一一
 三星洋行(三二)……三泰油房(三四)……山東興業(三三)……(き之部)北支那汽船(三)……北支那青葉(二〇)
 金福鐵路公司(一)……共濟信託(一〇)……共榮信託(一〇)……共益商事(二八)……共立組(二二)……協濟公
 司(八一)……協成銀行(一〇九)……魚菜市場(一一〇)……(め之部)明治公債(二九)……(み之部)南滿洲鐵道
 (四九)……南滿洲興業(二二)……南滿洲汽船(三二)……南滿洲旅館(四六)……南滿洲電氣(四二)……南滿洲
 丸茫(四三)……南滿洲製糖(八九)……南滿洲倉庫建物(六)……民天公司(九二)……三十里堡果樹園(三二)……
 (し之部)新京倉庫(七五)……新京建物(七五)……新京市場(七五)……新京窯業(七六)……新京座(七七)……
 新京銀行(七三)……新京取引信託(七三)……新京貯金信託(七四)……昭和工業(三二)……昌光硝子(四一)……
 商工銀行(一二五)……周水土地建物(四四)……進和商會(二二)……沙河汽船(二)……(ひ之部)日出汽船(三)
 (も之部)森永製品滿洲販賣(二二)……(せ之部)正隆銀行(七)……盛京時報社九(一)……

[14]

第一章 滿洲概觀と其の國際關係

第一節 滿洲の沿革

滿洲は清朝の中期頃迄は滿洲人の滿洲として經營して來た處であつて、此所に住居せる滿洲人は古くより肅慎の名を以て支那本部に聞えた。肅慎として滿洲族が支那本部に聞えたのは三千年以前より二千年以前に亘る間で、松花江支流牡丹江の上流に在る鏡泊湖沿岸(今日の寧古塔附近)に其の本據を置いたものである。肅慎の後に二大國が滿洲に起つた。一は高句麗で一は扶餘である。此の二族は今より千八百年程以前支那の漢の中葉頃より末期にかけて興つた民族で、高句麗は鴨綠江沿岸を中心として國を建て、扶餘は長春の西北農安縣を中心とした西遼河の沿岸に國を樹てた。此の二國は共に長く繼續したが扶餘先づ亡び、高句麗も後ち遂に唐の爲め亡ぼされた。

高句麗の亡びた後同じ滿洲族たる勃海が興隆して高句麗の故地に據り一國を形成し、其の後更に扶餘の故地たる長春、農安地方より松花江の流域に到る廣大な地域をも占領し三百年間も繼續した。勃海は後に契丹の爲めに亡ぼされたが、契丹の勢力衰ふるに及んで再び此の民族の一派なる女眞族が起つて國を起した、之れ即ち金である。

金は今より八百年以前に今の哈爾濱附近の阿哈什又は阿勒楚喀城の南方なる白城に興つたのである。金は白城附近に都を置き東南朝鮮の咸境北道迄を領有し、其の後西方へ侵略して契丹即ち遼國を滅し、更に宋を破つて支那の北半を領したが、百餘年を経て蒙古族なる元の爲に亡ぼさる。元滅亡の後ち明興り、明亡びて清が興つた。

清朝は瑯河の上流興京附近に興り、明朝を破つて北京に遷り、支那本部を統一した。之と同時に其の發祥地の人民

[1]

〔 2 〕
も續々支那本部に移住した爲め、滿洲は殆ど空虚となるに至つた。而も此の空地を開放して漢人を容れることは、其の故地を奪はるる惧れがあるので、漢人の滿洲に入るを禁じて之れを封禁地と稱した。然るに嘉慶四年の頃より山東の農民が長春附近に移住して耕作に従事する者多く、清朝の官吏が之を發見したる頃には戸數二千餘戸、田地二十六萬餘畝となつて居つた。茲に於て清朝の政府も止むなく封禁を解くと共に滿洲八旗をして其の故地に歸へらしめ、田地を耕さしむるの政策を採つた。

其の後支那本部に長髮賊の大亂起つた爲め清朝政府が滿洲を顧みるの暇なかつた頃、漢人は滿洲に入り込み開墾又は金鑛採掘等を始め、斯くて滿洲は漸次開發せらるるに至つたのである。

第二節 日滿關係の史的考察

我國は滿洲と直接の交渉を有するに至つたのは渤海建國（西曆七一三年）以後であつて、兩國の間に貿易の行はれたのは、七二七年より九三〇年に至る二世紀の間に跨つてゐたのである。彼等は貂皮、豹皮乃至は野生人蔘を持ち來り、日本より彩帛、綾絹絲、眞綿の類を購ひ歸つた、渤海國が我日本國に交通を求めたのは、渤海と支那との通路が契丹人に梗塞された爲めであつて、彼等は今や渾春附近より海路日本海を渡つて今の敦賀に上陸し、陸路大和山城の都城に向つたのである。渤海は九二六年契丹に滅ぼされ、日本と滿洲との關係も絶えた。

其の後元の世祖は朝鮮を平定し、一二六四年高麗の使者潘阜をして國書を我に致したるも、鎌倉幕府は之を拒絶し遂に文永、弘安の役を惹起した。此の元寇の反攻に依つて海外の事情に目醒め且復讐心と冒險心と射利心とに騒られた九州、中國の沿海地方の民は倭寇となつて朝鮮半島を襲ひ、次いで滿洲の沿岸より南支那に進出して到る所で

掠奪を行つた。斯くて元末より明初に互つて、朝鮮海、支那海は倭寇の横行せざる所なき有様となつたので、朝鮮の高麗朝も明朝も共に使者を日本に送り、倭寇の寇掠を禁ぜん事を求めたが、幕府の威令行はれず、倭寇の寇掠は依然として盡きなかつた。當時北支那への海賊は對島を根據として朝鮮の西海岸なる多島海を巡り、黃海道の岬角を迂廻して、鴨綠江に達し、それより五家島や本島を経て旅順方面を掠奪するか、或は廟島列島を迂つて山東に至つたのである。然るに彼等は其の戦勝に狂れたるか、永樂十七年（一四一九年）大連の東方六、七里の海岸の望海場に於て全滅の悲運に會つた。此の一戦以來秀吉の朝鮮征伐迄は再び遼東攻撃を企てなかつた。

其の後に於て日本と滿洲と直接の交渉のあつたのは文祭元年（一五九二年）秀吉の朝鮮征伐の時であつた。秀吉に依つて統一せられたる日本の國力は到底國內に消費することを得ず、其の膨張力は遂に溢れて明國征伐となり、鶏林八道を席捲して滿洲に進まんとした。然るに此の文祭の役に於て日支の軍隊は朝鮮に於て相争つたが、我軍は遂に志を得ず、明國打入の希望を達せずして引上げた。此の戦役中驍將加藤清正は其の軍隊を率ゐて、豆滿江の在岸即ち今の東間島地方に至つたのである。即ち清正は會寧より豆滿江を超え今の局子街の敵寨を屠つて隱城に引返し

た。清正は我國知名の人士で滿洲に入つた最初の人である。

徳川幕府が鎖國主義を採るに至つてからは實際上の日滿關係は全く絶えた。上述の如く明治以前に於ては我國と滿蒙とは直接の交渉は極めて、尠なく、且古代の渤海國との交通を除いては何れも軍事的な殺伐なもののみであつた。然るに朝鮮問題から明治二十七年日清戦争起り、其の勝利の結果として割讓された遼東半島を三國干涉に依り還附の止むなきに至り、且其の直後干涉國の一たる露國が關東州を租借するに及んで、我が國民は俄然滿蒙の地に異常

の關心を持つに至れり。

【次いで日露戦争の結果日本は露西亞の權益を繼承し、明治四十三年には日韓併合と爲り滿蒙と直に境を接するに至り我國と滿蒙とは愈密接不離の關係に立ち、滿蒙を以て我が生命線なりとするの意識が愈々明確となつて來た。

第三節 滿蒙と露國との外交關係

露西亞は東方進出を以て露國民族の不可抗的趨向なりと公稱し、十七世紀中葉に入つてから、露支國境を略取せんとして中國と衝突を招き遂に國境を商議することとなり、兩國代表は一六八九年及一七二七年に國境の劃定を爲すと共に通商條約をも締結した。

其の後露國は支那の内憂外患に乘じ多くの利權を獲得した。次いで一八九五年日清戦争の講和條約に依り、遼東半島は日本に割讓されたが、露國は獨、佛と共に干渉して之を清國に返還させ、其の報酬として一八九六年九月西比利亞鐵道を延長し、浦潮斯德迄通する北滿洲鐵道(現在の東支鐵路)の敷設權と、南滿洲地方に鐵道敷設の優先權、鐵山採掘權、駐兵權等を得、一八九八年には旅順、大連の二港に海面を二十五箇年間租借地界以北に一の中立地帯を定め、旅順、大連の二港に海陸軍備を設ける事及び北滿洲鐵道を南滿洲に延長する事等の權利を得た。一九〇〇年の團匪事件に際して、露國は鐵道警備の名の下に、滿洲の要地を占領し、滿洲の武備を悉く露國に於て掌握すべく、奉天及び露都に於て條約を締結せんとせしが、列國及び支那政府の反對に會つて中絶した。其の後支那政府は滿洲の露西亞勢力の驅逐を志し、一九〇二年に至り遂に露國は讓歩して滿洲の政治を支那に還附し、且つ撤兵を行ひ、所謂滿洲還附條約を締結した。

其の後英獨協商と日英同盟條約とが成り、支那の領土保全、機會均等主義等の聲明を見るに至つて、露國も亦裏面歡迎の意を表しながら、事實上露國は滿洲占領の國策を捨てず、朝鮮の獨立さへ危機に瀕したので、日本は屢抗議して此の危機を除去する爲めの協約を結ばんとしたが、露國は滿洲に對し日本の發言權を認めず、朝鮮問題に付いても日本の提案を拒絶するに及び、日本は干戈に訴へて理非を匡さんと宣言し、一九〇四年二月露國に向つて國交斷絶を通告した。戰後露國はポーツマス條約に基き南滿洲に於ける一切の權利を日本に讓渡して、全く南滿洲侵略の野望を放棄して了つた。

日露戰後露國は南滿洲の勢力は失つたけれども、蒙古に對する侵略を依然として繼續する一方、北滿洲に於ける勢力を保持し、一九一六年三月には支那政府と露亞銀行との間に賓黑鐵道敷設借款契約を成立せしめ、更に露國は歐州大戰参加中にも拘らず露支密約を締結して、黑龍江省の一部呼倫貝爾を特別區域として自治を認めしめた。次いで露國は蒙古と露蒙密約を締結して蒙古に於ける特殊利權を獲得した。然るに支那は此の密約の無効を宣言したので、露國は之に抗議し遂に正式交渉に移り、兩國代表は一九一三年に於て協定調印を終つた。之に依れば露國は蒙古に於ける支那の宗主權を認めるが、支那は外蒙古の自治權を認め内政に干渉しない、唯一名の高官を庫倫に駐在せしめ露支の利益に關しては別に商議すると云ふのである。其の後露、支、蒙三國會議により外蒙古の自治は確認され、外蒙古の各種經濟上の利權は露國に歸したが後露國革命に際し、支那は蒙古の自治を取消した。其の後サヴェート露西亞の内訌に乘じ支那は北滿洲及び蒙古の權利を回復せんとし、外蒙古の自治を取消し、他方一九二〇年三月哈爾濱に於ける三十有餘の露人労働團體の罷業に際して鐵道沿線の警備權を強制的に回收して終つた。一九二

〔 6 〕
一年二月に至り支那は大總統令を以て、東支鐵道附屬地（即ち現東省特別區）の行政權を回收し、翌一九二二年一月には東支沿線の露西亞郵便局を閉鎖し、更に其の翌年に至つて沿線の土地、教育に關する行政權も回收するに至りたる爲め、露支間の國交は一時斷絶の姿となつた。其の後露國は一九二四年五月及び九月の二回に亘つて支那と交渉を重ね、世の所謂露支及び奉露兩協定なるものを締結した。此の結果露支兩國間の外交關係は正規に復し、東支鐵道の政治的權益は原則として支那に回收され、露西亞は純然たる經濟機關として之を經營することとなり、司法、行政及び鐵道用地以外の土地は悉く支那側の管轄となり、更に原契約に基く東支鐵道の無償還附期間の八十年を六十年に短縮する事となつた。此の外東支鐵道の諸機關、従業員等の配置に付いても殆ど露、支對等となる等東支鐵道に於ける露西亞の勢力は著しく減殺さるゝに至つたのである。

支那は國民革命に成功した翌年、即ち一九二九年七月に奉天官憲は露西亞の疲弊を見越し、武力を以て東支鐵道の全利權を奪回せんとした爲めに、露支兩國間の葛藤は再び蒸し返される事となつた。勿論、露西亞國は之を不當として直ちに抗議を開始したが、支那側は頑強に自説を譲らずして、遂に兩國兵火を交ゆるに至つた。其の間引續き幾十度となく折衝を重ね、一九二九年末に至つて蔡運升とシマノフスキーの兩代表がハバロフスクに於て漸く協定を結び、其の結果東支鐵道は露支、奉露兩協約の原狀に復した。

而して第三次露支正式會議は一九三〇年モスクワに於てカラハン、莫德惠兩全權の間に開かれる豫定であつたが、南京政府のハバロフスク協定否認となり、紛糾を重ねた結果哈爾濱に於いて露支豫備會議の協定となり、次いで莫全權一行の赴露となつたが、遂に正式會議は無期延期となつた。

以上は滿洲建國迄の露滿關係の梗概である。

第四節 滿蒙と日本との外交關係

露國は明治三十三年義和團事件の混亂中に藉口して滿洲に出兵し、要地を占領して日英同盟の聲明せる清、韓領土保全策に抵觸する行動を採り、繼いで佛國と共同にて日英同盟に對する宣言を發し、滿洲侵入の方針を露骨に表した。日本は單獨で露國との間に韓國の保全、滿洲に於ける露國の特權確認を規約せんとしたが、露國は誠意を示さず益々滿洲占領の國策を進めた爲め、明治三十七年日本は國交斷絶の通知を爲し、兩國開戦に移つた。其の翌年に及び戰爭は日本の勝利を重ねて進展しつゝある時、米國大統領の講和勸告に會ひ、兩國は之を承認して、ポーツマスに會議し折衝して講和條約を締結せり。即ち其の條項は露國は韓國に於ける日本の特權を確認し、之に干渉せざる事、滿洲に於て獨占的特權を拋棄する事及び旅順、大連の租借權並に南滿洲鐵道の本支線其の他一切の附屬事業を日本に讓渡する事等である。然るに旅順大租借地及び南滿洲鐵道に關せる權利の讓渡は支那側の承認を要する爲めに日本は更に北京に於て清國代表と交渉を遂げた。日清滿洲善後條約が之れである。

南滿洲鐵道の一主線である安奉線は日露戰役當時日本軍の手に依つて建設された軍用輕便線であるが、明治四十二年に至り滿鐵會社に於て之が廣軌改築工事を爲さんとするに當り、支那政府は之に反對し頑強に抗議したが折衝の結果奉天に於て滿洲五案件と共に安奉線改築に關する取極が成立した。一方日清滿洲善後條約締結に際し、支那は南滿洲鐵道の利益を保護する爲めに之と並行する鐵道の敷設を爲さざるべき旨を會議録中に聲明せるにも拘らず、支那は英國の一商會と契約して法庫門、新民屯間の鐵道を敷設せんとせしが、日本は右の條文違反を楯として極力

〔 7 〕

之に抗議した結果之を中止すると共に、法庫門鐵道の敷設に當りては日本と商議すべき取極めを爲した。次に日本は吉林、會寧間鐵道敷設に關する投資權を得、其の第一段は敦化迄開通してゐる。

大正二年に至り日本は支那政府との間に滿洲鐵道建設に當りては資金を日本に仰ぐべき優先權を認めしむる取極めを爲したが、其の豫定線は四平街―洮南、長春―洮南、洮南―熱河、開原―海龍城、海龍城―吉林の五線である。其の内四平街から洮南を経て東支線の一驛昂々溪に至る鐵道だけは、日本の請負鐵道として既に開通してゐる。歐洲大戰中日本は膠州灣の獨逸租借地を奪取し、支那に還附の目的を以て獨逸と開戦して青島を占領したが、大正四年之が善後策に付日支交渉を開始し、山東省南滿洲及び內蒙古に關する件其の他に付て交渉を重ね、幾多の波瀾曲折を経て南滿洲及び東部內蒙古に關する事項に付次の如く條約した。即ち(イ)旅順、大連の租借期限並に南滿洲鐵道及び安奉線に關する期限を孰れも九十九箇年に延長すること(ロ)日本人は南滿洲に於て自由に居住往來し且つ商工業及び農業經營の爲めに必要な土地を期限満了後更新する事を得る約束の下に三十箇年の長きに亘つて商租することが出来ること(ハ)其他東部內蒙古の在留及び合辦事業權、開放地の設定、吉長鐵道に關する件等が定められ、同時に日本は獨逸より奪取したる膠州灣を支那への還附を聲明した。斯くて複雑なる日本の對滿洲關係の諸事象に對しては事毎に世界の注目を惹いたが、大正六年十一月米國は日本の滿洲に於ける特殊の權益を認むる旨日本と共同して宣言を發した。之れ所謂石井、ランシング協定(大正十二年に破棄さる)である。山東鐵道を支那政府への引渡に當り大正七年日本政府は滿蒙鐵道建設に關する兩國の條約を結んだ。之は前記滿蒙五鐵道契約を促進せしめるものと見るべく、即ち滿蒙四鐵道と呼ばれるもので開原、海龍城、吉林間二三九哩、長

春、洮南間一八〇哩、洮南、熱河間四七〇哩及洮熱線の一驛から海港に至る一線等の四線である。此等の内開原―海龍城、海龍城―吉林の兩線は支那側に於て獨力之が建設を終つて開通營業して居る。

華府會議に於て支那側委員は前記日支交渉に依る南滿洲及東部內蒙古に關せる條約の不當なるを指摘し、之が取消を提議したが、日本は南滿洲及東部內蒙古の鐵道建設權又は之に附隨する諸優先權を主張しない事、南滿洲に於ける政治、財政、軍事又は警察の事項に關し日本の顧問又は教官を傭請すべき優先權を主張しない事を聲明した。尙支那委員は支那の治外法權撤廢及在支各郵便局撤廢等を要求したが、前者は各國の聯合調査の下に決定することとなり、後者は條件附にて撤廢すべきこととなつた。次いで日本は滿鐵附屬地及關東州以外の日本郵便局の撤廢を承諾し、日支郵便物の聯絡其の他に付大正十一年北京に於て郵便物交換條約を締結した。以上は滿洲新國家成立以前に於ける日滿外交關係の概要である。

第二章 滿洲國の獨立と滿洲事變

第一節 概 要

抑々滿蒙は我が國防並に國民生存に極めて深甚特異の關係を有して居る。さればこそ會て露國は其の勢力を東洋方面に延ばして滿蒙を席捲せんとするにあたり、我が國は國運を賭して敢然之を排撃し、二十億の國帑と十萬の犠牲者とを以て滿蒙に於ける特殊權益を獲得した所以も亦茲にある。爾來日本は銳意滿洲の開発に努めた結果、人口は激増し文化は發達して全く滿洲の状態は一劃期を呈するに至つた。

然るに張學良は昭和三年秋父張作霖の爆死に依つて其の後を襲つて東北省の主權者となるや、南方國民黨に屈服して易幟を敢行し、政治を改組して三民主義の教化に努め、且つ一方蔣介石を援けて反蔣派の馮玉祥、閻錫山を壓迫し、遂に陸、海、空軍副司令の榮冠を贏ち得、其の代價として東北に國民黨化を容認し、張繼、吳鐵城等指導の下に國民黨省黨部を各省に組織せしめて極度に日本の勢力驅逐策を講ずるに至つた。以來張學良は不平等條約撤廢を高唱し、排日を煽動し侮日的行爲を敢てなし、國際信義を無視し、他國の力を恃んで我が國を抑壓し、事毎に反抗し、幾多の懸案問題は故意に未解決の儘放置した。或は條約を無視して無暴なる經濟的競争に没頭し、或は自主關稅に口を藉りて不當關稅を以て經濟封鎖を試みんとし、或は滿鐵牽制策を謀り、又は日支合辦事業を禁止し、鑛山を封鎖し、在滿鮮農を壓迫して其の生存權を奪ひ、或は撫順オイルセル工業に對し條約違反として之を阻止せんとし、遂には旅大及滿鐵の回收をさへ稱ふるに至つた。斯の如くにして之等の反日運動は官憲の傀儡團體たる外交協會、總商會、常議促進會、文化社等民衆の輿論を代表する團體及地方團體並に學生等を以て結合せる排日團體をして行動せしめたが、我國は飽迄國際信義を基調として共存共榮の指導精神に立脚し平和的手段に依つて隱忍自重し、常に反省を求める所があつたにも拘らず、却つて張學良は日本の正義を無視し、日本與し易しと侮り、益々極端な排日を行はしめるに至つた。

斯くて排日運動は愈々露骨と成り、遂には萬寶山鮮人壓迫事件、中村大尉慘殺事件等を惹起し、我國朝野の輿論が極度に激化したる際、尙も昭和六年九月十八日夜軍隊をして南滿洲鐵道の一部を爆破せしむるの暴舉を敢へてし、遂に滿洲事變を惹起するに至らしめた。

茲に於て我が軍は暴戾極りなき支那軍を徹底的に膺懲することとなり、奉天、長春、錦州等の各地に於て支那軍を擊破した。爾來我が軍は各地の治安保持に努めたが、此の間滿蒙人士の中に五族共和の安樂土建設の爲め新政權の樹立を希望する者次第に増加し、昭和七年二月中旬頃から國建促進宣傳運動が漸次熾烈となつた。斯くて東北行政委員會の成立となり、同年三月一日清朝紀元の吉日を以て民主共和政體を標榜する滿洲國の成立宣言をなし年號を大同と稱し首都を長春に奠めた。同月九日宣統帝溥儀氏を迎へて執政と成し、同日文武百官を集めて盛大なる執政式を行ひ、各部官制を定め即日各官吏を任命し三月十二日、日、英、米、等十七ヶ國に對し外交部總長の名により滿洲國獨立の電報を發し、遂に愈々大滿洲獨立國の建設を見るに至つたのである。

第二節 滿洲事變の勃發と其の過程

一 舊政權の崩壞と其の處置

〔11〕 東北省主權者張學良の侮日的態度は年と共に露骨となり、邦人の正當なる權益を無視し、凡ゆる奸策を弄し、我が滿蒙に於ける勢力を徹底的に驅逐して、日鮮人の生存權をも奪はんとするに至り、其の結果は各地に日支不祥事件を瀾發せしめ就中萬寶山に於ける鮮農壓迫事件及び中村大尉斬殺事件等に及んでは愈日支間の感情疎隔を來し、我が朝野の輿論を著しく激化せしむるに至りたる際、突如昭和六年九月十八日午後十時半頃、奉天北方柳條溝附近に於て東北軍の精銳を以て誇れる第七旅長王以哲の軍約二百名に依り國際交通路の一部たる我が滿州鐵道線路を破壊し、剩へ我守備隊を襲撃するの暴舉を敢へてするに至つたので、我軍は直ちに自衛と威信保持の爲め敢然起つて之

【12】
これに應戦し、十九日拂曉迄に北大營及奉天城内を占領した事態は全滿に波及し、愈々重大化し來るを以て我が軍は機先を制して長春、南嶺、寬城子等南滿鐵道沿線樞要地及び吉林を完全に占據すると共に、我が軍は東北に於ける軍閥張學良政權を絶對に否認し、徹底的に之を膺懲することとなり、九月二十二日本庄關東軍司令官は其の旨を一般に佈告し以て我が軍の態度を明にした。

之れより先我が軍は奉天城を占領するや、關東軍司令官は即日城内に臨時市政施行の旨を宣布し、九月二十日臨時市政公署を設置し、市長に奉天特務機關長土肥原大佐を任命し、其の下に日本人課長數名の外日支職員十數名を採用し、市政事務を實施した。一方治安維持に關しては、事變勃發直後一旦四散せる公安局員を召集して自衛警察局を組織し、之を我が憲兵の補助機關として警察及消防の事務に従事せしめた。事變以來市内商店の大部分は門戸を閉鎖して日用品さへ供給せず、剩へ巷間には種々の謠言が流布せられ、避難者は各驛に殺到し、眞に憂慮すべき状態にあつたので、九月二十一日袁金鐘、干冲漢等は専ら人心の安定を圖らんが爲め地方維持委員會を組織し、繼いで二十六日關朝璽、王維周、祖憲庭等は東北に於ける二十餘の慈善團體を糾合して四民臨時維持會を組織し、當面の問題たる避難民の救済に従事して、民心の安定に努めた。

然るに我が軍の爲めに驅逐された舊遼寧省政府は米春霖を代理主席として錦州に假政府を設置し、新政權樹立運動に掣肘を加へると共に、強力な便衣隊を滿鐵沿線其の他に密派して、盛に滿洲各地の治安擾亂を策した。茲に於て十月八日朝我が空軍は錦州の上空に到り敵の情勢を偵察せしところ東北軍の猛射を受けたるを以て己むなく之に應戦し、敵の兵營に向け數十個の爆彈を投下して、治安妨害の策源地覆滅の意思を如實に表示した。

斯くて袁金鐘等は新政權樹立の決心を固めるに至つたので、我が軍は臨時市政公署を地方維持委員會に引渡すことに決し、十月十八日土肥原市長以下邦人職員は全部辭職して、新に市長となる趙欣伯其の他の支那人職員に市政公署の事務一切を引継いだ。越えて十一月七日地方維持委員會は愈張學良及國民政府との關係を斷然離脱し、遼寧省政府を代行する旨を袁金鐘、干冲漢、張成策、關朝璽、丁鑑修、金榮、翁恩裕、高敏衡等の名を以つて宣言し、二十三日遼寧省を奉天省と改稱するに至つた。

二 自治指導部の設置

斯くて張學良の政權崩壞に依り各縣政府は其の統制の主體を失ひ、官吏は去就に迷ひ人心は極度に動搖し、延て地方治安に重大なる影響を及ぼすの虞があつたので、民心の收攬と地方の治安維持の爲め滿鐵沿線各縣に於ては邦人側の援助を得て縣長を主班とする自治委員會を設置し、縣自治制を施行した。之れと同時に之等各縣の自治委員會を指導統制すべき機關として奉天に自治指導部を設置し、其の統制下に各縣指導員を任命し、地方自治を指導せしむることとなり、同年十一月十日干冲漢を部長として本部を組織し、各縣に指導員を派遣して自治の指導に當つた然るに當時錦州政府は組織的な便衣隊を放ち又は敗退兵等を集結せしめて地方の治安擾亂を策した爲め一時は其の事務の進捗を妨げられたが錦州政府の没落後各縣に於ては愈自治制の實施を爲すに至つた。

三 黑龍江省の情勢と張海鵬等の獨立

【13】
洮遼鎮守使張海鵬は東北政權の機能喪失の機會に逸早く舊政權との關係を離脱して、我が軍に誠意を示し、十月一日獨立を宣言した。且つ亦哈爾濱特別區行政長官張景惠も十月一日治安維持會を組織して自ら會長として治安の任

〔14〕に當り、事實上獨立的態度を示した。熱河省主席湯玉麟は錦州假政府側の牽制を受けて態度鮮明に難色ありしが如く、事實上中立的態度を保持するに至つた。

黒龍江省齊々哈爾の馬占山は哈爾濱護路軍司令丁超等と連絡して、盛に戦備を整へ錦州假政府と氣脈を通じて我が軍の行動に反抗すると共に、張海鵬の黒龍江省政權受授に對し極力反對の態度を示した爲め、張海鵬は愈武力解決を圖るに決して齊々哈爾に向け進軍を開始した。之に對し馬占山の指揮する黒龍江軍は張海鵬軍の北進に備ふる爲め、五廟子、江橋間の呼蘭達河橋及び大興附近嫩江の鐵橋を破壊して退却した。

然るに洮昂鐵道は我が滿鐵の借款に成れるものであつて、之を濫りに破壊するが如きことは即ち我が軍に對する挑戰行爲とも認められ、我が軍より黒龍江軍總司令馬占山に對して嚴重抗議する所あつたが、固より之に應ずる氣色がなかつたので滿鐵は己むを得ず我が軍掩護の下に鐵橋修理に着手した所、黒龍江軍は之に砲撃を加へて作業を妨害し、飽迄我が軍に反抗せんとするの勢を示した爲め遂に我が軍は自衛上黒龍江軍を膺懲することとなり、十一月十八日以來行動を開始し、翌十九日遂に齊々哈爾を完全に攻略するに至つた。

斯くて我が軍の齊々哈爾占領後馬占山は海倫方面に遁れて居たが其の後態度を急變して十二月七日海倫に於て板垣參謀長と會見した際誠意を示して我が軍の諒解を求むる處があつた。其の後馬占山は呼蘭に於て哈爾濱特別區行政長官張景惠と會見し、張學良は黒龍江省長官に、馬占山は同省警備司令に就任の件、其の他の善後處置に付き協議する處あり、且つ我が軍とも折衝して歸順を誓ひ、部下軍隊を改編して治安維持に任ずることとなつた。昭和七年一月六日張景惠は齊々哈爾に入り、七日省政府、禮堂に於て省長就任式を舉行し、茲に全く黒龍江省新政權の樹立

を見るに至つた。

其の後馬占山は張景惠等の推薦に依り、新國家建設運動に参加し、滿洲國成立後は軍政部總長兼黒龍江省長の重任に就いたが新政權の下に於ては舊軍閥時代の如き專政は許されずして不滿を抱いてゐた折柄とて學良の使喚反新國家の部下に誤られて滿洲國に叛き、日滿兩軍の急迫を受けつゝ各地を轉々として逃げ回り、遂に同年七月末日北滿の曠野安固鎮に於て戦死を遂げた。

四 吉林省の獨立

吉林省政府主席張作相は事變勃發當時偶郷里錦州に歸省中なりし爲め吉林督辦公署參謀長熙洽は主席の職を代行しつゝあつた。九月二十一日我が軍が吉林に向つて行動を開始するや、熙洽は我が軍に絶對恭順の意を表すると共に省内の動搖を抑へ逸早く省政府の改組を斷行して排日分子を排除し、親日派を重用し、自ら長官となり、文武兩權を掌握し、舊政權と隔絶せる新政府を樹立し、九月二十八日吉林省の獨立を宣言し、漸次各縣に自警團を組織せしめて極力地方の治安維持に努め、聽て東北四省を統一する新政權の樹立に備ふる處あつた。

五 錦州假政府の崩壞

〔15〕錦州假政府は奉天地方を奪回すべく榮臻の軍隊を錦州其他に集結すると共に、便衣隊及義勇軍を組織して之を新民屯地方に東進せしめ、我が占領地の治安を妨害し、人心の攪亂を策した。茲に於いて我が軍は其の策源地たる錦州を撃滅するに決し、十二月二十八日空、陸相呼應して攻撃を開始した處、錦州軍は我が軍の威力に恐れを抱いて直ちに戦意を失ひ、續々關内に退却し、總司令榮臻も亦北平に退去して錦州には朱光沐の率ひる軍隊のみが残留し

我が軍に抵抗しつゝあつたが、一月三日我が軍の總攻撃に遭つて全軍潰滅した。茲に於て錦州の假政府は崩壊し、張學良の政權は滿蒙より完全に驅逐せらるゝに至つた。

第三節 新國家創設の端緒

一 東北行政委員會の成立

滿洲事變勃發して奉天軍の潰滅するに従ひ、多年舊軍閥の暴政に磨げられつゝあつた東北省民は舊政權と絶縁の上、新政府を組織し、民衆の福祉を基調とする理想的樂土の建設を要望するに至り、殊に張學良の錦州假政府潰滅後に於いて獨立國家建設の氣運は益々濃厚となつて來た。此の機に際し臧式毅、趙欣伯、干冲漢、袁金鎧、熙洽等各要人は新國家の政體及び行政方針等に付鋭意研究の歩を進め、獨立國家の建設に備ふる處あつた。一方哈爾濱地方に於ける張作相系反吉林軍の反亂起りしも、吉林剿匪の爲めに討伐せられ北滿の時局略安定を見るに至つたので後臧式毅は熙洽、張景惠、馬占山、湯玉麟等の外蒙古哲里木盟長齊默特色木丕勒及び呼倫貝爾副都統凌陞等とも連絡して新國家建設の協議を遂げた。昭和七年二月十七日改めて奉天に巨頭會議を開き種々熟議の結果獨立國家建設の過程として、先づ各省の代表者を以て東北行政委員會を組織することとなり、委員長に張景惠を委員に臧式毅、熙洽、馬占山、凌陞、齊默特色木丕勒を挙げ、馬占山を黑龍江省長官に推すに決した。即日東北各省各縣政府（後に公署と改む）に對し本會の成立を通電すると共に、翌十八日東北行政委員會の名を以て左の東北獨立宣言書を發表した。

事變以來六ヶ月間人民の苦痛眞に筆紙に盡し難し。斯くの如き人民の苦痛匡救の道を講ずる爲め我等は人民に推舉され、茲に相集り慎重考究の結果團結して舊政權との關係を離脱し、東北四省

は獨立して行政委員會を組織し、此の委員會を以て凡ゆる政務を執行す。舊軍閥を打倒し、王道政治を行ひ、機會均等、門戸開放主義を實行し、減税を行ひ、善政を施し、以つて民衆の安寧幸福を計らんとす（以下略）

斯くの如くにして新國家は從來の如き軍閥の私慾的自立と選を異にし、民衆の意志に依つて作られたものであることを明かにしてゐる。又自國だけが此の區域に立籠つて利益を貪らんとするのでなく、各國人に等しく開放して幸福享愛に均等な機會を與へるに吝ならざることを示してゐる。

二 奉天省政府の成立

事變後奉天省政權を代行せる袁金鎧は積極的に省政府を組織せんとするの熱意を缺いて居たが、其の後大勢は漸く舊政權と離脱して、新に省政府を組織せんことを要望するに至つたので、趙欣伯等各界代表者等は元遼寧省政府主席臧式毅を奉天省長に推戴した。茲に於て十二月十六日臧式毅は愈奉天省長に就任し、即日地方維持委員會を解消して省政府を組織した。翌十七日奉天省政府省長臧式毅の名を以て「奉天省政府已に成立し式毅は農、工、商、紳各界の推戴に依りて十二月十六日遂に奉天省省長に就任す」云々の布告を發した。斯くして事變以來幾多の難關に逢着せし奉天省政權樹立問題も漸く確立するに至つた。

三 國號と執政及年號の決定

東北行政委員會に於ては東北法律研究會内に於て連日會議を開き、慎重審議の結果愈新國家の國號、國旗、年號共

の他の重要事項全部を決議した。即ち新國家の名稱を「滿洲國」と定め、元主を「執政」と呼稱し、年號を「大同」と號し、國旗は新五色旗を用ひ首都を長春(三月十四日新京と命名された)に定むることに決定し、之を奉天、吉林、黑龍江、熱河の各省政府哈爾濱特別區行政長官公署、呼倫貝爾都統、哲里木盟、昭烏達盟、卓索圖盟の各盟長公署に通電するに至つた。

次いで東北行政委員會は新國家組織に關する各部官制其他重要事項を決定し、三月一日清朝の紀元當日に於て愈滿洲國政府の名に依り建國宣言を發した。此の宣言の中に「三千萬民衆の意向を以つて即日中華民國と關係を離脱して滿洲國を創立す」とある。之に依りて新國家が呱呱の聲を下げたのであつて、永久に記念すべき一語である。此の宣言が滿洲國政府の名を以つて公布された最初の公文である。此の宣言文は堂々數千言の長きに渉るものであるが、大別して前後二段に分れ、前段は新建國理由を陳べ、後段には新國家の抱負を明かにしてゐる。然して新國家の抱負中、教育は禮教を崇ぶこと、政治萬端に王道主義を實行すること等を説いたのは最も注意すべきことである。蓋し輕佻な新思想に驅られて、古來の禮教を蔑視するのが近代支那の弊所であるから、主として之れを改めんとするのである。斯くして王道主義を鼓吹して東洋固有の政治主義の精神に歸せんことを示したものである。

第四節 滿洲國の成立

一 宣統廢帝溥儀氏を執政に推戴と建國式

昭和七年三月一日愈々豫定の如くに滿洲國は成立し、同時に新國家組織の大綱を中外に宣言するに至つた。而して一方新國家の元首問題に付いては東北行政委員會に於て數次に亘り審査熟議の結果、三千萬民衆の要望する宣統廢

帝溥儀氏を推戴することに決定し、奉天代表馮涵清、吉林代表張燕卿、黑龍江代表趙仲仁、蒙古代表蘇寶麟、呼倫貝爾代表凌陞、東省特別區代表葆康の六氏が推戴使として三月一日旅順に溥儀氏を訪れ、出廠を懇請する處があつたが、溥儀氏は重任に堪へざるの故を以て一應之を辭退したが同月四日前記の六特使は更に各地各界の代表を加へて宣統廢帝溥儀氏を訪問し改めて新國家執政推戴書を捧呈し、三千萬民衆の總意を以て再度出廠を懇請したので溥儀氏も遂に之を容れて新滿洲國の執政たることを承諾した。茲に於て同月六日溥儀氏は鄭孝胥等を從へて旅順を出發し、途中湯崗子の對岸閣に滞在の上、同月八日新政府より派遣せる迎接使一行と共に特別列車に乗じて湯崗子を出發し一路長春へ向つた。斯くて同日午後長春に安着し、三月九日午後三時より長春市政公署假政府に於て執政親任式は極めて嚴肅に舉行せられ、引續き庭前に於て國旗掲揚式を行つた。今左に當日の執政宣言文を附記することにする。

人類は須く道德を重んぜよ。然るを種族の見あれば則ち人を抑へ己を揚ぐ。而して道德薄し。人類は須く仁義を重んぜよ。然るを國際の争有れば即ち人を損じ己を利す。而して仁愛薄し。今我國を立つ。道德仁愛を以て主と爲し、種族の見、國際の争を除去せむ。王道樂土當に之を實事に見るべし。凡そ我國人たる者共に之を勉めよ。

〔19〕
此の宣言文は極めて簡明に新國家建立の意義と其の抱負とを陳べてゐる。即ち新國家建立の理由は人類の幸福を造る爲に新國家の執るべき政治の根本則を道德と仁愛とに置き而して結局實現せんと欲するものは王道樂土であ

[20]

ると云ふのである。故に新國家建設には王道を主と爲し種族の見を断ち國家の争を想はず四海同胞世界大同の主義に依りて世界の模範國を作り、此處に樂土を顯現して、以て人類の幸福を造成せんことを期すと云ふのであつて、高き理想と大抱負とを披瀝したものである。

二 對外宣言

斯くて滿洲國は三月十二日外交總長謝介石の名に依り日、英、米、佛其の他十七ヶ國の外務大臣に宛て、通電を發した。此の宣言文には獨立宣言の己むなき理由を述べ、而して新國家の内政の要領を披瀝し以て外政の原則を詳細に陳述して、列國が速かに新國家との外交關係を開始せんことを希望する旨を陳べてゐる。今左に新國家の外政の原則を陳ぶることにする。

- ◎ 國際信義を旨とし、和衷協同の精神を以て、世界平和の維持増進を期すること
- ◎ 國際法規、慣例に従ひ、國際正義を尊重すること
- ◎ 諸外國に對して中華民國が負ふべき條約上の義務は之を繼承し、誠實に履行すること
- ◎ 諸外國人の滿洲國領域内に於て有する既得權を侵害することなきは勿論、其の生命財産を完全に保護すること
- ◎ 諸外國人の滿洲國に來往することを歡迎し、各民族に對しては平等公正なる待遇を與ふること
- ◎ 列國との通商貿易を容易ならしめ、世界經濟の發展に貢獻すること
- ◎ 諸外國人の滿洲に於ける經濟活動に關しては廣く門戸を開放するの主義を遵守すること

第五節 滿洲事變の效果

一 總 說

滿洲事變の推移と發展について細心の注意を怠らぬ者は、事變の結果が形而上及び形而下、いかに高價なる効果を皇國に齎らしたかを理解すると同時に皇國の滿洲國支援の意義を正解して、滿洲國の前途に一大光明を認めてゐるが、事變の推移と發展に對する注意を缺きあるいは故らに耳目を蔽ふるの徒は、滿洲國の經濟的發展の前途を悲觀し、皇國財政の重荷を唱へ故意に滿洲國の發展を阻害せんとする傾きがあることは眞劍なる舉國一致を要する今日まことに遺憾とすべきである。極めて簡明にいへば、滿洲事變前において、最大な懸案とされてゐた滿鐵を立枯れにせんとする目的をもつて敷設された滿鐵並行線及び皇國の滿洲發展につき重要な使命を有する吉會線敷設問題が自然に解決したとけでも特筆大書すべき大きな收穫ではないか。さらにこれを各項目にわたつて具體的に説明すれば自ら滿洲事變の效果の偉大なことに驚嘆するのである。

二 邦人進出阻止原因の解消

[21]

然して事變前までは、舊東北政權のもとに於て、邦人は公々然と支那官憲の壓制と妨害をうけ、我が國旗のもとに見るに堪へない屈辱をうけたもので事變前までの懸案實に二百數十件に達してゐる。その二三の例をあぐれば、昭和三年四月十日長春(新京)東方の邦人宅に突如支那兵卅名が現れて同家に使用する支那人を非國民呼ばはりにして拘束監禁し同家の營業を不能に陥らしめた。また昭和四年三月十七日、吉林省教化在住の邦人が經營する旅館に對し教化警察署は何等の理由なく突如營業を禁止し立退きを命じた上、館主たる邦人を不法拘禁した。この種の壓迫

〔22〕

は枚舉に迫ないが、最も有名なのは滿洲事變勃發の一誘因とさへ目される萬寶山事件で、之は隊を組んだ支那兵が我が同胞たる朝鮮人農作者に發砲して、其の耕作を不能ならしめたものである。事變後之等の壓制と妨害は全く根絶せられた。

三 中央銀行設立と幣制の統一

尙ほ事變前には不換紙幣が濫發せられ、その結果物價の變動常なく、在滿邦商は絶えず不測の損害に見舞はれ、小資本の邦人は殆んど破産の状態にあつたが、滿洲國の成立に依つて、確實なる基礎の上に中央銀行が設立せられて幣制が統一せられ、その發行新紙幣であるところの所謂「國幣」の價値が安定したので、在滿邦商は確實な營業方針を立つることが出来ると共に、我が國の資本は、安心して滿洲に投下せらるゝようになった。

四 關稅自主權と邦品の進出

南京政府が、日貨排斥の目的で極端に引きあげた高率關稅の爲め對滿輸出を阻止せられてゐた本邦商品は、滿洲國が關稅自主權を行使して以來、從來の不當な壓迫から逃れ本邦商品の滿洲進出を漸次増大して來た。現に滿洲各地に於ける邦商は非常に活況を呈し來たり、又滿洲向き輸出品の製造工業及び輸出業者は頓みに好況に恵まれ、國富増進の上に多大の貢獻をなしつつある。

五 邦人保護の強化

日滿議定書によつて、皇軍が全滿各地に駐屯し得るようになった結果、在滿邦人に對する保護が強化せらるゝと共に、皇軍の駐屯に付隨する邦人の在住が著しく増加しつつある。殊に交通の便利な滿鐵沿線の主要都市は邦人の活

動活潑を極め至るところ邦人進出の目醒しさを見受ける。現に昭和六年末の在滿邦人は十一萬三千五百五十人であつたのが、昭和八年三月末日には十五萬一千六百六十二人(軍隊を含まず)となり實に三萬六千六百六十二人の増加を示してゐる。そしてそれは日に月に増加しつつあるので、今日の統計は更に増加してゐると見てよい。

六 邦人活動區域の擴大

滿鐵の三倍にあたる滿洲國々有鐵道が、我が滿鐵の受託經營に移り總て同社に依つて統一せられるに至つた結果、邦人の活動區域は全滿の鐵道網に擴大するに至つた。更に目下交渉中の北滿鐵道が滿洲國に讓渡されるに至つたならば、熟練せる邦人の従業者多數を要すべく目下内地にあつて就職難に喘ぎつつある人々の捌け口としても絶好の機會である。現に滿鐵に於て鐵道省より採用したる従業員は、昭和七年に於て百一名だつたのが昭和八年中には既に四百四十四名を採用し、又同社が定期採用に依つて内地から採用した専門學校卒業者は、昭和六年僅かに六十七名であつたのが昭和八年には既に百八十三名を採用してゐる。これらの事實は單に生活の安定を得るに止まらず邦人の精神作興の上に至大の好影響を及ぼすものである。

滿洲國の建設が邦人の滿洲に於ける活動を、いかに活氣付けたかを如實に物語るものは、別項記載の如く在滿内地人の増加である。左に其の具體的事實を示して邦人の動向を明かにしよう。但し此の人口の増加は我が關東州内の内地人が移動したるものではなく、はるゞ日本から海を越えて渡滿したものである。

〔23〕

(七年末現在、外務省調査)

管轄領事館

増加數

昭和六年末

昭和八年三月末

奉天總領事館	一三、六六八	四七、五六七	六一、二三五
新京總領事館	七、五七六	一七、四六四	二五、〇四〇
哈爾濱總領事館	三、五六七	四、一五五	七、七一八
チチハル領事館	二、六〇七	三六八	二、九七五
間島總領事館	一、九八二	二、四三六	四、四一八
錦州領事館	一、四六五	〇	一、四六五
吉林總領事館	一、六七八	九四八	二、六二六
安東領事館	一、二〇六	一一、五七〇	一三、七七六
赤峰領事館	九一〇	〇	九一〇
鐵嶺領事館	八五六	五、八八四	六、七四〇
牛莊領事館	七〇一	一〇、五一四	一一、二二五
鄭家屯領事館	四八八	二六二	七五〇
滿洲里領事館	三一〇	一七四	四八四
遼陽領事館	減四〇二	一一、二二二	一〇、八一〇
合計	三六、六一二	一一三、五五〇	一五〇、一六二

尙ほ關東州に於ける内地人の人口増加数は左の通りである

昭和六年末	昭和七年末	増加數
一一九、七七〇	一二五、九三五	六、一六五

以上の増加人口約四萬三千人は、事變前の八年間の増加總數に匹敵してゐるところより推測すれば今後滿洲に進出せんとする邦人の急激なる増加は想像にあまりある。

七 各種事業界の勃興

滿洲經濟建設の進行と、日滿經濟プロツクの發展に伴つて、各種事業は隆々として興り、殊に日滿合辦會社の設立は日滿人の融和提携を促進する楔となると共に、當然各方面の専門家及び其の他従業員が洪水の如く滿洲進出となることはいふまでもない。殊に全滿を營業區域とする滿洲航空會社及び滿洲電信電話會社の設立は、右の情勢を一層助長するに至るであらう。又滿洲國政府の法制が完備するに従ひ、商法、鑛業法、商標法及び特許法等が近代的となり邦人の滿洲に於ける活躍に對して何等の不安も不便も感じないにされるのである。

八 朝鮮統治に好影響

更に又滿洲事變の大きな收穫として朝鮮統治の上に好影響を與へたことを特記すべきである。事變前に於ては朝鮮人の多くは眞に皇國の實力を知らず、彼等の事大思想は、やゝもすれば皇國の地位を蔑視してゐたが、滿洲事變勃發以來皇國が舉國一致、敢然として自主獨往の旗幟を鮮明にし、快刀亂麻を斷つが如く、群がり起る國難に善處する有様を見るや、皇國に對する尊崇思慕の念漸く顯著と成り、朝鮮人も亦列國に優越する日本人である自負心を抱懐するようになった。殊に朝鮮人の多くは滿洲事變の一因は、在滿鮮人問題であるところの萬寶山事件にあると信

じ、且皇軍の滿洲に於ける活躍は在滿百萬の鮮人同胞の解放と、之が安住保護にあることを確認し、皇軍に對し敬慕と信頼と感謝の念をいやくこと厚く國防献金及び恤兵金の寄付も頓に増加し、その献納總人員八十萬人中約五十萬人は朝鮮人である。殊に青年等は時局の刺戟を受けて名譽ある軍人に採用されたいといふ熱烈なる希望を有し、間島出兵の際の如きは「我等もまた日本人なり、日本人の男子にして戦争に行けぬとは面目なし」とて、憲兵に申し出でた位で出動軍隊又は死傷軍人が朝鮮鐵道を通過する際、深夜の驛頭にこれを送迎する白衣の同胞あること常にして、朝鮮人の皇國に對する觀念は滿洲事變を契機として、根本的に改更せられたのである。現在滿洲にある朝鮮人の人口は、我が在滿各領事館の調査によれば、昭和六年には六十三萬人で、毎年平均二萬一千人づゝの増加を示してゐたが、昭和七年の初め頃から舊東北軍の敗殘兵や、事變のどさくさにあはれ出した兇惡な匪賊の爲めに耕地を失ひ、財物を掠奪され生命を脅かされて歸國するもの續出し、末には五十九萬五千余に減じた。然るに最近全滿の治安が維持されて來たので、再び入滿する者が多くなつた、支那側の理不盡なる彈壓があつた時でさへ毎年二萬余の増加を見てゐたことから推測すれば、今後に於ける朝鮮人の入滿は目醒しいものであらう。斯くて此に内鮮人及び滿洲人の渾然たる融合による理想郷が建設されて行くのである。

第六節 滿洲國經濟建設綱要の公表

滿洲國政府は建國一週年記念日に當り、過去一ヶ年間の調査並に研究の結果に基き確固たる成案を得た「滿洲國經濟建設綱要」を公表し以て經濟建設への歴史的な第一歩を踏み出す重大聲明を發した、而して右建設綱要は正しく滿洲國經濟建設十ヶ年の計劃とも稱すべき畫期的プランで經濟建設の全分野に亘り、堂々その所信、成案を披瀝し其

の實現を期したもので其の聲明書全文は左の通りである。

一 序 説

今や建國一週年記念日に際し、ここに經濟建國の方針を確立し健全なる歩調を以てこの理想實現の歴史的な大事業に第一歩を踏出さんとす、ここに敢へて其の根本方針並に建設計畫の綱要を示し官民協力實行邁進の基準となす、然して本綱要は永年に亘る大計なるを以て近き將來に關しては、別に計畫を策定しこれを公表するところあるべし。

二 經濟建設の根本方針

我が國經濟の建設に當りては無統制なる資本主義經濟の弊害に鑑み、これに所要の國家的統制を加へ資本の効果を活用し以て國民經濟全體の健全且つ發達たる進展を圖らんとす、右大目標に到達するため次ぎの四大根本方針の下に經濟建設に邁進するを要す。(一)利源開拓、實業振興の利益が一部階級に壟斷さるゝの弊を除き萬民共榮ならしむ、(二)重要經濟部門には國家的統制を加へ合理化方策を講ずる、(三)廣く世界に資本を求め特に先進諸國の技術經驗、凡有文明の粹を集めて之を適切有効に利用す、(四)東亞經濟の融合合理化を目的とし先づ善隣日本國との相互依存關係に鑑み同國との協調に重心を置く。

三 經濟統制方策

現下の情勢上實現可能にして最善なる手段として次の範圍で國民經濟の統制を行ふ。

- 一、國防的若しくは公共、公益的性質を有する重要事業は公營又は特殊會社をして經營せしむるを原則とす。
- 二、右以外の産業及び資源等各般の經濟事項は民間の自由經營に委す。

[28]

四 交通の充實

- 一、鐵道 (イ)鐵道建設は經濟開發を主眼とし併せて國防の安固及び治安の維持を期す(ロ)將來鐵道の總延長は二萬五千キロを目途とし今後十ヶ年間に先づ四千キロの新線を敷設し既設のものとし總延長一萬キロに達せしむ(ハ)主要鐵道は國有とし統一經營す。
- 二、港灣 (イ)我が國經濟開發を促進し生産地方と海港とを最も經濟的に連絡する(ロ)營口、安東の兩港に所要の改修を加ふ(ハ)葫蘆島の築港工事は將來經濟上の要求切實を加ふるの時に完成す(ニ)海運は差當り近海航路の充實をはかる。
- 三、河川 河川の重要性に鑑み黑龍江、松花江、鴨綠江及び遼河に於ける河運の便を増進す。
- 四、道路 (イ)主要都市相互間及び主要都市と縣城間を聯絡する爲めの路線其の他の未開地方の開發及び國防等の必要に屬する路線等總計約六萬キロを十ヶ年間にこれを新設または改修す(ロ)自動車交通を發達せしむ。
- 五、通信 有線無線の電氣通信を統一。
- 六、空運 滿洲航空會社に經營せしめ差し當り今後三ヶ年間に航空路約三、五〇〇キロを開拓し更に將來歐亞及東洋各地間航空路の開拓に努む。
- 七、都市計畫

五 農産の開發

- 一、農産業 (イ)我が國國民經濟は農産を以てその根幹とす(ロ)農産の改良増殖
- 二、畜産業 (イ)家畜頭數の増加とともに品種の改良を行ふ(ロ)家畜の改良増殖(ハ)家畜衛生制度を確立(ニ)牧野の改良
- 三、林業 (イ)林業は森林の濫伐を抑制しこれが保護増殖に努め合理的經營によつて林力の保續を圖るを主眼とす(ロ)新林場權の發放を中止し今後五ヶ年を期して林場權の整理を行ふ
- 四、水産業 (イ)漁業 孵化養殖により資源の涵養に努め濫獲を戒む(ロ)製鹽業 鹽田の整備擴張を行ひ鹽業の發達を期す
- 五、農業經營改善
- 六、農業施設改善
- 七、土地

六 鑛工業の振興

- 一、方針 基礎工業及び國防工業の確立を圖り國民經濟を豊富ならしめ國富を増大せしむるを以て方針とす
- 二、鑛業 (イ)石炭諸炭鑛を統一し合理的生産と供給とを行ひ輸出の増進を圖る(ロ)國防鑛産資源は原則として特殊會社をして其の鑛業權を確保せしむ(ハ)砂金及び金鑛は國有のものとし然らざるものとに區分す
- 三、工業 (イ)左記工業の統制(金屬、機械、油脂、バルブ、曹達、酒精、柞蠶、紡績、製粉、セメント、醸造)(ロ)前記以外のものは將來必要に應じ統制す(ハ)電氣事業は統一經營を行ふ
- 四、施設 (イ)左記の地方に工業地域を設定す(奉天、安東、ハルビン、吉林附近)(ロ)工業品の規格を統一す

[29]

七 金融の整備

- 一、滿洲中央銀行は速かに付業を整理し通貨の調節安定を計り専ら金融の統制に任ず
- 二、産業組合 金融組合等各種庶民金融機關並に一般金融機關の整備を計る
- 三、農工業の特殊金融機關を設立し割増金付債券の發行を特許
- 四、彩票の發行は政府自ら行ふ
- 五、郵便貯金制度を改善

八 商業の助長

- 一、一般商業の助長奨励
- 二、新に特許法 商標法等を發布し工業所有權の保護を計り寄託、保險等の法制を定め度量衡の制度を統一し取引所の制度を改善
- 三、關稅政策

九 私經濟の改善

私經濟を改善し民力培養に努め自治、隣保、扶助の美風を作興普及の方策を講ず

十 結論

本計畫をもつて進めば現在我が國總生産額卅億圓は十年を出でずして倍加するを疑はず況んや尙將來に於ける國力の増大は期して待つべきものあらん、然りと雖も前記初期の方針の實行に於ても巨額の資本と優秀なる技術及び國

民一致の協力を必要とす、其の經濟建設資金は廣く之れを世界に求むると共に國內に於ては主として中小資本の吸收到に努め國民全般の福利増進を主眼とし技術的指導またこれを中外に求むべし。

第七節 滿洲建國一周年の祝典

一 國都新京に於ける慶祝の日

大同二年三月一日は滿洲國建國一週年に相當し榮えある民族共和の五色旗が輝かしき第二歳の春を迎へた、國都新京のこの日の式典は午前九時城内民政府前廣場で催された、而して鄭總理以下各部總長始め日滿官民が威儀を正して入場を終へれば先づ軍樂隊が新國歌を吹奏續いて國旗掲揚、參列諸員の敬禮、金市長の開會の辭、執政府代表の教書敬讀、鄭國務總理の訓示、丁鑑脩大會幹事長祝辭、武藤大使祝辭、萬歲三唱閉會の辭のプログラムで行はれた斯くして式典終了後は滿洲國官吏一千名、學校生徒五千名、滿洲國軍、一般民衆約一萬名の參加する滿洲國としては空前の日滿合同大旗行列が民政府前から軍樂隊を先頭に滿洲國歌、新京市民歌を高唱、五色旗を打ち振りながら全市を練り歩いた。

二 關東軍司令官の祝辭

關東軍司令官故武藤信義大將は滿洲國建國一週年記念日に際し左の如き祝辭を發表し慶祝の意を表した

大同二年三月一日、滿洲の天地生氣橫流し、光明充滿す、維れ建國の一週年記念日、都鄙、大に盛典を擧げ官民齊しく、維新を謳ふ

惟ふに、滿洲の國土は、天の斯民に賜ふ所なり、三千萬衆、皇天を拜して新國を建つ、宣言して曰く、王道を國土に布かん、友誼を四海に厚うせんと、こゝに基年なり、言些も違ふ所無し

列國、實狀を識らず、聯盟正義に昏く横議し盲動して終に新國を認むるを否む

天道昭たるあり、滿洲道有らば民自ら榮えん、若し道無くんば國自ら亡びん、天に順ひ人に應へざらんことを之怖るゝのみ、また列國と聯盟とを恐るゝこと無し

それ、外に患あり、内また建設の難なきに非ず、然と雖も正義猶存するを誰か疑はん、況んや俊徳の人、政を執り練達の士局に當るあるをや、前程洋々、期すべく待つ可し

こゝに建國一週年を迎へ、喜悅自ら禁ずる能はず、所懐を披瀝して祝辭となす

第三章 日滿兩國の史的關係と其の結束

第一節 同胞流血の聖地

思ひ出だせば今はそれ昔の物語り、日露の國交斷絶して東洋永遠の平和の爲に滿洲の野に開戦の火蓋は切り落されし明治三十七年の交「こゝは御國の何百里離れて遠き滿洲の赤い夕陽に照らされて友は野末の石の下……………」は

今更の如くに我が同胞の胸裏を突くことであらふ。而してその滿洲は、黄金狂の夢描く對象としてではなく、我が殉國同胞幾多の志士埋骨の地として嚴肅に認識されなければならない。明治二十七八年の日清戦役、明治三十七八年の日露戦役、そして今次の滿洲事變と云ひ、日本は三度、皇國の興廢を賭して滿洲の野に大敵を向ふに廻して勇敢に戦ひ十二萬の生靈と、巨億の國帑とを犠牲にしても、日本は最後まで滿洲を死守して來たのである、即ち滿洲に關する限り、日本は何時も命がけであつたし又今後も然りであらふ、實に日本の生命線滿洲、東洋平和の搖籃滿洲であることはそれが日本國民の總意であり、大日本帝國の國是である。何んとなれば局限された東亞の一島國を以てして、無限に増大しつゝある人口をどうすればいゝのか而も日本の天然資源は、もはや日本國民の將來の生活を保證する事は出来ない。このまゝに推移すれば、一億の日本國民はたゞ坐して死を待つより道はあるまい。併し日本及日本國民は生きなければならぬ。それは絶對絶命の問題だ、切實な願ひである。斯くて、生死の境に立つ日本は、歴史的にも、宿命的にも不離不即の關係に立つ滿洲に於て率直に生存權を主張し、その生命を培ふ外に道はないのである。

抑々八萬方里の廣茅と、豊かな天然資源に恵まれた滿洲と提携する事によつてのみ、はじめて日本は國防的にも、經濟的にも存立し得られるのだ。誰かこの本能的な必然的生存の慾求を阻止する事が出來やう。以上斯くの如き經濟的事務より見るも、正に滿洲は日本の「生命線」であり日本の「心臓」である。さればこそ滿洲に於ける、日本の、この特殊性を否認するものは、又日本の生存權を否認するものでなければならぬ。即ち、それは明らかに日本の五體を爆破するものと斷じなければならぬ。

我等は事新らしく戦争の追憶は忌はしいと思ふ、併し日清・日露の兩役と滿洲事變こそは日本と滿洲の因果關係を如實に物語るものであつて即ち日清戦役は、國防の危機に直面した日本の正當防衛であり日本の奮起の意氣は、遂に老大支那を屈伏し、東洋平和の保證として遼東半島の讓渡を受けた。併し乍ら日本は、理不盡な露・獨・佛三國の干渉に遭ひ、同胞の鮮血に軋られた遼東半島を再び敵手に渡さなければならなかつた。斯くして十年後、日本の生存を依託すべき滿洲の野には、露國の軍事鐵道がT字形に走り、旅順を始め滿洲の要所は盡く武裝されてゐた。そして、露國の飽くなき極東併呑の領土的野望は更に朝鮮半島に伸びんとし、日本の國防は累卵の危きに瀕した。露國に對する日本國民の十年間の痛憤は一時に爆發した。即ち明治三十七八年有史以來未曾有の大戦は日露兩國間に勃發した、日本は舉國一致、國運を賭し、滿洲の曠野に強敵露國を全滅させた。

爾來滿洲は日本に依つて完全なる平和と異常なる文化の恵みに浴するを得たが日本は滿洲に何等現實の權利々益を持つてゐなかつた。併し、支那が露國の蹂躪下に捨て、顧みなかつた滿洲に對して、支那よりも、もつと緊切な利害關係を感じてゐたればこそ、支那が捨て、顧みない滿洲の地を十萬の生靈と二十億の軍費を犠牲としても、露國の手から奪還せすには居られなかつたのだ。即ち日本は滿洲の守護神であつて若しも、當時日本が奮起しなかつたなら、今日滿洲にはロシアの赤旗が翻つてゐたに違ひない。だが、日本の望むところは、領土ではなくてたゞ生命線滿洲の平和であつた。そして日本は、二年間の苦戦の代償として、僅かに露國から引ついで長春(今の新京)大連間約七百軒の鐵道を基調として愈々滿洲開發の首途に上つたのであつた、而して露國の滿洲經營が軍事的、排他的であつたのに引代へ、日本は凡てに開放的であり、一意滿洲の文化經濟的開發を目ざして躍進したのであつて日本

の海外投資の大半は殆ど滿洲に投ぜられた。爾來滿洲の産業は跳躍的に開發され、最近では、外國貿易額に於ても日露戦争前後の約十倍即ち年額六億圓内外に激増し内亂になやむ支那本土から逃避して來る漢人移民によつて其の人口も二十年前の約二倍、即ち三千四百萬を算するに至つたのである。

第二節 開放された滿洲國の鳥瞰

一 大同維新の覇業

舊支那軍閥によつて、嚴密な封鎖状態に置かれた滿洲は、過去四半世紀に亘る、我が日本國民の、他意なき經濟開發の純眞な努力にも拘らず、其功績の多くは黙殺され、更に極端な排斥を受け、三千萬民衆の要望する尺度に迄、此の國の開明が普及されなかつたばかりでなく、彼等軍閥の飽くなき苛斂誅求に依つて、民衆の生活は却つて極度に疲弊し、住民は持久力、向上心等を喪失しつゝあつた。「滿洲事變」後急速に新しき「國」の創建が行はれたことは天意民心の歸趨の齊しく合致したるものと云ふべく、この「大同維新」の輝かしい功績は、かくして國の住民大衆をして、永遠の生命獲得のコースへ踏み込ませ、牢乎たる新記録を國の歴史の第一頁へ印刻せしめた。この劃期的大變革は、滿洲三千餘萬の一般民衆へ、多大の刺激を與へ、將來の目標を確立させたが疾くに此の邦土へ移住し、廿數ヶ年の長きに亘つて、此の地域の住民と協業を續け、互助扶掖を怠らなかつた我が日本人にとつては、確乎たる希望を、その前途に當つて認識された。我が國が去る昭和七年九月十五日に列國に先立つて、此の新國家を承認したことは、我が國民の決意が如何に強固なるものであるかを明示して居る。日清の役に於て、我が國は一旦、遼東半島の全域を領土として完全に獲得したることあるのみならず、日露の役後引續いて兩國間の自由意志に基く、此

の國開發に關する、我が國人の分擔事項として、幾多の條約の締結されたにも拘らず、これ等の條約はその實施を阻止せんための舊支那軍閥の惡計によつて、「空文」に終り、兩國間には常に、之を材題とする葛藤が絶へなかつた。滿洲事變の遠因も亦、こうした支那軍閥の排他的謀計に起因せずと、誰か斷言し得ようか。然れ共、これ等は過去の物語りにすぎなくなつた。今日、又は今後に於ける希望を喚ぶ凡ゆる事象は、此の國、無限大の資源の開發と共に好轉することが見通され、更に永き過去に示された我が國人の實績と、これに伴ふ滿洲人大衆の強き信頼とは澎湃として、全滿洲へ湧興しつゝある事實を覆すことは出来ない。

然して滿洲に於て我が日本人は條約に據り、農、畜、山林、礦、水産等、原料資源の開發につき、夫々に權益を得て居るが、是等の範圍は、今後甚だしく擴大され、滿洲國人同等の待遇を受けるであらう。今茲に過去に於ける日本人の業績を検すれば、その農業にあつては、日本側の熱心な改良助成に因つて、此の國の特産物であつて、世界的商品として知らるゝ大豆と其製品を始め、凡ゆる穀物類の増收法と販路の擴張とが講ぜられ、多くは好成績を擧げて居る、又畜産の改良、その製品の販路擴張水産業に於ける漁獲法の急激な發達等、世界に於ける業界の進歩に伴れて、進歩向上しつゝある實績は諸統計の明示する所である。隨つて最近に於ける産業の進歩に齎らした日本人側の科學的貢獻は、文字義通りに偉大そのものであつて廣茫七萬五千方里に亙る、全滿洲國の領域へ遍ねく行き渉ることの阻止されて居た、凡ゆる障壁が滿洲國の成立と共に撤廢された今後は、凡ゆる事情が順調に、これまで試みられた狭小の地域に於て得られたる各種の成績方途を基準として、全滿洲へと擴ろげ得られることは明らかとなつた。斯くて今後の産業開發に當つて、考慮さるゝは、秩序維持の成否如何であるが、これに就ては、匪賊の漸次

窒息と相俟ちて、保境安民の實が、擧げられつゝあるのは、喜ぶべきである。又各種工業の開發に關しては、國內に於ける原料の豊富及需要の多大なるの悉くが、例外なく發達するといふ、簡單な事例通りにも行かないが、日滿兩國の關係を考慮して此の國の工業の發達が、計畫せられ、且つ具體化されつゝあるのみならず、將來有望なる工業國として、やがて世界的反響を喚起するに至るであらう。

二 日滿共存共榮の實現

「日滿共存共榮」といふ標語、は久しく提唱され來つたにも拘らず、舊軍閥の偏見的壓迫により日本側からの、滿洲支那人側への、一方的な呼びかけに終始し、何等の反應なきまゝに、默殺されて居たかの觀を呈してゐたが滿洲國成立と共に、この呼びかけは、俄然滿洲國人側の、甚だしき共鳴を喚起することとなり、今や、單に此の標語が唱和されるばかりでなく、あらゆる階級、團體が各種の方法を以て、その一元的結成へと努力しつゝある。

斯くて、日滿兩國は恒久の親善を保證し得る最も樞要なる要素として兩國經濟關係の緊密な聯結を計ることは何人も否み得ないところであらう。そのために、提唱されつゝある兩國の經濟統制に當つては原料、勞力又は販路の問題の他に、兵備秩序維持機關等特殊の事情が介在し、更に、幣制、關稅等の問題があり、門戶開放、機會均等の實を示すための、第三國への問題等が絡つて居るが兎に角兩國互に「有無相通する」の實を示すことが肝要であり、その足らざるを補ひ、及ばざるを助け合ふことが、第一義的根本觀念である。

このために、各種商工業上、兩國民の協力、日本農業移民問題の永久的落着、隨つて兩國々民生活の等しき安定等に就て、多大の期待が、かけられるが、此の事業完成への第一歩へ踏み込んだ其日に於て、東方の諸國間に、人

口食糧問題の喧騒たる論難の聲々は後を絶ち、東方永遠の樂土成立の基準が把握されると共に、やがて世界を脅す戦争の不安に對する解消劑として、全世界を擧げて歡喜されねばならないこともある。大同元年昭和七年九月十五日、我が國は滿洲國を承認した而して當日左の如き日滿議定書が聲明された。

○日本國ハ、滿洲國ガ、其ノ住民ノ意思ニ基キテ自由ニ成立シ、獨立ノ一國家ヲ成スニ至リタル事實ヲ確認シタルニ因リ

○滿洲國ハ中華民國ノ有スル國際約定ハ、滿洲國ニ適用シ得ベキ限り、之ヲ尊重スベキコトヲ宣言セルニ因リ

○日本國政府及滿洲國政府ハ、日滿兩國間ノ善隣ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ニシ互ニ其ノ領土權ヲ尊重シ、東洋ノ平和ヲ確保センガ爲、左ノ如ク協定セリ

1. 滿洲國ハ將來、日滿兩國間ニ、別段ノ約定ヲ締結セザル限り、滿洲領域内ニ於テ、日本國又ハ日本國民ガ、從來ノ日支間ノ條約協定其ノ他ノ取極及公私ノ契約ニ限り有スル一切ノ權利、利益ヲ確認尊重スベシ

2. 日本國及滿洲國ハ、締約國ノ一方ノ領土及治安ニ對スル一切ノ脅威ハ同時ニ、締約國ノ、他方ノ安寧及存立ニ對スル脅威タルノ事實ヲ確認シ、兩國共同シテ、國家ノ防衛ニ當ルベキコトヲ約ス之ガ爲、所要ノ日本國軍ハ、滿洲國內ニ駐屯スルモノトス

即ち日滿共存共榮を高唱し來つた我が國民が、この隣邦滿洲國の出生に當り、列國に先立つて、斯くの如く承認を與へたことは、兩國國民將來のためと、又世界平和の爲に慶賀すべき事であると共に永遠に記念すべき事でもある。

第四章 滿洲國帝政の樹立

第一節 溥儀執政の祖先

今回滿洲國第一代の帝位に即かれる溥儀氏は大清帝國の最後の皇帝で一九一〇年即ち宣統三年辛亥革命の結果退位されたものである。溥儀氏の祖先は、乾隆皇帝の上諭に「わが朝姓を愛親覺羅氏といひ、國語に金を愛親といふ、金源同派の證となすべし」とあり一般に愛親覺羅氏となつてゐる。

愛親覺羅氏 は種族上通古斯種に屬してゐるがらむかしの蘇囑の後裔で、金、渤海等と同じ民族であらう、金とい國が一―一五年におこり一時は現在の滿洲國から北支那黃河以北を統一して後、元に亡ぼされて以來、通古斯種の勢ひ振はず滿洲部、長白山部、東海部、扈倫部の四部落に分裂した、愛親覺羅氏は右のうち長白山部から起つたのである、清朝の實録によるとその王室のおこりに次のやうな神話的傳説が載せてある。

金の末期、長白山の東に布庫里山があつてその麓に布爾瑚里湖といふ池がある、その池に天女三人が浴してゐると神鵲が赤い果物をふくんで飛び來り、一番年若い佛古倫女の衣物の上に置いた、佛古倫がその果物を食ふと孕んで一男を産んだ、その兒が成長してから母は孕みの由來を語り「お前愛親覺羅をもつて姓とあし、布庫里雍順と名のことによせよ、天がお前を私に生ませたのは、亂れきつてゐるこの國を定めるために違ひない、往いてこれをよく治めよ」と、そこで母に別れて小舟に乗つて、流れに従つて下り、岸に登り坐してゐると、その地に三つの姓を名のるものあり互に雄を争うてゐた、三つの姓のものはそこで相議して愛親覺羅を國主に奉戴することとなつた、そこ

〔40〕
で長白山の東方の凱多力城にをり、國を滿洲と號することになった。

その後數代を経て、**肇祖皇帝**(東州都督孟特穆)赫圖阿拉に居を定めた、赫圖阿拉は今の奉天省東邊道の興京である、肇祖四世の孫は興祖で、次いで**景祖**、**顯祖**を経て**太祖**奴爾哈赤に至つた、これが實に溥儀氏の祖先である。

太祖奴爾哈赤の創業を完成したのが聖祖康熙帝、しかし高宗乾隆帝は清朝中興の祖として知られ、世人はこれらの諸帝を清朝三傑といつてゐる、清朝は北方の荒地に興つた民族であるから漢人の懦弱に似ず皇帝といへども勇武、騎馬、射術に巧で、しかも學問をおろそかにせず、清朝の文化は今なを燦然として民國に輝いてゐる、今滿蒙の天地即ち清國の故國に再び清朝の後裔が新に君臨し、清朝時代の文華が開かんとする時、これ等三人の傑出せる祖先の遺業を回顧して見よう。太祖奴爾哈赤に五人の兄弟があつた、十歳の時慈母を失ひ、繼母に育てられて人となつたが、山に登つて人蔭や松の實の類を採り、これを撫順の町に賣つて糊口の資とした、この苦難の間に太祖は心身を練り漢人に對する知識を得、傍ら三國演義や水滸傳を愛讀したが、このことと二祖の横死したことが太祖をして發憤興起の念をさかんならしめたといつてよい、萬曆十一年春亡父顯祖の舊部下を集め起つて尼堪を攻撃した尼報が甲板にのがるゝや、さらに甲板を攻撃したが、尼堪はまたもや身もつて逃れ、萬曆十四年七月漸く黨爾渾城で討取ることができたこれより太祖の名は大いに揚り蘇子河の諸部落を逐次併呑した、當時撫順の西北にある開原には哈達、葉赫の二族あり、北方に輝發の納喇氏あり、太祖は一時これらと修好に努めたが、萬曆十六年意外にも

董鄂部の強大なる援助があつたので、太祖は鴨綠江一帯から長白山東北の諸部落をみなその支配下に入れ、これを打つて一九となし、いよく哈達、葉赫の二族を窺ふことができるやうになつた、殊に哈達、葉赫の二族ともに内訌があつたので、太祖は萬曆二十一年哈達を取り、萬曆四十年秋に至り吉林地方で覇を稱してゐた烏拉を討ち、萬曆四十四年(一六一六年)五十八歳にして興京においてみづから可汗の王位についた。

然して太祖歿後その第四子太宗位に即き即位三年錦州城西南十里松山、杏山の間に於いて大いに明軍を破りさらに直隸、山東の地を侵すこと十余年討征の半途に死し、その第九子僅に八歳にして位に即いた、滿洲國の建國が張學良の殘存政權錦州政府を倒したのを機會としたと併せ考へる時、滿洲側にとつて錦州は實に歴史的重要地點である。世祖即ち順治帝である。

康熙帝(聖祖)は清朝第四代の皇帝で世祖の第三子である、父世祖支那に入つて北京に都し、明の皇室南に逃れたが支那統一の業未だ全からず帝九歳にして位をついた、賢母名臣の熏陶と天資の英邁により帝王たるの天分を十分に發揮し内國政を統一し外邊疆を規征してこれを克服した英明の君主である、康熙元年吳三桂兵を進めて緬甸に入り明の遺族桂王を獲へて三桂これを害して明全く亡びた、在位六十一年、清朝の創業全くなり文化燦然として内外に輝いた。

〔41〕
乾隆帝(高宗)は清朝第六代の皇帝で世宗の第四子である、乾隆元年(一七三六年)即位し祖父康熙帝の遺業を繼ぎ準萬爾を平げ、金川を掃ひ、廓爾喀を降し、回教徒を平定し、台灣を鎮め、ビルマ、安南また相ついで服屬入貢し國威大に振うた、また言路を開き、人材を擧げ、科擧の制度を定めた、在位六十年の間は清朝の黄金時代、清朝全

盛の頂點にあつた、しかしそのうち清朝の衰運の時が廻り來り、宣統帝退位が宣せられたが帝は數奇の運命を辿りながらその少、青年時代を修養に努め王者の徳を養ひ滿洲に君臨せられるに至つたことは慶賀に堪へぬ次第である

第二節 帝政建國の由來

一 極東の新帝國出現

白色世界を横斷して東洋の一角にアジア復興の正氣燃えて、アジアは師表日本帝國及びシヤム帝國の外に新しく滿洲帝國を加へた。この帝國の出現は、ゆがめられ混亂した世界の淨化と平和に偉大な役割を演ずべきことは眞に一大事實であらふ。而して滿洲混迷の間を衝いて誕生した滿洲國が、學良没落後の焦土に著々地歩を堅め産業を興隆し執政溥儀氏の徳望あまねき、遂に建國わずか二年にして天意と三千万民衆の要望惜く能はず帝位に推戴され、世界史上に一頁を加へて愈々最初の皇帝の位につき新帝國は終に出來上つたのである。

二 溥儀推戴の理由

惟ふに執政溥儀氏を皇帝に推戴せんとする運動は滿洲建國の當初から熱烈に希望されてゐた。かの九・一八事件の結果、學良政權の没落から極度の混亂に瀕した滿蒙は袁金鎧氏等奉天地方維持委員會の成立に續いて各地に獨立した治安維持委員會が成立し、吉林の熙洽氏洮南の張海鵬氏ハルピンの張景惠氏、ホロンバイルの貴福氏等の獨立後全滿各地要人間では新局面に適應した新滿洲國建設の運動が起つた。

偶々天津にあつて中華民國の迫害下にさらされてゐた英明の宣統廢帝を迎へて帝政を布かんとする論者も多かつたしかし一方においては滿洲建國と同時に一舉に帝政を布くには種々なる事情上國民の要望が統制されてゐなかつた

ので暫定的形式の國家を作ることになつた。

斯くして昭和七年二月十四日熙洽氏の奉天乘込みを始めとしてハルピンの張景惠、チチハルの馬占山、奉天の斌式毅、趙欣伯の諸氏等奉天に會同し、十六日深更まで人目をさけて場所をかへ、いはゆる滿洲建國會議を聞いた。こゝでも猛烈に帝政か否かの問題が盛んに論議されたが、結局一般國民の要望に依る元首として溥儀氏を迎へることに大體意見の一致を見たので建國に至る重要事項を規定する過度的機關として東北行政委員會が設けられ、十九日の委員會で新國家の元首に溥儀氏推戴を滿場一致を以て可決した。

先是、滿洲建國運動起るや各地から溥儀氏の出處を求める聲は高まつて來た。當時天津地方は九・一八事件の影響で民心極度に動搖してゐたので、溥儀氏に對する流言蜚語亂れ飛び、北支政權及び南京政府は猜疑の念を深くしてゐた際として溥儀氏は天津の混亂に乗じて滿洲に逃避した受難時代であつた。斯くの如くに劇的な天津脱出後の溥儀氏は夫人等と旅順の肅親王家にあつた。孤忠よく廢帝を援けた鄭孝胥氏、その子鄭垂氏等も絶えず従ひ、一門の二格三格兩令妹等も後から一行に加つた、この頃滿洲の溥儀氏出處を求める使者來往したが、そゝ器にあらずとて辞退された。

その後執政は湯崗子に閑雲野鶴を友として、宗祖の威徳を偲んでゐたが東北行政委員長、張景惠氏等が再三再四出處を懇請し、三月四日張燕郷、葆康、凌陞氏等各界代表三十名が三千万民衆線意反映した推薦狀を携へて面會出處を懇請するや溥儀氏は民のためにたゞれ、

今豫め國人と約す、愚昧勉強してしばらく執政に任ずる。一年の、ちもし員越多ければ進んで賢路

を避けん、もし一年のうち憲法成立し國體決定し素志と相合すれば再び當るに徳を度り途中を定むべし、もしそれ合はざれば即ち辭退すべし。

とて執政就任を承諾され、三月九日夫人二格、三格の御令妹、鄭孝育、鄭垂氏等のほか各省應請代表六十名を従へて執政推戴式に望むべく湯崗子發新京に向はれた。

三 執政就任と帝制運動

爾來惡軍閥の苛政搾取に焦土と化してゐた滿洲には美しい芽が伸びて、めざましい勢ひで復興し新成長を續けた。「我が國は道德仁愛を以つて主となす」執政は常にこの言葉を以つて國民に望んでゐた。

斯くて三月の建國後、わづか數ヶ月にして滿洲各地は勿論北支、蒙古にある滿洲族人および清朝に恩惠を受けたものは溥儀氏を皇帝と呼び、滿洲帝國を翹望して止まなかつた。

然して昭和七年十月末には熙洽、榮厚、金壁東、林鶴の諸氏新京に集まり、次第に深刻化した帝政運動につき協議し、續いて熙洽しを主座に艾蘊芳、伊里春等を中心とした後の滿洲同志協進會ならびに林鶴氏を中心とした後の民衆生計會が異体同心的帝政運動が猛烈となり、各地に火の手は上つた。帝政要望の原因ともいふべきは次の通りである。

- 一、現滿洲國民は執政制度の滿洲國なるものを疑惑の眼を以つて觀察し民心の動搖の兆あり。
- 二、國際聯盟の滿洲國獨立不承認は要するに國體の確立なきため第二の朝鮮視せられる。
- 三、建國當初共和國としたるも暫定的でかつ建國會議においても帝制尙早論者も稱號は執政なる

も實質は皇帝なりといつたほどでその後も實體は獨立的ではなかつた實狀にあつた。

四、執政の任期問題の解決によつて執政を永久的になし續いて國體の決定をなすべきものである斯くの如くいはいゆる執政の建國大綱の上の任期問題を中心に執政の徳を仰慕してやまぬ滿洲人の間に擡頭し、一方政府要人中にも清朝側近者、張動復僻運動者、滿洲族人等の帝政論者がこの運動に協力せざるを得ない情勢となり一時は勢ひの赴くところ如何ともしがたい情勢にあつた。

當時帝政問題は清朝復僻であつたがその後、清朝の復興を目的とする滿洲族人中心主義の復僻派と滿洲各民族協和主義による純然たる帝政派と對立し帝政派は復僻派を結局滿洲族人中心主義にすぎずかれ等は民族協和に反すると呼んだ。

斯くの如く帝政運動の二潮流が滿蒙の大平原に火の手をひろげてゐるとき、滿蒙は匪賊横行し諸建設もまだくといふ情勢にあつた上帝政運動を名として私慾を満たさんとするなど不純な動機に發したものに對する反對的思潮が流動してゐた。更に

一、滿蒙各地は二十年來の張家二代の惡政によつて疲弊困憊し、專制に對する恐怖が民衆の頭にしみ込んでゐるので、急速に帝政をしけば、これを以つて專制と誤認し、且つ十分民衆がなれてゐないため反動者のつけ込む機會を作る危険がある。

二、君主はその地方に特別の關係と恩惠を與へて人民としても全國民一致の推戴でなければなら

ない。然るに目下のところ全國民が國體問題に觸れるほど余裕はない。

三、この混沌としたときに國體の決定、共和制を改めて君主制とすることはいけない。といふ理由から滿洲國當局も人民の要望を受けかねてゐた。しかし運動はこれによつて止つたわけではなかつた。一方執政が元首になつて以來、粗税は軽減され、治安の確保進み、文明の恩澤は次第に光被して行き昭和八年に入つて全く滿洲の樂土としての見透しがたつた。

斯くて國民はこの元首を敬服してたゞ「溥儀氏を我等の皇帝に」と叫び、その清願書は八年夏以來鄭國務總理の机上に堆く積まれた。

現代支那は帝政に比し世風廢頹し民衆深淵にあるは支那民族性を省みぬ共和政体と自由平等の乱言による。貧官汚吏は徒らに昇官發財を夢見て、元首交替は朝三暮四の状態にさへある。われ等人は人徳高く仁慈深い執政を皇帝に推戴する。それは滿洲文化の教へるたゞ一つの永久的國家の道である。

とて世論は日々に沸騰し、小乗的復讐による帝政ではなく滿蒙諸族協和の帝政を布き溥儀氏皇帝に推戴はたゞ一つとなつた。かくの如くにして滿、漢、露、朝鮮各民族のあらゆる國體から、更に遠くは日本各地、北平を中心に、北支那一帶、チチハル、外蒙古の住民からまでも皇帝推戴請願狀が集まり、今や内外の民論、要望は何人の手によつても止め得ざる情勢となつたのである。

四 第一世皇帝に即位

顧みるに昭和七年三月一日、滿洲國が最初の産聲を擧げて新旗幟も鮮かに國邦新京に建國の大典を舉行してから茲に滿二年、此の間王道樂土の大理想をめざす滿洲國の歩みは國民をあげて血涙の奮闘的難道であつた。即ち對内的には邊陲各地の匪賊なほ跳梁してこれが平定に寧日なく殊に熱河討伐には我が皇軍と協力して、つぶさに辛苦ななめ亦對外的には昭和七年十月いち早く日本の承認を得、日滿議定書の成立を見たが國際間の疑惑嫉視は解くに由なく光榮ある孤立を守る日本と共に非常時の難艱を共にした。

然もこの内憂外患の中にあつて新興國の毅然たる國礎は一步もゆるがず、専ら安業樂居の大目標に邁進し今や國內の治安全くなり財政經濟の基本定まり國際間に、確固たる地歩を築くに至つた。

斯くて我が隣邦國たる大滿洲國はいよゝゝ大同三年三月一日(同日康德と改む)天意と内外の民論により遂に帝政を實施し若き帝政溥儀氏を大滿洲國第一世皇帝に君臨するに至つたのである。

第三節 滿洲國曠古の大典次第

一 郊祭の御儀

郊祭の御儀は一日午前八時二十分順天廣場に於て壯重嚴肅裡に行はれた。當日長くも三日間潔齋遊ばされ陛下には、早朝御起床遊ばされ、齋戒沐浴東天に太陽を拜して香を焚き身を潔めさせられ、長袍の上に掛を御着の上滿洲古式の質素な御祭服で午前八時御居間を出でさせられ承光門前で御召自動車に乗御、警備車九臺、オートバイ六臺の公式鹵簿にて宮門出御、大馬踏を経て、朝日通りを眞直ぐに抜け八嶋通りを横斷、大同大街を曲つて軍樂隊の奏

樂裡、諸兵指揮官王克沈少將の號令下一同捧銃の最敬禮裡に大同廣場を右に御通過、一踏順天廣場の式場に向ひ午前八時十五分式場に着御、鄧總理大臣以下特任間任の諸官及び地方代表等並に外賓は或は燕尾服或は青馬掛に深藍長袍の滿洲國大禮服を着用して整列、謹みて奉迎申上ぐれば陛下には中央の白砂を敷きつめた御通路上に玉歩を運ばせられ天幕内の御幄次に入御休憩、その間に文武百官參列員は祭場内に肅列し、豫め入場せる愛刈大使以下の外賓又所定の位置に就き、午前八時二十分、百一發の皇禮砲が殷々と轟く中に陛下には掌禮官御恭導の下に三百二十尺四方の柵内黄幕を以て包まれた方百二十尺の中央部に設けられたる高さ七尺の天壇上に登らせられ、南面して御定位に就かせ給へば院祀官はその向を南に轉じて立ち、同時に燔柴迎神の儀が嚴かに行はれ、續いで陛下には神案の前に進ませられ玉を薦し帛を薦して御定位に復し拜禮を行はせられ、終つて再び神案の前に進ませられ三爵（御神酒）を獻じ祝文を獻じ給ひて定位に復し拜禮を行はせられ、此時奉禮官は恭しく卓上に安置された壺を捧ぐれば陛下には親しく之を受けさせられ再び奉禮官に授け給ひ、典贊官送神の儀を行ひ、司玉官玉を奉じて退かれ、更に陛下には禮を行はせられ送燎の儀ありて午前八時四十分滞りなく郊祭の式典を終へさせられ御座幄次に還御、暫く御休憩あらせられた。外賓、文武百官その間に壇下を退出、奉送の定位置に就くや陛下には靜かに御座幄次を出御し給ひ午前八時五十分お召自動車に乗御、行幸路を逆に途中奉拜者の禮を受けさせられつゝ肅簿整然、宮中に還幸あらせられたと洩れ承はる。

滿洲國々歌

天地内有了新滿洲（タイエンテイイーネーコーワヤンシンマンチヨウ）
 新滿洲便是新天地（シンマンチヨウビエンシンテイエンテイイー）
 頂天立地無苦無憂（テイインテイエンリータイイーウークーウーユー）
 造成我國家（ツアオチヨウウオクオテン）
 只有親愛並無怨仇（テーユーチンアイビンウーユアンチヨウ）
 人民三千萬人民三千萬（レンミンサンチエンワンレンミンサンチエンワン）
 縱加十倍也得自由（ツンチャーシーペイイエートウツュー）
 重仁義尙禮讓（チヨンレンイーシヤンリーテン）
 使 我 身 修（シウオシヨウシユウ）
 家 己 齊 國 己 治（チャイチークオイチー）
 此 外 何 求（ツワーイホーテユー）
 近之則與世界同化（チンテーツォーユ？シーチエートンホワ）
 遠之則與天地同流（ユアンチーツーユーテイエンテイイトンリユー）

二 登極の御儀

〔50〕
登極の御儀は一日正午宮中勤民樓に於て行はせられたがこれより先午前十一時四十五分我が菱刈大使を初め外賓並に文武百官威儀を正し式場に参列を終れば陛下には陸軍式大禮服を召させ給ひ軍樂隊の奏樂裡に勤民樓に入御便殿に御休息の後正午大禮官恭導、侍從武官長等を徒へさせられ諸員敬禮の裡に式場に臨御玉座に登らせ給へば参列員一同恭しく最敬禮を行ひ躡て陛下には詔書に御璽を鈴し給ひ給音朗らかに之を宣誥し續いて年號を康徳と改元し給ふ、終るや鄭總理は徐に前進し謹んで賀詞を奏上し、續いて聲高らかに陛下の萬歳を三唱すれば参列員一同又之に和す、茲に於て鄭總理は恭しく詔書を拜受して舊位置に復し、参列員一同と共に再び最敬禮を行ふ、かくて午後零時二十分大禮官恭しく式の終了を奏すれば陛下には折柄起る劉曉たる奏樂と諸員の最敬禮裡に入御あらせられ参列員亦續いて退下こゝに慶ばしき即位大典の第一日の式を擧げさせられた。

御即位改元詔書

晴れの登極の儀に當り新皇帝は文武百官を始め三千萬國民に對し皇帝御署名、鄭國務總理大臣外各大臣副署の下に詔書(滿洲文)を降されたが日本文に譯せば次の如くである。

奉天承運ノ皇帝詔シテ曰ク

我國、其ヲ肇メ國ヲ滿洲ト號シテ茲ニ二年、天意ノ愛民ニ原キ友邦ノ仗義ニ頼リ、其始メ凶殘虐ヲ肆ニシ安忍

兵ヲ阻ミ無辜天ニ縮フモ能ク自ラ振フコトナカリシニ、日本帝國群疑ヲ冒シテ避ケス、衆咎ヲ犯シテ辭セス、事ハ解懸ニ等シク功ハ援溺ニ同シ

朕親躬ヲ以テ乃チ天眷ヲ承ケ、我ニ尺柄ヲ假シ我ニ丘民ヲ授ケ、流亡漸ク集リ其謳歌ヲ興シ、兵氣潛銷シ化シテ日月トナル、夫レ皇天親ナク惟タ德是レ輔ク、而シテ生民欲アリ主ナケレハ乃チ亂ル、位ヲ正サンコトヲ圖請シ詢謀僉ナ同シ、敢テ天命ヲ敬承セサランヤ、其大同三年三月一日ヲ以テ皇帝ノ位ニ即キ改メテ康徳元年トナシ仍ホ滿洲ノ國號ヲ用ユ、世難未タ艾キス何ソ敢テ苟安セン、有ニル守國ノ遠圖、經邦ノ長策ハ當ニ日本帝國ト協力同心以テ永固ヲ期スヘシ、凡ソ統治綱要成立ノ約章ハ一ニ其舊ノ如シ、國中ノ人民種族各異ルモ此レヨリ心ヲ推シテ腹ニ置キ利害ヲ與ニ共ニス

此言ヲ渝エサル曠日ノ如シ

朕カ命ヲ替ルコトナカレ

咸ヲシテ聞知セシム

康徳元年三月一日

勅 語

朕親躬ヲ以テ祗テ天眷ヲ承ケ寅テ國基ヲ建ツ實ニ兩年以來貴國ノ熱誠ナル援助ノ致ス所ニ由ル今登極ノ令成ルヲ以テ特ニ饗宴ヲ設ケ貴大使及在座ノ諸君ト一堂ニ歡叙シ朕カ心深ク欣悅ヲ感ス近時一般ノ議論咸テ謂フ貴我兩國ハ共同利害ノ關係ヲ以テ結合スト是實ニ一種ノ淺見タリ朕思フニ我東洋傳統ノ精神ハ惟タ道義眞誠ヲ以テ主トナシ固ヨリ僅ニ利害關係ニ止ルノミナラス此ノ後當ニ貴國上下ト至誠ヲ以テ相貫注シ以テ共存共榮ノ實現ヲ期シ東亞永久ノ和平ヲ維持シ庶幾ハ以テ兩國群衆ノ期望ヲ慰メンコトヲ此ノ一觴ヲ舉ケ敬テ貴國大皇帝陛下ノ福踐昌盛ヲ祝シ並ニ貴大使ト諸君トノ勳業日ニ高カランコトヲ祝ス

御名御璽

康徳元年三月二日

國務院 布告

國務總理大臣鄭孝胥氏は三月一日國務院布告第一號をもつて左の如き布告を發表した。

茲ニ恭シク皇上登極ノ大典ニ逢ヒ普天率土ト共ニソノ慶ヲ同シウスルノ日ニ方リ本國務總理大臣欽ミテ聖諭ヲ請ケ敕令ヲ奉行シテ解網ノ仁德ヲ洽クセルホカサラニ恩綸ヲ拜シ孝子節婦ヲ表彰シ古老ヲ敬式シテモツテ禮俗ヲ淳ウシマク慈善事業ヲ獎勵シソノ發達ヲ翼成スヘク恩賜財團ヲ設置シサラニ中央社會事業聯合會ニ命シテ貧民ヲ救恤シ無告ノ氓ヲシテ同シクソノ惠ニ沾ホサシメ加フルニ文武ノ官職ニアツテソノ身ヲ建國ノ業ニ殉シタルモノノ遺孤ヲ追養シテ遺族ヲ撫恤スヘク等シク國土ヨリ支撥シ天滋ノ遺漏ナク皇澤ノ普及ヲ圖ルヘク具サニ案ヲ具シテ有史ニ飭令シモツテソノ徹底ヲ期セル薄海ノ民咸克ク一視同仁幸麻ヲ體シ相俱ニ更始一新ノ德政ニ與ランコトヲ特ニ茲ニ布告シ咸ク衆知セシム

康徳元年三月一日

國務總理大臣

鄭總理帝制實施宣明

帝制實施とともに鄭國務總理大臣は康徳元年三月一日左の如き布告を發シ全國民に對して帝制實施を宣明した。爲佈告、茲ニ恭シク皇上登極ノ大典ニ逢ヒ普天率土與ニ其慶ヲ同ジフスルノ日ニ方リ本國務總理大臣欽テ聖諭ヲ承ケ敕令ヲ奉行シテ解網ノ仁德ヲ洽クムル外更ニ恩綸ヲ拜シ孝子節婦ヲ表彰シ耆老ヲ敬式シテ以テ禮俗ヲ淳ウシ慈善事業ヲ獎勵シ其發達ヲ翼成スヘク恩賜財團ヲ設置シ更ニ中央社會事業聯合會ニ命ジテ難民ヲ救恤シ無告ノ氓ヲシテ同シク其惠ニ沾ハシメ加フルニ文武ノ官職ニ在リテ其身ヲ建國ノ業ニ殉シタル者ノ遺功ヲ追褒シ

ヲ遺族ヲ撫卹スベク齊シク國帑ヨリ支撥シ

天慈ノ遺漏ナク膏澤ノ普及ヲ圖ルベク具ニ案ヲ具シテ有司ニ飭命シ以テ其徹底ヲ期セリ薄海ノ民皆克ク一視同仁ノ鴻庥ヲ體シ相與ニ更始維新ノ德政ニ與ランコトヲ特ニ此ニ佈告シ咸ヲ週知セシム

康徳元年三月一日

國務總理大臣

三 御饗宴の式

御盛典を終へさせられた新皇帝は三月二日及び三日の兩日に亘つて内外の使臣百僚をお召しになり饗宴を賜はられたが二日正午よりの第一饗宴には菱刈大使、小林駐滿海軍部司令官、小磯關東軍參謀長、岡村同參謀副長、關東軍各兵團長、林滿鐵總裁並に地方官民代表等百有餘名御召しの光榮に浴された。而して御饗宴の式は官中勳民樓上に於て莊重に行はせられ陛下より御勅語を賜はり、これに對し菱刈大使參列員一同を代表して祝詞を上申、終つて軍樂隊の奏樂裡に御宴は開かれ、瑞兆天地に漲り和平祝福の大氣の裡にめでたく第一日を終り次で第二日の第二饗宴には三日正午から鄭總理以下約百四十餘名をお召しになり、同様御饗宴を賜り、鄭總理大臣祝詞を上申して饗宴を開き、軍樂隊の奏樂裡に宴を終つた。

(註) 郊祭の起原 郊祭の起原は遠く夏、殷、周三代の上古にあつて皇帝を南郊に祀る祭典をいふ、細別すると告祭、配祭、祈年祭の三つとなるが時としては告祭と配祭とを兼ね行ふ場合もある、大體告祭は立君、建都、

封國の如き國家的大典の場合にこれを行ひ配祭は天子の祖宗を天に配して奉祀する時これを行ひ祈年祭は多至の日南郊において行ふところの祭である、郊祭の精神とするところは禮記に「帝を郊に祭るは天地を定むる所以、社を國に祀るは地利を列する所以、故に禮、郊に行はれて百神職を受け、禮、社に行はれて百貨極むべし、天によつて天に事へ、地によつて地に事へ、名山によつて成れるを天に告げ、吉土によつてもつて帝を郊に享す」と明記してある、今回新京の南郊順天廣場において行はれる、郊祭は即ち天子即位の告祭である。

國務總理大臣賀表

國務總理大臣臣孝育文武百官地方代表等ヲ率キ恭シク奏ス、

伏テ以ミレハ萬方后ヲ俟ツ幸ニ景運ノ維レ新ナル四海昭蘇シ聖明ノ御極ヲ企ム、謳歌スル者畢ク虞舜ニ歸シ、亭育スル者モロモロ神堯ヲ仰ク、乾軸ヲ旋ラシテ坤維ヲ正シ龍興ヲ迎エテ日馭ヲ廻ヘス、欽テ惟ミルニ皇帝陛下神開ノ教智、天稟ノ英明、廿載ノ龍潛、上天ノ大任ニ契シ、一朝ノ雲蔚、曠代ノ皇圖ヲ興シ天心人民ニ協應シ繼統垂統ヲ宏開シ允ニ明命ヲ承ケテ、載チ乾符ヲ握リ、雨露復區ニ澤及シ、日月宸極ニ昭臨ス、臣忝ク台柄ヲ司リ幸ニ龍飛ヲ觀ル、適マ享嘉ニ際リ能ク鼉抃スルナカラシヤ、千官ヲ率テ賀ヲ行ヒ海宇ノ垂清ヲ喜ヒ萬姓ヲ引テ以テ嵩ク呼ヒ生民ノ濟ルアルヲ慶ス臣等誠敬抃表ヲ率リ以テ聞ス

[5:6]

第四節 帝政實施と各國への宣明

滿洲國政府は帝制實施と共に日本政府を除く世界七十一ヶ國の各外務大臣宛、外交部大臣謝介石の名を以て光輝ある滿洲帝國の成立を通告し將來滿洲國との外交關係が強固に進展する事を切望する旨併せて聲明した、通告正文内容次ぎの通りである。

本康德元年（一九三四年）三月一日我が滿洲國においては執政滿洲帝國皇帝として即位しこゝに帝政が實施せられたるを貴國政府に通告するの光榮を有す

本大臣はこの機會において貴國との關係が將來良好に發展せん事を切望するものなる事を聲明す

康德元年三月一日

滿洲帝國外交部大臣 謝 介 石

尙ほ謝外交部大臣は對外宣言を發表し帝制確立の眞意義を宣明した、宣言の全文次の通りである。

滿洲帝國皇帝は天に順ひ人に應じ康德元年三月一日新京において皇帝の位に即かせらる、本大臣は謹で即位の盛儀を鄭重聲明す、我が滿洲帝國三千余萬人の人民は大同元年において軍閥顛覆の余に乗じ暴政を脱離し獨立を宣言す、隣邦日本帝國は東亞の和平を保存するためその善意に基き務めて援助を與へ我が滿洲國をして安全なる獨立の國たらしめたり、この年三月十二日日本大臣はかつて外交總長の名義をもつて正式に各國に通告す、今に至る既に兩歲の久しきを経、有らゆる建國の方略は世界立國の基本原則に依據し衝を追うて進行し一切の企劃制度燦然として大に備はる、こゝにおいて兩稔の中勞集り嚙々民その業に安んじ集成時に應じ人和し、年豊なり、こゝ

に省市の民衆は天位の表現に基き切に君あるを望み一致勸進す、この國礎日に強固を奏するに當り正に宜しく名を正し分を定め長く國威を定め大に宏圖を啓き以て東方新興の王道國家の基礎を固むるは實に東亞の和平維繫する唯一の容圖をなす願るに我が滿洲帝國皇帝は天を奉じ運を承け滿洲帝國を新創ししかして第一代の皇帝となる自ら清國の復辟と迥然同じからずかつ中華民國の國民と毫も猜嫌の意味なし、我が滿洲帝國は唯正に我が疆土を固め我が黎民を統治し新組織法並に將來の憲章に準據して勵精治を圖り以て王道樂土を完成し東亞の和平を維持すべし、大同元年三月十二日通告の外交宣言は新滿洲帝國尙將に努力履行し信義を渝ゆるなく天命を尙び、民心を安んじ干戈を化して玉帛と爲し萬邦和協の章を謳はんとす、恭しく大典に會ひ特に茲に聲明す

一 我が政府帝國確認の公文書交換

滿洲國は一日帝制を實施し第一世皇帝御即位の盛典を執り行ひたるにつき、同日午後三時新京にて滿洲國國務總理大臣鄭孝胥氏と日本帝國駐滿特命全權大使菱刈大將との間に公文書を交換した、右日滿兩國間の交換公文書は同日午後四時外務省で公表されたがその全文は左の通りである、

來 翰（譯文）

以書翰啓上致候。陳者本總理大臣は滿洲國においては康德元年三月一日執政滿洲帝國皇帝の位に即かれこゝに君主制樹立せらるゝに至りたることを閣下に通報し且閣下よりこれを貴國政府に傳達せられんことを希望するの光榮を有し候。本總理大臣はこの機會において兩國間に存する特別且緊密なる關係が益深厚ならんことを希望致候

右申進旁本總理大臣はこゝに重て閣下に向て敬意を表し候 敬 具

[57]

康德元年三月一日
日本帝國特命全權大使 菱 刈 隆 閣下
滿洲帝國國務總理大臣 鄭 孝 胥 印

往 翰

以書翰啓上致候。陳者本年三月一日付貴翰を以て滿洲國に於ては康德元年三月一日執政滿洲帝國皇帝の位に即かれこゝに君主制樹立せらるるに至りたる趣御通報の上之を帝國政府に傳達ありたき旨御申越相成敬承致候。本使は帝國政府の訓令に基き帝國政府においては右御通報の趣を了承するを欣快とする旨閣下に回答するの光榮を有し候。本使は此の機會に於て兩國間に存する特別かつ緊密なる關係が益深厚ならんことを希望致候。右申進旁本使はここに重て閣下に向て敬意を表し候。 敬 具

昭和九年三月一日
日本帝國特命全權大使 菱 刈 隆 印
滿洲帝國國務總理大臣 鄭 孝 胥 閣下

聖上御祝電

滿洲國新皇帝康德皇帝めでたく登極の大典を擧げさせられた趣きは康德元年三月一日午後菱刈駐滿大使から外務省を経て宮内省に公報があつたので式部職では直ちに鈴木侍從長を経て天皇陛下に奏上、陛下には同皇室の御繁榮を祈らせられ直ちに新皇帝に對し御祝電を御發送あらせられた。

聖上陛下に新帝より親電

康德元年三月一日我が聖上陛下より滿洲國皇帝に對し御懇篤なる御祝電を寄せられたるに對し二日新帝は聖上陛下に宛てられ左の御返電を發せられた
大日本國大皇帝陛下
朕天眷ヲ承ケ陛下ノ愛助ニヨリ滿洲國基ヲ着定シ茲ニ帝位ヲ踐ミ懇摯ナル祝詞ニ接シ奉リ感謝ニ堪ヘス併セテ陛下ノ福躬康泰ト國運ノ蕃昌ヲ祝シ兩國ノ交誼益々親睦ヲ増サンコトヲ祈ル
康德元年三月二日
御名 御璽

二 滿洲帝國に對する我が國民の總意

◎ 湯淺首相の賀辭

滿洲國は本日をも以て帝制を布き溥儀執政閣下新に九五の御位に登らせらるゝ事になりました事は私共の中心より慶祝に堪へぬ所であります。滿洲國の建設せられてより早くも二年、國勢日に隆昌に赴き今こゝに郊祭の典を擧げ國體を確定せらるゝに至つたのであります。友邦三千萬民衆の歡喜はまことに想像に余りあるのであります。

思ふに滿洲の地は我が領土に隣接し我が國とは極めて緊密なる關係に在るのであつて相互に共存共榮を以て進まなければならぬ事は申すまでもありません。今日以後兩皇室の御間柄は益々和親を加へさせらるべく、その關係は東洋平和の増進に向つて歩武を進めらるべきを思ひ欣快の情に堪へませぬ、こゝに遙かに本日の御盛典を祝し併せて新皇室の御繁榮と滿洲國の健全なる發達を祈つて止みませぬ。

◎ 齊藤内閣總理大臣の賀辭

滿洲國においては愈々今日をも以て新皇帝陛下御登極の大典が舉行せらるる事になつたが、我々日本國民としても善隣友好國のこの慶賀すべき御大典の日に當り衷心からの祝意を表する次第である。滿洲國は建國以來滿二ヶ年間に於いて著々と建設の歩を進め今やその前途は洋々たるものがあが今次新皇帝陛下の御即位に依り國礎更に磐石の重きを加ふに至つたことは獨り滿洲國のためのみならず東洋平和のため祝賀に堪へない所である。

◎ 廣田外務大臣の賀辭

滿洲國においては建國後二年の短期間に益々その搖ぎなき國本を固め庶政を大に更張したが今日その第三年を迎ふ

るに當つて國基を奠め皇帝陛下登極の盛典を見ることは天意の命する所人民の希求と符節を合したものであつて滿洲國の爲に全力的支持を吝まなかつた善隣日本としては殊に慶祝の情に堪へないものである。

想ふに新皇帝陛下がその執政閣下時代、民の勞を勞とし民の喜を喜として日夜盡瘁せられたる徳望と功績とは新國家の大父たるに相應しいものであつた。

今陛下の登極に依り滿洲帝國の國礎は愈々固く王道善政の前途益々輝きを加ふるであらう、しかしてその建國宣言において示されたる趣旨に従つて隣邦諸國との親善關係が増進せられんか、東亞平和が確保せらるゝこととなり世界福祉の爲め祝賀すべきであると思ふ。

◎ 衆議院の滿洲國帝制祝賀

一日の衆議院本會議は午後一時三十五分開會まづ秋田議長起立して隣邦滿洲國は本日をもつて皇帝即位の式を行けるに當り慶賀に堪へざるものがあるつてはこゝに院議をもつて祝賀の意を表したいと思ふとて賀表案文を讀みあげた、而して其の賀表文の内容は次の通りである。

「滿洲國肇造二閱年、制度著々整備し國礎彌堅く今や天意に順ひ民望に應じ茲に帝制を布き建國の吉辰をトして即位の式を行ふ洵に慶賀の至りに勝へず莫くは益々健全なる發達を遂げ日滿兩國相頼り相携へ與に偕に東洋の平和と國際の進運に寄與せむことを茲に本院の決議を以て滿腔の祝意を表す」

◎ 東京日日新聞社説

昭和九年三月一日即ち康德元年三月一日の東京日日新聞社説は次の通りである。

わが普隣の友邦滿洲國は本日記念すべき建國二週年の佳日をもつて待望の帝政を布き、執政溥儀氏は國民歡呼の裡に登極して、滿洲國皇帝の位に即かれるのである。即ち午前八時國都新京において郊祭の儀を挙げ、天の命を受くる承運の典を修め、ついで正午崇嚴なる登極の儀を行つて、ここに近世歴史に殆ど類例なき光輝ある一大新帝國が東亞の天地に出現するのである。

しかして滿洲帝國の建設は、たゞに國土相隣するのみならず、その肇國の前後より密邇殆んど離るべからざる關係を有し、さらにまた恒切に亘つて提携互助、東洋の平和と世界の康寧のために勵むべき運命のもとに相繋がるわが國民の欣快に堪へないところである。

二

滿洲建國の由來については、今更練かへすまでもない。暴戾無道、橫征苛斂の極を盡くした前政權が、正義と懲惡とに高鳴る皇軍の馬蹄の下に、冬の枯葉と四散した後、滿蒙三千余萬民の熱望はおのづから凝つて創國の企圖となり、溥儀氏は民衆の簞食壺漿に迎へられて執政の位置につき、こゝに巍然として基礎堅き一大平和郷の建設發程となつたのである。爾來二星霜、溥儀執政の猷身的努力、これを輔佐する百僚有史の啓沃、さらにはまたわが日本の國運を賭しての援護誘掖のもとに、治安は漸次に確保せられ、庶政は伸張し、文運は興隆し、財政は次第に良好に向ひ、その基礎漸く堅く、農耕は進み、産業は發展し、庶民鼓腹擊壤、仁政を謳歌する有様で、順天安民の建國の理想は、徐々に、しかも確實にその實現の歩を進めつゝあるのである。數十年來極東禍亂の醜穢地として憂患の種

となつてゐたこの地がかやうな樂土に變じたことは平和に眷戀たるものゝ何人も慶賀せざるを得ないところである

三

今日の盛儀に際し、我等は新皇帝陛下に對して、深厚なる敬意を表せざるを得ない。陛下は我が皇紀二五六八年、幼冲四歳にして清朝の祚を繼いで漸く三年、早くも武昌革命の變亂に逢ひ、皇紀二五七二年退位を余儀なくせられたのであつた。自來天津に流寓、つぶさに世態滄桑の苦を嘗めてをられたが、滿洲事變勃發の後入滿し、二五九二年三月滿洲肇國に方つて、民衆の輿望を擔うて、提身その塗炭の苦を救ふべく執政に就任せられたのである。聰明英邁の天資をもつて爾來著々治績を擧げられ、遂に今日の盛儀を修むるに至つたのは實に慶祝の至りである。

陛下はいふまでもなく愛親覺羅氏の統で、愛親覺羅氏は滿洲に發祥する。滿洲に濫觴する同家の宗たる陛下が、新興滿洲帝國に君臨せられることは、たゞに偶然ならざるのみならず、最も自然である。しかもこれはかの復辟と全く異なり、いはゆる五族協和のもと、奉天、吉林、黑龍江、熱河、興安各省、北滿特別區等三千余萬衆庶の懇請熱望によつて、天業を恢弘し、王道善政を布き、庶民の幸福、康寧を來さしむべき理想の下に起られたものなるにおいて、さらに尊く感ぜられる。我等は執政時代過去二ヶ年の治績を懷顧して、その大德を景仰すると共に、改元新號康徳の示す如く、康民修徳、内ますゝ萬民を寧んじ、外萬邦親和の歩を進めることを希望し、その洋々多望なる前途を祝福するものである。

四

さらに今日に方つて考へられるのは、新帝國と我が國との關係である。新帝國の肇國以前における我が國の活動と

〔64〕 努力とが、自衛のためとはいへ、おのづから、その建國のために荆棘を斬り榛莽を開くこととなつたのは、爾密接不離なる奇しき因縁で、その建國の基礎の進むや、我が國は善隣盟邦の約を締して、不當なる外邦の迷論を排し、遂に聯盟を脱退し、國運をさへ賭するに至つたのである。新帝國が堅くこれに思を致して善隣の實を擧げるに努力せんことは、我が國民の切望するところである、新帝室がその紋章に蘭花をもつてしたのは、日滿兩國斷金如蘭の交を象徴するものと聞くは愉快なことである、これと同時に我が國民も、兩國の親善がまた兩國發展の基にして、かつ東洋平和の礎たることを思ひ、さらに建國以前よりの我が國の對滿關係に鑑み、相信相敬の念をもつて、提携誘掖することを誓はねばならぬ。兩國民が相共にこの決心の下に努力することは、今日兩國民に對して一抹の非常時的觀念を與へつゝある世界の迷妄を雲散せしむべき大なる動力でなければならぬ。

五

こゝに盛典に方り、共に東洋に位置する締約盟邦の國民として、深厚なる祝意を送ると共に、この際における兩友邦の鞏固なる決意と周匝なる用意とを熱望する次第である。

◎ 東京朝日新聞社説

康徳元年三月一日東京朝日新聞社説は次の通りである。

東亞の一角、新たなる天地に滿洲國あり、つぶさに創業各般の工作をいそしみ行ふこゝに滿二年、三千萬民衆の總意を體して、益々順天安民の一大理想を發揚せんがために、去る一月二十一日にはいよ／＼帝制の實現を宣し、本日、建國の記念日に方つて、溥儀執政、帝位登極の盛典を擧ぐるに至つたことは、この隣境友邦の一大躍進に對し

吾人もまた、心より萬壽の無窮を祈念し、普天の同慶を祝福せざるを得ないところである。

郊祭場にしつらへられた天壇は、高く大陸の靑空を凌いで、五彩の旗、寒風早くも一脈の春にひるがへるところ、國都新京にあふるゝ感激と感謝は、まさに想像するにあまりあるものがあらう。この至情は、廣く領城の四方にみなぎり、上下一體、ひとしく國基の強固をたゞへ、國運の長久を相望んで、始めて知る民族存榮の歡喜悅樂にひたり、萬代不易の新國體を讃仰して、洋々たる前途に向ひその生活の向上擴充を期するであらうことは、自他ともに待望するに難くない。

内政の治績は、今やほとんど全土主要地の治安維持を完くして、財政の基礎に確立し、産業の開發は着々その行程を進め、國際信義の守持と具現とが、門戸開放、機會均等の實行のもとに、漸く世界の體認し來たるところとなつたことは滿洲國に對する、最近の特に英米における動向によつても、推想し得られるところである。この情勢は今後更に、いかに發展するであらうか。それが種々複雑な契機に支配せられることは、いふまでもないところであるが、すくなくも、これをいはゆる滿洲事變の當初乃至滿洲國出現の當時に比すると、各國いづれもその認識に修正を加へざるを得なくなつて來たことが觀取し得られる。實證の力の偉大にして確實なるを示すこと、滿洲國の如きは、最近世界の史上に、その類少しといふを憚らない。帝制の實現をもつて天意に適歸するものとなす國民大衆の心理は、必ずその言動の上に反映して、王道主義の伸長は、いよ／＼帝制の精華を發揮すべきを信じ、日滿親交の深厚、これより一層を加へゆくべきことを期待するものである。

〔65〕

三 滿洲國大典の外國への反響

◎ 米國各紙 (東京朝日ニューヨーク特派員一日發)

滿洲國帝制採用發表の際は殆んど默殺の態度をとつたニューヨーク各紙は、今回の即位式に對しては前日來注意を拂ひ、例へばニューヨーク・タイムス、ヘラルド・トリビュン紙の如き一流紙までが、其第一面のトップに競争的に特派員の即位記事を大々的に掲げてゐる、タイムスの如きは第一面のみならずその他の紙面約一ページを滿洲皇帝のために割いてゐる有様で、これは米國は表向きには滿洲國を無視する態度をとりながら内面的には如何に多くの關心を持つてゐるかを示すものであり、かつ又最近ルーズヴェルト政権が漸く對日滿政策において實質的に出でんとする傾向の必ずしも偶然ならざるを物語るものであらう、以上の如く一般的記事の他に三月一日付のヘラルド・トリビュンはその社説で滿洲皇帝即位に關し大體左の如く論評してゐる。

政治問題としては我米國及び歐洲諸國はヘンリー溥儀氏の皇帝即位に關しては無關心でゐなければならぬ立場に居る、然しながらそれだからといつて非公式にこの若きさう明な君主の前途に對し最上の幸あれかしと祈つていけない理由は毫もない

又同日のタイムス紙もその短評でこの問題を次の如く論じてゐる。

ヘンリー溥儀氏が清朝の帝座を退位されたのはある意味では日本のためであつた、といふのは日本が日清、日露の兩役で支那やロシアを負かしたからである又今日滿洲帝國が出現したのは元をたゞせばロシアのツアアがシベリア鐵道を敷設したからなのだ、かくて溥儀氏はかつては支那において支那人の上に滿洲王朝の皇帝として君臨したが、今や滿洲に於いて支那人の上に滿洲皇帝として君臨する身となつたのだ。

◎ 英國各紙 (東京朝日ロンドン特派員一日發)

溥儀執政が帝位に登られたとの報道は、一日のイギリス全新聞に一齊に掲げられた、ロンドンタイムスは外國記事面のトップニュースとして奉天特派員の「滿洲國の帝制」と題する通信を掲げ、新皇帝に調を賜つた記事、斐列大使が特派員に與へたステートメントを織込み滿洲國帝制の由來と理由を明示し、デイリー、テレグラフ紙も記事とともに新帝のお寫眞を大々的に掲げて居る、殊にラヂオで登極の儀の様や音楽まで聞えて來たが、これは全く突然で豫期されてゐなかつたので一般をあつと驚かせたが、新帝の師傳ジョンソンさんや同氏邸に寓居される新帝の御弟の鄭氏夫妻の眼には感激の涙さへ宿つてゐたといはれる。

第五節 滿洲各地の奉祝

◎ 國都新京

輝かしい滿洲帝國の首都としての第一日を迎へた新京市は驛前の大廣場その他市内目ぬきの場所にしつらへた大奉祝門に各戸に掲げられた電飾奉祝燈に市相を一變し慶祝氣分を横溢せしめてゐる、日本側では午前九時半から新京神社に帝政實施の奉告祭を執行、滿洲國側では午前十時から慶祝式典、慶祝大旗行進を行ひ、市中を練り歩くほか恒例の假裝行列、高脚踊、美形連の手踊りなど繰り出され殺人的賑はひを呈した。

◎ 各公署の奉祝大會

[67]
この日奉天、吉林、黑龍、熱河、興安各省公署、新京、哈爾濱、奉天、吉林各特別市公署、全國百六十二に及ぶ各縣公署及び廿四の蒙古各旗公署に於いては登極の御儀舉行と時を同じうして一齊に嚴肅な慶祝大會を開會、御眞影

〔68〕

を奉拜、遙か新京の方に向ひ禮拜、國務總理鄭孝胥氏の發聲により皇帝陛下萬歲に唱和し大典を心から慶祝その全滿津々浦々に響き滿洲空前の劇的情景を展開した、尙ほ民草よりの御慶祝の賀表は各省縣、旗、法國より熱誠こめて捧呈された。

◎ 奉天の奉祝旗行列

故宮十王亭前に集つた慶祝旗行列隊は出發前は先頭は堰をきつて市中に流れ出した、人の波、國旗の波だ、やがて颯爽たる閩市長は乘馬姿で先頭に立ち出發の合圖の行進曲と共に四平街に向ふ、騎馬警察隊、音樂隊、童子團、學生、徒歩警察隊、商工會員、一般市民の順で先頭は既に小西關にかゝつてゐるのに十王亭前は依然旗の波である參加者實に一萬六千、建國以來未曾有の盛觀だ、長蛇の行列は手に／＼國旗を振りかざし國歌を口ずさび乍ら行進を続ける、城内を一巡して四平街より小西關を経て小西邊門、日本總領事館前を通り二時半漸く附屬地内に入る、中央廣場には既に日本側旗行列隊が集合し滿洲國側行列隊の到着を待つて居る、午後二時半頃一部は中央廣場に到着した、折柄春風を突いて編隊慶祝飛行機は廣場上空に飛來、五色の慶祝ピラを撒布して空から慶祝歌を奏して、三時漸く後部到着、日滿兩國の萬歲を三唱して盛大な旗行列は解散した。

◎ 哈爾濱市街

民衆待望の三月一日、今日この佳き日を迎へた大哈爾濱では陽光東天に輝き渡るや早くも全市には喜の色が漂ふ、紅紫綵なす大慶祝門を縦横にかけ抜ける美しく飾りつけられた花電車、まぎ返す人の波、喜びの波、街頭は未曾有の大慶祝行進曲に渦巻く、街々戸々に翻る新五色旗に繰交せて「慶祝大滿洲帝國」「讚王道大滿洲帝國」のホスター

〔69〕

一日の大連市は日滿兩國旗に埋められ午前九時半頃から各學校團體の奉祝行列に滿洲國人も參加して市内目抜き通り及び滿人街を行進し大連市、大連商工會議所等共同主催の長者街廣場に設けられた祝賀式場に於て盛大に舉行せられ、全市民は奉祝氣分を満喫した。

◎ 大連の狀況

新帝とは最もお馴染み深い天津日本租界では靜肅かつ有意義に心からなる祝意を表することとなり、一日居留民は戸毎に日滿兩國旗を掲げ公會堂で記念講演會を開催して新帝の徳を稱へ、日滿兩國の前途を祝福した、この間舊清朝關係の人の間には床かしい禮物の交換があり、賑やかなお祭り騒ぎこそないが雪解けの日本租界には抑へ難い祝賀氣分が横溢してゐる、この日支那側では、ひそかに滿洲國旗を準備してゐた向さえもあつたが一般人民は暴動勃發の噂と、支那軍用飛行の威赫飛行ありとの情報に怯へ公安局の非常警戒裡に戦々恟々としてゐる。

◎ 天津の狀況

傳單が隙間もなく貼られ、十時に道裡公園の慶祝會場から打上げられる花火は爆竹の音と和して寒天をふるはせる折しも飛行機數臺五色旗を翻して市の上空に旋回し、五色の傳單を撒布して時ならぬ花を中天に咲かす、斯くて大哈爾濱五十萬民衆慶祝の第一日は深み行く、一方北滿に於ける白系露人五十四團體の主なる者ゴンダツチ將軍、ウエルチミンスキー將軍、コロポフ博士、コロドニフ避難民委員會長、ギンズ博士等は滿洲帝國あつて初めて白系露人の生命ある旨を高調し、心から今日の盛典を奉祝し滿洲帝國の繁榮を上帝に祈願した。

[70]

◎ 滿洲國公使館に於ける慶祝

隣邦滿洲國溥儀執政が帝位に御登極の盛典をあげられる日、滿洲國公使館丁士源公使以下館員一同は新たなる喜びに充ちてこの意義ある日を迎へた、この朝麻布櫻田町一帯は交錯する日滿兩國の大國旗、戸毎にひらめく滿洲國旗「皇出乎震」の大小ポスターが麗かな春光をあびて町一杯慶祝にどよめいてゐる、公使館の庭一杯はりめぐらされた紅白の幕も見るからに清々しく公使館人口の大アーチはけふの日を壽ぐかのやうだ、午前七時半早くも在京白系ロシヤ人代表ボロシコフ氏以下四名が丁公使に賀表を捧呈、そのあと青山師範の附屬生徒百名が公使館表玄関で萬歳を三唱してかへる頃から參賀の人々をのせた車がひきもきらない、九時四十分階下大廣間では丁公使、皇弟溥儀氏同潤麒氏夫妻、眞崎教育總監、植田參謀次長、大橋外交部次長、肅親王遺兒金憲立、在京北鐵交渉員烏澤聲外四氏士官學校在學の滿洲國學生その他滿洲國關係諸氏が參集、新皇帝の御寫眞を前に嚴かに遙拜式をあげた、十時麻布區八小學校代表五百名が日滿兩國旗を手に羽生區長に引率されて公使館を訪れ、丁公使が表玄関にこれを迎へ朗らかな日滿交歡が行はれ遙拜式が舉行された。

◎ 東京會館に於ける登極大典奉祝會

滿洲帝國を壽ぎ一日午後七時東京會館に於て滿洲國公使館主催で「登極大典奉祝晚餐會」が開かれ左の諸名士が列席した。

廣田、鳩山、大角、山本、林、松本、三土、小山、永井の各大臣、湯淺宮相、本庄侍從武官長、加藤寬治大將、林權助男、荒木貞夫大將、平沼麒一郎男、倉富樞府議長、芳澤謙吉、有賀長文、

[71]

第五章 滿洲帝國の機構

第一節 滿洲帝國政府組織法

政府機構の組織に關する事項を規定する臨時憲法と稱すべき法令はこれを「滿洲帝國政府組織法」として新皇帝の即

大倉喜七郎男、藤原銀次郎の諸氏を始め政界、財界、外交、陸海軍、諸官省知名の士五百餘名斯くて館内は新興帝國生誕の慶びの氣溢れ、丁公使を圍んで「康徳元年三月一日」の喜びを語り合ひ、午後七時餘興場で初めて公開された「日滿音頭」「滿洲音頭」のレコード演奏で大晚餐會の幕を開き、日滿兩國旗で飾られたステージでは種々の催しや踊りをなし、終つて同卅分滿飾の四階大廣間で大晚餐會が行はれ、かくてデザートに入つて丁公使立ち挨拶し乾杯後「君が代」を合唱萬歳を三唱、廣田外相立つて挨拶を行ひ滿洲國々歌の合唱、萬歳を三唱同九時散會した。

◎ 日滿外相の交驩

更に東京中央放送局では御盛典第一日には新京より未曾有の盛儀を中繼し全國津々浦々の友邦に慶びを傳へ夜に至り兩國外務大臣の交驩放送を行つた、この夜午後七時卅分東京會館に於て開催された。滿洲國公使館主催の招宴に臨んだ廣田外相は四階の一室に特設されたマイクの前に、河西アナウンサーの紹介で立ち九分間に亘り祝辭を送りこれを東京外國語學校教授宮越健太郎氏が滿洲國語にて通譯し同四十一分終了、續いて滿洲國より謝外交部大臣は流暢な日本語で謝辭をのべ同七時五十分、記念すべき兩國外務大臣の交驩放送を終つた

[72] 位大典舉行の今日を以て發布される。全部六章及び付則を併せて左の如く四十二條より成つてゐる。即ち左の通りである。

第一章 皇 帝

- 第一條 滿洲帝國ハ皇帝之ヲ統治ス 帝位ノ繼承ハ別ニ定ムル所ニ依ル
- 第二條 皇帝ノ尊嚴ハ侵サルコトナシ
- 第三條 皇帝ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ本法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ
- 第四條 國務總理大臣ハ皇帝ヲ輔弼シ其ノ責ニ任ス
- 第五條 皇帝ハ立法院ノ翼賛ニ依リ立法權ヲ行フ
- 第六條 皇帝ハ法律ニ依リ法院ヲシテ司法權ヲ行ハシム
- 第七條 皇帝ハ公共ノ安寧福利ヲ維持増進シ又ハ法律ヲ執行スル爲命令ヲ發布シ又ハ發布セシム
但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス
- 第八條 皇帝ハ公安ヲ維持シ又ハ非常ノ災害ヲ防遏スル爲立法院ヲ召集スルコトヲ得サル場合ニ於テハ參議府ニ諮詢シ法律ト同一ノ効力アル勅令ヲ發布スルコトヲ得但シ此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ立法院ニ報告スヘシ
- 第九條 皇帝ハ官制ヲ定メ官吏ヲ任免シ及其ノ俸給ヲ定ム但シ本法又ハ法律ニ依リ特ニ定メタルモノハ此ノ限ニ在ラス
- 第十條 皇帝ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及條約ヲ締結ス

第十一條 皇帝ハ陸海軍ヲ統率ス

第十二條 皇帝ハ勳章其ノ他ノ榮典ヲ授與ス

第十三條 皇帝ハ大赦、特赦、減刑及復權ヲ命ス

第二章 參議府

第十四條 參議府ハ參議ヲ以テ之ヲ組織ス

第十五條 參議府ハ左ノ事項ニ關シ皇帝ノ諮詢ヲ承ケテ其ノ意見ヲ上奏ス

(一)法律(二)皇室令(三)勅令(四)豫算及豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スノ件(五)列國交渉ノ條約約章及皇帝ノ名ニ於テ行フ對外宣言(六)重要ナル官吏ノ任免(七)其ノ他重要ナル國務

第十六條 參議府ハ重要ナル國務ニ關シ意見ヲ上奏スルコトヲ得

第三章 立法院

第十七條 立法院ノ組織ハ別ニ法律ノ定ムル所ニ依ル

第十八條 凡テ法律豫算及豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スノ件ハ立法院ノ翼賛ヲ經ルコトヲ要ス

第十九條 立法院ハ國務ニ關シ國務院ニ建議スルコトヲ得

第二十條 立法院ハ人民ノ請願ヲ受理スルコトヲ得

[73] 第二十一條 立法院ハ皇帝毎年之ヲ召集ス常會ノ會期ハ一箇月トス但シ必要アル場合ハ皇帝之ヲ延長スルコトヲ得

第二十二條 立法院ハ總議員三分ノ一以上出席スルニ非サレハ開會スルコトヲ得ス

〔74〕

第二十三條 立法院ノ議事ハ出席議員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル
第二十四條 立法院ノ會議ハ之ヲ公開ス但シ國務院ノ要求又ハ立法院ノ決議ニ依リ秘密會トスルコトヲ得
第二十五條 立法院ノ議決セル法律豫算及豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スノ件ハ皇帝之ヲ裁可シ公布施行
セシム立法院法律案豫算案又ハ豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スノ件ヲ否決セルトキハ理由ヲ示シテ之ヲ
再議ニ付シ仍ホ改メサルトキハ參議府ニ諮リテ其ノ可否ヲ決ス

第二十六條 立法院議員ハ院内ニ於ケル言論ノ表決ニ關シ院外ニ於テ責任ヲ負フコトナシ

第四章 國務院

第二十七條 國務院ハ諸般ノ行政ヲ掌理ス

第二十八條 國務院ハ民政外交軍政財政實業交通司法及文教ノ各部ヲ以テ之ヲ組織ス

第二十九條 國務院ニ國務總理大臣及各部大臣ヲ置ク各部大臣ハ主管事務ニ付其ノ責ニ任ス

第三十條 國務總理大臣及各部大臣ハ何時タリトモ立法院會議ニ出席シ及發言スルコトヲ得但シ表決ニ加ハルコトヲ得ス

第三十一條 國務ニ關スル詔書勅書法律及勅令ニハ國務總理大臣及主管各部大臣之ヲ副書ス

第五章 法院

第三十二條 法院ハ法律ニ依リ民事及刑事ノ訴訟ヲ審判ス但シ行政訴訟其ノ他ノ特別訴訟ニ關シテハ法律ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第三十三條 法院ノ構成及法官ノ資格ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第三十四條 法官ハ獨立シテ其ノ職務ヲ行フ

第三十五條 法官ハ刑事又ハ懲戒ノ裁判ニ依ルノ外其ノ職ヲ免セラルルコトナシ又其ノ意ニ反シテ停職轉官所及減俸セラルルコトナシ

第三十六條 法院ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スル虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ法院ノ決議ヲ以テ公開ヲ停止スルコトヲ得

第六章 監察院

第三十七條 監察院ハ監察及審計ヲ行フ監察院ノ組織及職務ニ關シテハ法律ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第三十八條 監察院ニ監察官及審計官ヲ置ク

第三十九條 監察官及審計官ハ刑事裁判若ハ懲戒處分ニ依ルノ外其ノ職ヲ免セラルルコトナシ又其ノ意ニ反シテ停職轉官及減俸セラルルコトナシ

附 則

第四十條 本法ハ康徳元年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔75〕

第四十一條 皇帝ハ當分ノ間參議府ノ諮詢ヲ經テ法律ト同一効力ヲ有スル勅令ヲ發布シ豫算ヲ定メ及豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スコトヲ得

第四十二條 敕令院令其ノ他何等ノ名稱ヲ用ヒタルニ拘ラス從前ノ法令ハ總テ仍ホ其ノ効力ヲ有ス

第二節 帝室制度審議會官制

[76]

康徳元年三月一日帝制實施と同時に發布される臨時帝室制度審議會官制全文左の如し

第一條 臨時帝室制度審議會は宮廷府府中令の管理に屬しその諮問に應じ帝室の重要なる制度を調査審議す

第二條 臨時帝室制度審議會は會長一人、委員十五人以内を以てこれを組織す特別の事項を調査審議するため必要あるときは臨時委員を置くことを得

第三條 會長は宮廷府府中令の奏請によりこれを勅命す 委員及び臨時委員は高等官及び學識經驗ある者のうちより宮廷府府中令の奏請により宮廷府においてこれを命す、委員中本官ある者の外はこれを薦任官を以て待遇す

第四條 會長は會務を總理す會長事故あるときは宮廷府府中令の指名する委員その職務を代理す

第五條 臨時帝室制度審議會に左の職員を置く

幹事若干名(内二人を專任とし薦任官とす)

書記若干名(内四人を專任とし委任官とす)

第六條 幹事は宮廷府府中令の奏請により宮廷府に於てこれを命す

幹事は會長の指揮を承け庶務を整理す

第七條 書記は宮廷府に於てこれを命す書記は上司の命を承け庶務に従事す

附 則

本官制は康徳元年三月一日よりこれを施行す

第六章 滿洲國の地誌及人文

第一節 區域と山勢

滿洲の領域は奉天、吉林、黑龍江、熱河及び興安の五省を包含する。興安省は内蒙古と呼倫貝爾を合して一獨立行政區としたもので、此の領域は奉天、吉林、黑龍江、熱河の舊東北四省と合致する。

滿洲は西は蒙古及支那本土に、東北は露領西比利亞に、南は朝鮮及黃海に接してゐる。東經百十七度より百三十五度に及び、北緯は歐洲大陸の南半と同一である、又大連と同緯度の地としては秋田、平壤、天津、アテネ、リスボン、桑港等があり、長春と同緯度の地としては旭川、浦潮斯德、馬耳塞、市俄古、ポストン等がある。

地勢は大體に於て二大別される。一は西部及北都なる遼河松花江流域に屬する平原部と他は東より南部に亘る山岳地である。而して其の中央部は地勢最も高く略南北に兩分されてゐる。南方の傾斜は長白山脈を起點として遼東及朝鮮南部に向ひ、北方の傾斜は一部分黑龍江に延びてゐる。

滿洲は山岳に富み、長大なる河川に潤ひ、廣大なる平野が到る處に在る。即ち東には長白山脈、西には陰山々脈及大興安嶺、北には小興安嶺がある。而も滿洲は高山に乏しく僅に長白山脈中の白頭山が二杆七百四十餘米で、其の他は何れも一杆内外である。而して廣大なる平野は南方渤海に向つて展開されてゐる。河川の大なるものは黑龍江及其の支流である松花江、嫩江、烏蘇里江、豆滿江、鴨綠江、遼河等である。此等の大水系は廣袤百十九萬一千方杆の滿蒙の地域を環流し、農耕の灌溉、舟筏の利便を惠み、人文の發達に對して多大の寄與を爲してゐる。

大平原は前記の河流に沿ふて展開し、其の主要なるものは松花江及び遼河流域、齊々哈爾爾一帶及び興凱湖畔の平原

[77]

〔78〕 等である。滿洲の平原は北滿洲に於て五分の三以上を占め、特に黒龍江の北部より起つて滿洲の中央部へ亘る平原は最も廣大である。

更に南滿洲の遼河流域、東部の伊通河流域、北部の嫩江流域より蒙古平原へかけて萬里の沃野が展開されてゐる。東部蒙古の一部の原野は沙漠性を帯びてゐる。

湖沼の大なるものは七、八箇所を算し、其の中には鹽湖と稱し食用天然鹽を産するものがある。東部内蒙古の低地には降雨量に應じて、或時は湖水となり、他の時は乾涸して平地に化する所謂一時的湖水式のものが多い。海岸線は甚だ短く、唯黃海及渤海岸に一、一〇〇軒あるに過ぎない。

第二節 面積、人口及住民

滿蒙の面積は約一、一九一、〇〇〇方軒で之を各省別に示すと奉天省は一八五、二〇〇方軒、吉林省は二六七、六三九方軒、黒龍江省は五八一、五五〇方軒、熱河省は一五六、三二〇方軒となる。以上の面積を日本の總面積に比較すると一・八倍、内地の約三倍に當る。人口統計は未だ正確なるものがないが大體三三、六九七、九二〇人と推定され、之を省別に示せば奉天省一四、九八八、五六〇人、吉林省九、〇七五、六三〇人、黒龍江省五、一三三、七三〇人、熱河省四、五〇〇、〇〇〇人となる。

以上の人口を日本の總人口に比すると三割七分に相當する。尙人口の密度を見るに、一方軒に付奉天は八〇・一人、吉林省は三三・九人、黒龍江省は八・八人、熱河省は二八・二人となる。右の内滿洲生粋の土着人なる滿洲人は僅に二百萬乃至三百萬人を算し、漢人の九割に對して一割にも當らない。蒙古人は更に少く四十萬乃至五十萬と稱せら

れる。

在滿内鮮人の人口を昭和六年十二月末現在外務省亞細亞局側の調査に就て見るに、内地人二三三、三二〇人（内關東州内一一九、七七〇人）、朝鮮人六三〇、九八二人（内關東州内一、七四七人）、總計八六四、三〇二人となる。因みに在滿外國人の數は九四、八四六人である。

第三節 平原と水系

滿洲の平原は廣大であるが、平原が滿洲全體ではない。平原は滿洲の西及び北の一部に發達し、一般に黃土及びその風化物から成立つてゐるが、何處に行つても極めて均質、概してアルカリ性が強い。滿洲を訪るゝ人は滿鐵の車窓に倚つて遼河の流域たる南滿の平原の廣大なるに驚く。然し、更に大なる平原は長春以北、松花江嫩江の流域にあつて、その面積は前者の二倍もあらう。而して、近き將來に於ける滿洲の穀倉はこの北滿の原野にあると囑望せられる。

〔79〕 東部蒙古の一部では原野は沙漠性である。外蒙古のゴビはもと蒙古語の沙漠の意味であるが、今は個有名詞の如く用ゐられる。ゴビは漸次東方に移動する傾向があるやうに見える。それは四洮、洮昂諸線にも散見する砂丘が、常に西に偏する卓越風の爲めに漸次東に發育することでも判る。砂丘の大なるものになると附近の平地から計つて高さ七八十米から百米位ものが珍らしくない。鄭家屯附近のポリ山、トコロ山の如きはその好例である。河川の大なるは黒龍江及其の支流たる松花江、嫩江、烏蘇里江、其他では遼河、鴨綠江等、而して幾多の支流小流がその間に介在してゐる。

〔80〕

長春公主嶺間の分水嶺間によつて南北に分る、遼河及松花江と、朝鮮の國境をなせる鴨綠江とは、山脈によつて自ら東西にその流域を區劃せられる。而して、松花江の上流即ち嫩江が南流する外は凡て滿洲の河川はその山勢に支配せられて遼河鴨綠江の如く南西に注ぐか、松花江の如く北東に走るかを以て原則とする。尤も黒龍江本流の中部だけは西比利滿洲の境界を北西から東南に、山勢の方向と略直角に走つてゐるが、之は小興安嶺の存在と此の附近の地體構造上の相違とに基くものである。

滿洲の河川に於て著しく日本のそれと異なる點は、叙上の諸大川が總て常に濁流滔々たることである。白河、黄河、揚子江など支那大陸に於ける大川も亦同様の現象を呈する。その原因は、乾燥少雨、加ふるに酷寒の季節長く温度の變化による岩石の崩壊作用著しきことである。雨の少い滿洲の地表は著しく多量の粘土塵埃その他の微分子を保有してゐる。それが水量に比して多量に河水に混合するが故に河の清む時はないのである。支流や小流に在つては乾季大抵涸渴して雨季は驚くべき氾濫をなすものが多い。俗に之を沙河と曰ふ。人工の堤防がないから縦に水は流れ走るのである。随つて河原は至つて廣い。滿洲には到る處にこの沙河がある。日露戰役に聞えた遼陽の北の沙河はその有名なものの一であるが、沙河は滿洲では寧ろ普通名詞といふべきである。

湖沼は甚だ少い。蓋し、地盤を構成する岩石が古く、従つて地體構造上の變動を経ることが多い爲めに、十分長く湖沼たる形を保ち得なかつたものと思はれる。それに氣候の乾燥が永く瀦水を保つこと能はざらしめるのもであらう。但平原地方殊に東部内蒙古地方には雨季にのみ出来る淺く且つ形状不定の所謂一時的湖水—PLAYAS—が澤山にある。やがて乾季に入つてこの水が蒸發するとあとは一面の雪、これが蒙古の一産物、所謂天然曹達である。若

し又湖水が乾燥し切らぬ場合、その濃厚な曹達溶液からは人工的採集も行はれる。遼河の上流なるタブソノール(蒙古語鹽湖の義)はその好例である。

永久的の湖水として知られるものは浦鹽斯徳の北方に方る興凱湖、吉林の東方に方る鏡泊湖、共に低地に溜つた淺い淡水湖で水は特有の黄濁色を呈してゐる。又、滿洲の北西端、外蒙との境の邊に呼倫池及貝爾池がある。前の二湖と同様極めて淺いが、多量の鹽分を含んでゐる點が異つてゐる。

滿洲は唯南方の一部分遼東半島が海に接してゐるだけで、海岸線は至つて短い。特に注意すべき現象は、從來海岸が漸次陥没しつとあると信ぜられて居たが、最近の研究によれば反對に隆起しつとある幾多の例證を捉へることが能る一事である。

第四節 氣象と氣候

滿洲は寒暖の差劇しく、乾雨雨季の著しい外、一般によく乾燥する。この三者は實にその氣象上の特異點である。氣温は大陸的である。一年最高最低の差奉天、長春に於て六十五度乃至七十度に及び、哈爾濱、齊々哈爾の如きは七十七八度に達する。即ち奉天最高六月下旬乃至七月上旬に於て三十八度に及び、最低十二月下旬乃至一月上旬に於て零下三十度に下る。長春に於ては最高は奉天に似て三十八度内外であるのに、最低は更に三四度も低い。哈爾濱、齊々哈爾に於ては最高最低ともに長春を過ぎ、北するに従つて大陸的氣温の層劇烈なることが判る。之を日本の福岡、大阪、東京、札幌に於ける最高最低の較差二十度乃至三十度なるに比すれば、その差異の甚しきことは知られるであらう。

〔81〕

気温の變化は一日中にも可なり劇しい。晝夜の差二十度に達すること位は決して珍らしくない。此の變化は又、數日の週期をもつて表はれ、特に冬季に於て著しく感知せられる。所謂三寒四溫である。蓋し氣象は毎日多少づつ西から東へ移り、通常の状態では僅かの低氣壓と高氣壓とが交互に凡そ三四日間で交替し、比較的low氣壓の部が來た時は溫暖を感じ高氣壓の部が近づく時は寒冷を覺ゆるのである。此の事實は日本にも當然起るべきであるが、地形上の著しい相違の爲めにその上を流るる氣象上の諸要素は自然不規則となるに反し、滿洲の如き大陸の一部、殊に全體として地形上の差異少き處に於ては比較的規則正しく同一に近き氣象が循環するものと考へられる。

更に一つ面白い現象は、滿洲の気温の變化が日本のそれに比し常に一箇月早いことである。日本の暑い月は八月、寒い月は二月であるが、滿洲では七月と一月とに來る。之は大陸が海洋より溫度の傳達早く、陸地の輻射熱による大陸の気温の方が海洋の輻射熱による日本の気温よりは早まるからであらう。

滿洲は雨雪の總量が少いばかりでなく、雨季乾季の兩季節の存在が甚だ著しい。日本各地では一年の半は雨か雪かを見るが普通であるが、南部滿洲では一年平均七十日、即ち年の五分の一に過ぎない。日本の約半分以下である。それも六、七、八、三ヶ月の雨季に一年の降水量六〇〇耗の四分の三は降つて、残りの九ヶ月にあと四分の一が降る。東京、大阪、福岡の平均降水量に比して南部滿洲の降水量は半分よりもまだ少い。但、札幌の一〇〇〇耗は稍と滿洲の量に近いと云へる。斯の雨雪の少いことは北に行くに隨つていよく劇しく、齊々哈爾の如きはその量南部滿洲の半にも及ばず、蒙古に近づく時は一層之が甚しい。ゴビの發達する最大原因は茲に在る。

雨雪の少量なることは惹いて大氣中に含まるる湿度の低下を示す。就中處に於ては北滿、時に於ては四月と十月と

が甚しい。毎年の平均溫度は南部で六五%内外、之を日本の年平均七四乃至八三%に比すれば一割以上の乾燥度を示すことになる。殊に室内は家屋の構造と冬季採暖法とに關聯して驚くべき乾燥度を示し、濡れたタオルが一時間位でカラ／＼になつたり、濕つた砂糖や菓子に蓋をとり置くと早く乾くといふやうな現象が見られる、日本内地では思ひもよらぬことである。

滿洲の氣象上の特徴としてもう一つ擧ぐべきことは大氣中に含まるる細塵が比較的多いことである。所謂「もや」が多いのであるが、そのもやは日本の春霞や暮霧と違つて、多くは蒙古地方から風の爲めに吹き送らるる細塵である。その爲めに滿洲の三四月の頃は文字通りの黃塵萬丈を見ることがある。甚だしい時になると天日爲めに晦く白晝なを燈火を必要とすることさへある。

第五節 動植物界

氣象は動植物の生活に重大な關係を有つが故に、滿洲の動植物も自ら日本のそれと異らざるを得ない。殊に大陸の一部をなす滿洲では動物の如き自然に自由に移動してゐるであらうと思はるゝに、事實は山川、沙漠、海灣等の爲めにその移動力を減殺せられてゐるのみならず、その食物並に居住たる場所の關係上案外その種屬の箇定的なものが多い様である。哺乳類、魚類の如き高等動物でも日本と同種のもの割合に少く、日本本土に最も普通な鹿、兎鼠の類から鳥、雉、雲雀の如きを始として爬蟲類、兩棲類の如きも割合に日本特に本州産と共通のものが少い。殊に淡水産魚類の如きは最も共通性少きものの一つであらう。節足動物以下に就いては未だ詳細なる研究を聞かぬが歐米に同族ありと聞くのみで日本には未だ發見されないバフンコロガシの如き滿洲南部には多數に發見せらるる。

ある。

現存生物群の分布状態より推して、往昔は印度支那地方より東支那海岸を經、直隸より滿洲に亘つて大なる孤狀の森林が存在し、此等は更に西比利の森林と連續してゐた。この偉大なる森林が如何にして消滅したか、第一は濫伐であり第二は沙漠に變はれつゝあることである。沙漠は北西の風と共に移動しつゝあるが、この沙漠化の影響は樹木に現はれ、乾燥に對して抵抗弱き松柏の類先づ滅び、檉、胡桃等之に次ぎ、最も抵抗強き楊柳は最後まで残る。現に松柏科の植物は北滿及吉林地方の森林地帯に存在するに過ぎず、比較的乾燥し且風力強き滿洲の平野には極めて稀にして、檉、胡桃は稍々多い。更に蒙古の乾燥地帯に進むに伴れて、楊柳の如きもののみが残存し、楡はあるにはあるが次第に減少する傾向を示し、既に枯死せる楡の大木と既に炭酸石灰化するその樹根とは往々にして砂丘中より發見せられるのである。

滿洲の森林は今や全く北方に偏在してゐる。その主なるもの七、一は鴨綠江本流の右岸及渾河流域一帶、二は豆滿江から老爺嶺にかけて、三は松花江上流地方、四は牡丹江流域、五は東支東部沿線、六は同西部沿線、七は三姓地方である。それより南は樹木次第に少く、南滿に於ては僅かに關東州が造林に對して努力した結果やゝ見るべきものある外は多く禿山が連つてゐる。而して脚更に蒙古に入る時は渺茫千里、眼路の限り草原と砂丘とが打續いて殆んど森林を見ることはない。只黑龍江省より蜿蜒して南に下る興安嶺山脈と陰山山脈との間には多少の森林があるものと考へられる。

植物の種類は日本殊に北海道、樺太と共通のものもかなり多い。蒲公英、薺、紫雲英、翁草、仙蓼、藤袴、刈萱

萩、接骨木を初め楡、楡、柳の類の如きは滿洲にも最も普通で兩者共通の著しい例である。森林に於ては之を森林植物帯上より見れば主要部分は多く寒帯圏内に屬し、二三種を除き概ね北海道森林に彷彿たるものがある。併し、他面には又自ら色々の差異もある。即ち、日本では専ら栽培種としてしか見られぬ杏、李、山櫻桃の如きが滿洲では野に山に天然に生え、その代り黒松、赤松(以上二種の存否には多少議論がある)竹類、櫻類(山櫻を除く)が殆んど全く存しない點は、誰も氣づくことである。又、日本本土では高山地方でしか見られぬ落葉松や白樺が北滿の平地や興安嶺の高臺では到る處に繁茂してゐるのが見られる。

特に面白い一點は一般にアルカリ土壤が多い爲めに、比較的鹽分を好む植物が豊富なことである。夏秋の候滿洲の平野を走る汽車の窓から低濕地を望むとき、眞紅に地表を彩るものは多くこの好鹽植物、はまあかさ、まつなの類である。東部蒙古で俗に鹹草と稱するつるおにしばの如きは鹽分の多い處にのみ發育する禾本科の草木で、滿洲及北支那特有の著明な植物である。

第六節 地質 鑛山

地盤を構成する主なる岩石は、山地にあつては片麻岩、片岩、珪石、粘板岩、結晶質石灰岩等の變成岩と、花崗岩斑岩、綠閃岩、安山岩、玄武岩であり、その内滿洲の骨格を成すものは火崗岩とその變質と思はるゝ花崗質片麻岩とである。平原地方の地表は沖積土、一般に砂礫及粘土より成つて殆んど水平に横はり、その下二三十米の下盤に著しく褶曲した砂岩及砂質泥岩を含んでゐる。その走向は北東から南西、即ち滿洲諸山脈の方向に同じく、その傾斜は概して急で時に六十度に及ぶことがある。

地質上滿洲が日本と著しく異なる點は、近き過去より現在に亘つて火山活動の比較的少く、安山岩玄武岩の如き新期火成岩の分布區域が甚しく少いことと、地震が極めて稀なことである。由來太平洋を繞る殆ど凡ての國土は火山活動や地震の起らない所はない。然るに滿洲のみは獨り此の災厄に漏れて、學者の研究によれば過去千九百年間に僅かに四十回の歴史的記録があるだけである。これは恐らくは滿洲の地質が地震の多い國土に比して遙かに古く、地盤がすつと安定してゐることであると推測せられる。

滿洲は一般的に云へば地盤の混亂錯雜が少い。唯著しく北西及南東の兩方面から異常なる横壓力が加はつたことによつて、地表に近い岩石は壓縮せられてその力と直角の方向即ち北東から南西に延びた大きな波狀の皺を生じてゐる。そして此等の大褶曲の波の頂點が處々で切られて一つ一つの丘陵をなし相並んで山脈をなす、滿洲の主なる山脈が同一方向をとるのはこの成因に基くものである。爾來全般的變動は固より局部的の劇しい變動も少く、唯驚くべき永い年月を風雨に曝されて來た。されば今日地表に露出するものは厚さ數百千米も削割せられたものではあるが、猶且昔ながらの面影を傳へるものと想像せられる。

滿鐵本線大連長春間は實に叙上波狀丘陵の谷に沿うて進む。その延長四百六十哩、日本にして約東京岡山の距離に當る間が平々坦々、何等著しき高低の差を見ざるはその爲めである。然るに奉天より安東に至る安奉線、長春より吉林を経て敦化に至る吉敦線及び東支鐵道東部線の如きは、此等の波狀丘陵を横斷するを以て丘陵、豁谷、隧道、鐵橋、旅客をしてその送迎に違ならしむるのである。

滿洲の主要鑛山物の内現在及將來に有望と目せられるものはその數比較的少く、金屬鑛物では鐵と金、非金屬鑛物

では石炭、菱苦土、滑石、耐火粘土、油頁岩等である。日本のそれに比して種類少く且つ金屬鑛物が極めて乏しいが、その代り非金屬鑛物は極めて豊富である。前記菱苦土、滑石、耐火粘土の如き日本に多くを望まれないもの、或は石炭、油頁岩の如き、何れも幾億噸といふ多額の埋藏量を有する點はその將來を期待せしめるものである。滿洲が日本に比し鑛物の種類少く、殊に金屬物に乏しいことは一は地質の相異に基くものと思はれる。多く近世代に噴出せる火成岩に伴ふ日本のやうな金屬鑛物が、地質古くして火山活動稀なる滿洲に少きは蓋し當然であらう。二は面積廣く人口少くなほ開發の途上に在つて未だ知られないものがあるだらうと想像される。現に上記鑛産物の大部分も日露戦後日本人の手によつて發見されたものである。

因に從來の調査の結果によれば、滿洲に於ける地層及び岩石の種類は大略次のやうに分類することが出来る。

- 1 大古代層.....片麻岩、片岩、結晶質石灰岩
- 2 前寒武利亞紀層.....片岩、苦土質石灰岩、粘板岩、硅岩
- 3 寒武利亞紀層.....苦土質石灰岩、頁岩質石灰岩、硅質砂岩、頁岩
- 4 奥陶紀層.....苦土質石灰岩、頁岩
- 5 古期古生層.....苦土質石灰岩、頁岩、片岩、礫岩
- 6 二疊石炭紀層.....砂岩、頁岩、含化石石灰岩、炭層
- 7 侏羅紀層.....砂岩、頁岩、礫岩、凝灰岩、炭層
- 8 第三紀層.....凝灰岩、頁岩、砂岩、油母頁岩

- 9 第四紀層……………黃土、粘土、砂礫
- 10 古期酸性岩類……………花崗岩、閃長岩、斑岩
- 11 古期塩基性岩類……………玢岩、閃綠岩、輝綠岩
- 12 新期噴出岩類……………玄武岩、安山岩、石英粗面岩

第七節 人文

一 交通系

滿鮮山地の西部及北部と、遼河東の沖積平野と、渤海の陥没によつて生じた遼東半島とを總括して呼ばれる滿洲を自然の環境として、古來久しくこの地域に人類の活動が続いた。そしてその史的活動がこの地域の交通系を規定したことは、民族の移動なり争鬭なりの上に必然的に具體化せられたものであり、又その交通系が障害の少い水系と平原とに現れたことも古今同規であることが證せられる。

今水系から考察するに古く史上に北征の兵船の上つたことが見えるし遼河は、滿洲の平原を縦斷する幹線であつて東蒙古の出道となり河口港なる營口と上流との間に貿易が盛んに行はれ、従つて舟航の便あるその本支流の主要點に多くの聚落都邑を發生させてゐる。遼東半島の基部にあつて滿洲三貿易港の一となつてゐる營口の發達は、全くこの水運から來たものといはなければならぬ。鴨綠江は滿鮮の國境を成して流れ、その河口に安東港を持つて上流との間に舟運がある。この水運は昔から重要視せられた交通路で、これを溯つて今の松花江の支流なる輝發江に入り、特に今の寧古塔地方を中心とした渤海國と唐とを通じた水路となつてゐる。又哈爾濱を中心として北流する

松花江及それを養ふ嫩江は、今は吉枕、齊々哈爾濱、哈爾濱等の大都市の依據する河川として北滿洲を縦横に縫うてゐる。この河は現在貨客運輸に重要であるのみならず、曾つては軍船の航行に役立つて露支兩國が事變を起した際に大きな役割さへも演じたものである。且つ金の白城の故地なる阿什河や扶餘が松花江本流に近いことは言ふまでもなく、今吉林省の山地に在る寧古塔、東京城などが一支流牡丹江に沿うて往昔トウングースの諸族興廢の地域を示してゐるのも、河川交通に負ふところがあらう。

海では渤海が一つの湖のやうになつて、營口がその奥に控えた海港となつてゐる。この近海航路の中心は大連で、日本内地、朝鮮、天津、青島、南支その外各方面の航路が開け、恰も大陸の一大關門を成してゐる。併し昔は山東方面からの旅人は登州あたりから廟島列島を飛石傳ひに傳つて今の旅順あたりに取りつき、遼東半島の東岸をめぐつて鴨綠江に入つたもので、その一實例として旅順の黄金山麓に鴻臚井がある。それは渤海國への使節たりし唐の崔訴なる者が紀念に掘つた井戸で、鴻臚井の碑と稱へられる碑が遺つてゐた。隋や唐が高句麗を征した際にも亦この水路を辿つたことは史上に顯著である。また山東から今の金州へ船をつけて、そこから陸路半島を北上した路も極めて古くから知られてゐる。

陸上交通路としての諸道路は古來の儘のものもあり、又古道の跡絶えた方面もある。現在では關東州内は至るところ良道を通じてゐるが、州外支那の政治區域では良道に乏しい。主要路として知られたものには、古くは開原から昌圖、哈爾濱方面へ通ずるもの、開原から輝發江流域、寧古塔に出るもの、やゝ新らしく開原から伊通州を経て吉林に至る道等があつた。又朝鮮との交通には遼陽から鳳凰城、九連城に出るものが重要なものであつた。遼陽は古

都で昔は支那方面から陸路滿洲に入るにはこゝを目當にして來たのであるが、今は奉天が中心となつて新民、錦州を経て山海關へと大道が通じてゐる。

然し時代の趨勢は天産を無盡に包蔵する滿洲平野をして鐵道敷設の白熱場裡に置いた。實に滿洲に於ては東支線と南滿線とが丁字形の幹線を成し、加ふるに京奉線(關外本線)吉長線、四洮線、洮昂線、打通線、呼海線、金福線、奉海線、吉敦線等の諸鐵道があり、尙ほ目下問題になつてゐる鐵道計劃も色々ある。此等の諸鐵道が滿洲を縦横に走つて、地方經濟と文化との開發に貢獻するところ莫大であると共に、歐亞交通の要衝に當る滿洲をして將來益々世界視聽の集まる地域たらしめてゐる。

二 民族の動向

滿洲と亞細亞露細亞並に朝鮮との國界は、政治的にも地勢上にもはつきりと示されてゐるが、蒙古と滿洲との境は不分明であつて、遼西の東蒙古は言はゞ一つの過渡帯と見做すべきところである。それは漢人種の蒙古地に對する流入越壘から始まつて、現今夥しい植民の流れ込むことに基因する。支那本土から動亂と飢とを避けて渡つて來る人は、最近年々二十萬人を下らず、特に最近は年百萬に近いとさへ想定せられてゐる。それが東蒙古、北滿洲方面へと次第に滲入して定着生活を營み、そこに新しい漢人の聚落を立てるのであるから、土地は蒙古の旗に屬してゐても民は異種族であり、東三省の政治は事實上蒙古地の上に布かれる状態である。若し四洮線、洮昂線によつて蒙古地の東邊を縦斷するならば、隨所に蒙古包ならぬ漢人平房子の部落が發達して行く様を看取するであらう。

滿洲の行政上の區劃は東三省と東部內蒙古に於ける特別區域と日本側の關東州及滿鐵鐵道附屬地とから成り立つて

ゐる。更に東三省を細別すれば奉天省三道五十六縣一設治局、吉林省四道三十九縣二設治局、黑龍江省三道三十二縣七設治局、一呼倫貝爾區域となる。そして此等滿洲諸區の主都として奉天に諸機關が備はつてゐるのである。

今東三省のみに就て見るに、その面積六四・二五三方里でこゝに分布する人口は二五・五二〇・六五八人(昭和二年五月現在)といふから一平方里の人口密度は僅かに四百人にも充たぬ。而かも南滿の比較的密なるに反して北滿は頗る稀薄であるから、滿洲の將來に對する人口包擁力は甚大なるものがあると思ふ。

尙ほ未開發の資源に富むが上に、學者の立證に據れば人類活動と文明の成長に好都合な氣候條件の下に置かれてゐる滿洲が、諸民族の着眼し動向し來る地域となるは當然である。現に夥しく直隸、山東及び南支方面からの植民群が流入して未墾の耕地を開拓してゆくのみならず東垂から入り込んだ朝鮮の移民群はその數既に八十萬と推定せられ、特に間島及吉林地方には密集居住の著しいものが認められてゐる。

日本人は日露戰役以來二十年にして約十九萬人の定住者を見るがその多くは關東州内並に滿鐵附屬地内に居住してゐるのであるから、刻下の日本の人口食糧問題の上から見れば、滿洲への移民の數的考察に於ても、その活動すべき地域の擴がりに就ても、大きな餘裕があるわけである。

諸外國人の内では露西亞人の活動が目覺ましい。露西亞人の滿洲浸出は侵略的軍事的動機に基いてゐるから東洋平和の立場からはその理想に於て不純なものであつたが、彼等の齎らした効果の上から眺めるならば、彼等こそ實に滿洲にとつては西歐文明の使徒であつたのである。彼等の手によつて敷かれた鐵道は、大膽にも直隸を以て北滿を横斷し南滿を縦斷して南に東洋の窓大連をつくり、北に西歐の窓哈爾濱を建てた。日露戰役によつて一敗地にまみ

れ、勞農革命によつて今尙ほ混沌としてゐるが、北滿に於ける經濟的地盤は確乎たるものがあり、自國政情の固定し來ると共に次第に南下復興の潛勢力を養つてゐる。

滿洲族は由來舊住民として廣く滿洲に分布居住してゐた。彼等は東邊に起つた山人として、その大膽勇敢なること平地人の比でない。これは地理的環境によつて永き山地の苦闘生活から得たものである。彼等は大清國を號して支那全土をその掌中にさへ入れたのであつたが、國亡んだ今日、その民族的色彩は薄れ、その固有の言語民俗さへも漢人に同化しつゝある。彼等はトウングース族であつて古來北滿、松花江一帶の地に興亡した肅慎、挹婁、勿吉、靺婁、女眞はその同族であり、金、渤海、高句麗等史上に著れた雄國は實に彼等によつて建設せられたものである。然し今日は長白山の山地及所々に點在する特有の村落に於てのみ純粹な滿洲人の集團生活を見るばかりになつてゐる。斯く滿洲が古來諸民族隆替の地となり、その民族的占居の變遷の著しいことは興味ある地方的現象である。遼東半島が支那文明の棧道となつたこと、朝鮮半島が同じく民族運動の中間地域として滿洲に影響したことを、それがその原因の一半であらう。

三 聚落と開拓景

近世滿洲族人が清の朝廷に従つて北京方面に移つた後、滿洲は一時居住地が空虚のやうになつたといふ珍らしい事實があつた。之に反して今日の滿洲はあとから植民が続いて新らしい土地が切り開かれ、一軒屋から小部落を小部落から一村落を都邑をといふ風に、至るところ新開町村が発生し成長しつゝある。そこに人類の荒地を征服してゆく休止なき業績がまさしくと見出され、割合に古い聚落の少い滿洲は恰も漢人の思ふ存分に働き自己の文化を

自由に大地の上に盛り立てる舞臺であるかのやうに直感せられる。而して比較的早い年代に於て定着し現に古色を帯びた聚落の多い南滿地方よりも、これは特に北滿殊に東部内蒙古寄りの地方に多く見出される開拓景である。そうした新開地居住の様式は普通漢人の型と變つたものではないが、地方的建築材料の制限を受けて、殆ど總てが粘土で築いた平房子であり、その特徴は土墻が高く、必ず角隅に嚴めしく大きな砲眼防臺を造り附けてゐることである。これは人口稀薄な地方の常として匪賊からの被害を衰書するものである。

尙ほ全滿洲に於ける漢人種の民家の様式は、形の上から平房子と草房子とに分たれ、建築材料の上から石造と土造とに大體分たれる。地方によつてその分布の異りを見せてゐるが此等の差異が、時に旅行者をして人種學上に何か理由づけられるものではないかとの疑問を起さしめる。併しそれは單に地方々々の材料の異同と各自の趣向とに由ることと思はれる。概言すれば山地性の遼東半島の民家は硅石を材料とした石造、屋根は高粱稈で兩面葺卸しにした草房子が多く、屋壁も垣も悉く石材が用ゐられてゐる。半島から北進して遼河の平野に出ると、防風林に圍まれた民家の屋根は草房でも壁には粘土を用ひ、垣は高粱稈で結つてゐるものが多くなる。更に北進して蒙古寄りの地方になれば平房子で、家も垣も悉く粘土を用ひ、全く人間は泥の中に住むものかのやうにさへ感じられる。尤も富裕な人々は日干煉瓦を用ゐる。

〔93〕 安寧秩序の保たれてゐる關東州を一步州外に出ると、もう民家は各自の家を堡で武裝し、村々に保甲團を組織して生命財産を保護してゐる。村ばかりではない、大きな都會の町家にあつても必要であり、又習慣づけられもしてゐる。例へば公主嶺の支那人街でも洮南でも堡が家々に築かれ、特に安達の町の如きは街路の所々に見張りの爲の大

きな砲眼防臺が建てられてゐる程である。

大きな都會になると町家は多く黒煉瓦で、市街の鳥瞰では黒色の町の感じが與へられる。いづれの都市にも支那街特有の様々な看板が目立つし又宏壯な諸官衙が注意を惹く、漢人が建てたり又は繼承した軍事都市としては愛琿、黒爾根、齊々哈爾。政治都市には遼陽、奉天。交通と商業から榮えた都市には開原城、奉天、安東、營口、四平街、哈爾濱の傳家甸。特産の集散で興つた都市には安達、滿溝、雙城堡、長春、鐵嶺、開原。植民都市として新興勢力の漲つてゐる都市は長春、昌圖府、鄭家屯、通遼、洮南、又都市の生命觀から昔日の勢のない町には鐵嶺、營口などがある。

露西亞人は先づ西比利亞鐵道の延長として東支鐵道を軍事及經濟の立場から滿洲に敷設した。そして軍事都市として旅順を經營し不凍の大連港市にプランを立てた。哈爾濱は遼東の莫斯科に擬し、南滿沿線には公主嶺、遼陽、瓦房店の三大驛を配した、又北滿沿線には西の國境町滿洲里と東の國境町ボグラニチナヤとに最も典型的な露西亞式都市を建て、海拉爾、一面坡等の中間重要都市の經營に力を注いだ。日露戰役後長春以南の鐵道が日本人の手に受繼がれた今日に於ても、南滿沿線に於て尙彼等の聚落の遺跡とも言ふべき鐵道附屬地の諸建築、例へば大連の露西亞町、公主嶺の滿鐵舍町等の如き顯著なものが残つてゐるし、又多くの滿鐵附屬地のタウン・プランは露治時代のもものが踏襲せられてゐる。

一步長春から北に出て東支沿線に出ると到るところに露西亞人の聚落と生活とが見える。興安嶺の山中、東部線の淋しい山驛に於てさへ根強く開拓してゆく彼等の生活相は白樺林の植物景觀と巧に調和して一種言ふべからざる情

調を醸してゐる。白亜塗の家のかたまつた部落、丸太造のイスバ(小屋)建築材が風雨に黒ずんだ家々の並んだ村の結構、そこに露西亞式の荷馬車、プラトック(頬被りの布)を被つた女、驛附近の鐵道従業員宿舍町の落付いた街路一村落の中心に立つ希臘正教寺院の十字をつけたコバルト色の尖塔、それらが東支線列車の窓からあちこちに眺められる。手近かに露西亞流の大村落のプランを見やうとするならば寛城子に赴くが便利である。街路の惣じて廣闊なこと、これは昂々溪で驚くべき幅員の街路を見受けるのと同様に、火災に對する用意からも來てゐる。聚落の中央に寺院のあること、それから各の家が同じやうな廣さの菜園を持つて、揃つて道路を挿みながら、兩側に並んでゐることは最も典型的である。木造民家のすぐれた技巧を視はうとするならば、海拉爾を見るがよい。破風にも門柱門扉にも實に凝つた彫刻と色彩とを施した家が多い。それは北露西亞の森林地方に見出せる建築様式である。

日本人は最も進んだ文化を以つて植民してゐる。その治政下にある關東州と滿鐵の附屬地とは近代的文明の智識と明るさをもつて經營せられ、大連、旅順、營口、遼陽、奉天、撫順、鐵嶺、開原、四平街、長春、安東を始め沿線の諸都市は整然たる秩序のもとに殷盛な市街を成してゐる。特に大連は世界的の自由港として名高いばかりでなく、その街衢が放射形式を採つてゐる點、奉天や長春の附屬地は矩形形式のシステムを採つてゐる點など、すべて西歐の都市計畫の新味を出してゐる。兎に角一般に植民者が便利で心地よい生活にいそむやうな組織制度が遺憾なく施されてゐる。而して此等の施設經營は租借地關東州内にあつては旅順の關東廳、鐵道附屬地に於ては大連に本據をかまへた南滿洲鐵道株式會社がその中心となつて努力してゐる。純粹な農村としては關東州の小部落愛川村がある位で、日本の植民政策の立場からはもつと多くの植民が行はれ着實な農村が各地に興られなければならない。

尊い犠牲を拂つて滿洲に獲得した特殊な地位權利と、日支の眞の提携が經濟的にも文化的にも此地域の歩みを押し進めて行くことに想到すれば、日本國民はより深切な配慮と拓植の實行とを此地域に示さなければならぬ。

火田民としても亦水田經營者としても秀でた技能を多分に持合せてゐる朝鮮人は、現在夥しく北鮮から滿洲東北部に移住しつゝある。間島方面、吉林省各地例へば水に恵まれた海林地方にも、或は更に進んで奉天省の鐵嶺附近にも、黒龍江省海拉爾の郊外にも、洮昂線洮南の附近にさへも、水田を起し得るところには隨所に彼等のさゝやかな聚落が見受けられる。彼等こそ支那無産階級の植民者にも匹敵すべき隻手空拳の眞のバイオニヤである。白衣姿の彼等が大地に描く業蹟は淋しい民家を點じつゝ隨所に特有な開拓景を成してゐる。

衰頹の滿洲族の家構は日本人のそれに似通つてゐる。彼等の住居の用材は殆んど悉くが木材であり、日本の鳥居と同型の門を構へ或は神杆を立て、屋根の型といひその上に千木を載いてゐることといひ、垣を成す板材が横に張られてゐることといひ、彼我建築の比較研究に貴重な資料を提供してゐる。吉林城内、吉林の對岸の巴爾虎屯、海林阿什河、齊々哈爾城内、齊々哈爾の北郊二家屯、昂齊線の五福の村、洮昂線の興隆など、異民族の地の只中に於て時ならぬ日本式民家が軒を並べて出現してゐることは、旅行者が際會して一種の懐しみを湧かしめられるものである。兎に角滿洲族は支那人に同化しながらも尙幾多固有民俗の床ししいものを保持してゐる。

蒙古族の漂泊的の一次的聚落は海拉爾、滿洲里方面で多く見受けられる。彼等の帳幕には夏のもの冬のものゝが行はれてゐる。牛車を連れ水草を追うて彼等が移動して行く様は漂泊的人種の生活を知る上によい材料である。

如上滿洲は多様な聚落を包蔵し、各民族家構の相異せること、集村の多いこと、都市に附屬地、商埠地、城内の三

部を有つ複雑さ、放浪民の聚落の實例など、世界に類例の稀な居住地理研究資料に富んだフィールドをなしてゐるのである。

四 經濟的特質

滿洲の經濟は農業の上に布置してゐる。農業は爾餘の産業の上に卓立して住民の主業となり、これに基いて工業も貿易も活動してゐる。エルズウワース・ハンチントンが其著「亞細亞」の中で滿洲を概評して「大豆の國」と稱したのは肯綮に當つた言葉であつて、特に大豆は豆油、豆粕の油房工業を興し、對外貿易品の主要部分を占めるものとなつてゐる。

由來滿洲は溫帯北部に屬し寒暑の差甚しき大陸性氣候、加ふるに降水量が少ないのであるから、乾燥農業又は半乾燥農業の行はるべき地域である。それ故に耕作物の上にも制約を受けて其種類も多からず、多風寡雨、隔差大なる溫度、且蒸發量の多いその氣象に適應すべきもの、即ち葉の密生する菽豆類や根深く乾燥に堪え得る粟、高粱、玉蜀黍等の栽培が行はれる、殊に此等の内高粱、大豆、玉蜀黍等は所謂滿洲の特産物として生産額最も大きく世に知られてゐる。今東蒙古を併せて滿洲の耕地面積は約一・三〇〇萬町歩といひ、尙ほ一・二〇〇萬町歩の未墾地が残されてゐる。この内で滿洲(四洮線地方をも含む)に於ける主要農産物の種類と收穫高とを示せば左の通である。

品 種	昭和三年作付面積(段)	昭和三年豫想收量(石)
高 粱	一九、二二一、〇四〇	三六、〇三〇、三六〇
大 豆	三七、六五二、八〇〇	三七、七二四、二〇〇

玉蜀黍	九、九〇七、七二〇	一三、三七一、六七〇
粟	二一、八九六、八七〇	二八、四九一、〇六〇
小麦	一三、二七七、〇一〇	一一、二三五、七九〇
大豆以外の豆類	四、一七九、三三〇	三、三四八、八四〇

以上の内大豆は世界生産額の半を占め、滿洲經濟界の主流を成す油房の数は約一千、一ヶ年の豆粕生産高は約五千萬枚、昭和二年に於ける南滿三港(大連、營口、安東)輸移出量は豆粕(撒粕を除く)二五、五二三、九五三擔、其價格六八、三六四、七九三海關兩、豆油二、一七一、四二六擔、價格二四、九〇五、八三八海關兩を示した。又粟が滿洲から多く朝鮮に輸出せられることは朝鮮食糧問題上注目すべきことである。

經濟地理學上に於ける滿洲の特異點は二三に止まらないが、茲に興味ある一つの現象は、廣く市場廣場の發達してゐることである。滿洲里、海拉爾の草市、吉林の牛馬行の如き原料品の集中せられるものを始め、各都市に見る魚菜市、衣類雜貨市或は哈爾濱、滿洲里のバザール、齊々哈爾濱の襪襪市、大連の露天市場、開原城内の露天市場等これである。此等が各地方生産消費の中心市場として役立つてゐることは、人口密度の小さい滿洲だけにその機能も大きく目立つて見える。

翻つて我國の現状と滿洲とを考へせんか、我國多年の懸案なる人口食糧問題の解決は、滿洲の各種資源に期待すべきもの甚だ大なるものがある。勿論我國が滿洲に對し政治上先決すべき問題や國民が滿洲の環境に順應すべき猛省と覺悟の必要等は見逃すべきではないが、隣邦開拓の尊き使命からいふも、遅々たる日本植民の歩みに對しても未

開の土と天産とを多量に包容する此地域の秩序的拓植が自覺ある多數者によつて成さなければならぬといふことだけは明瞭である。

第七章 滿洲國の交通並通信業

第一節 交通に就て

一 序 説

抑々經濟の根幹たる農業を始めとしてその他一般資源の開發振興、治安の維持、商業の隆盛、對外經濟連繫に關して最も重要な役割をなすものは交通の施設に外ならぬのである。されど我が大滿洲國に於ても又こゝに重大なる注意を拂ふことにして、いまその滿洲に就いてこれを左に概説することにする。

滿洲國政府は、今回滿鐵との間に滿洲に於ける既設鐵道の委任經營契約をした結果從來の如き不要なる競争、不當なる壓迫、運輸連絡の不便はすべて一掃せられ、滿洲國の産業開發、一般旅行者の交通等には至極容易で且つ便利となつた。

斯くて滿洲國の諸鐵道の營業狀態は世界無比の良成績で、一日一キロの収益三百余圓、全線一日の収益四十余萬圓で、日本全體の鐵道の大正三年乃至五年が最良で百圓、普通は百圓以内、又朝鮮鐵道が五、六十圓程度なるに比べて、日本の鐵道の約四倍、朝鮮鐵道の六倍以上の収益を擧げてをるに見ても如何に有利な鐵道であるかを推測することが出来る。しかも今後産業の開發と相俟ちますゝ發展するものと見ねばならぬ。

尙ほ蘇國の極東航空路「モスクワ」―「イルクツク」線及び日本航空輸送株式會社東京大連線と結んで、歐亞連絡航空

路の大幹線を完成することは萬人の等しく翹望するところにして、又廣大無邊の滿洲の大平原を連絡するには、航空機が最も便利であることも一般の認めるところにして、滿洲の各地に定期航空輸送が開始せらるれば、産業の開發文化の促進に貢献すること非常に大なるものあるに鑑み、滿洲航空株式會社の設立を見るに至つた。同會社は滿洲國政府、滿鐵及び住友會社の率仕的出資に依る日滿合辦の株式會社で、滿洲國にその國籍を有するものである。滿洲は大部分が大平原で、到るところに飛行場或は不時着陸場が得られ、且つ氣流や氣象が良好である等あらゆる點に於て航空に最も適してゐるので航空路は素晴らしい勢いで發達し、滿洲においては旅行者は争つて飛行機を利用し、新京、ハルビン間の如きは余程前から申し込んでおかねば座席を得られぬ盛況振りである。而して日滿空輸連絡完成の結果、兩國間の距離は著しく短縮せられ、大阪を第一日の午前七時二十五分に發すれば翌日の午後一時四十五分にはハルビンに到着することが出来る。更に同航空路は日本と歐亞とを連絡する國際的使命を有するもので、蘇國のシベリア線は現在イルクツクまで延びてをり、滿洲里とイルクツク間は僅かに八百キロで、これを結びつけば東京とベルリンやロンドンと完全に連絡せられ將來夜間設備が完成すれば、僅かに二晝夜でベルリンやパリに到着することが出来るのも遠いことではないと思ふ。

二 鐵 道

滿洲の交通は古くから道路と河川即ち船車に依つて支配せられ、近代文明の先驅者たる鐵道の敷設せられたのは十九世紀の末葉であつて之れより十年を経たる一九〇七年に始めて三大幹線路たる南滿、中東、奉山の三鐵道完成せられ、其の後一九二五年迄に齊昂、吉長、溪城、四鄭、天圖輕便、四洮、穆稜の各鐵道が順次敷設せられたのである。

る。當時支那は列國の壓迫下に在り、此等鐵道の多くは外國の資本及び技術に依つて成つたものであつた。然るに一九二五年以降支那の利權回收運動の一端は滿洲に於ける支那側自辦鐵道の敷設となり、南滿線を包圍する潘海、吉海、齊克、洮索、打通等の各鐵道が急速に敷設せられ、南滿線に對抗するに至り滿鐵の前途頗る多難なるを想はしめたが、偶新國家成立によつて滿洲に於ける鐵道敷設は日滿協調の下に行はるべく、従つて日本の懸案諸鐵道問題も圓滿に解決せられ今後著しき發展を見るであらう。今左に南滿線を除く滿洲に於ける諸鐵道を烏瞰して見よう。

投資國別	經營形式	鐵道名	區 間	杆 數	軌 間
日 本	日本經營	南滿洲鐵道	(大連—長春) (其の他の支線)	一、一〇八	四呎八吋半
同	日本借款支	四 洮	(四平街—洮南) (鄭家屯—通遼)	四二六	同
同	同	洮 昂	洮 南—昂々溪	二二四	同
同	同	吉 教	吉 林—敦 化	二二〇	同
同	同	吉 長	長 春—吉 林	一一七	同
同	日支合辦(民營)	金 福	金 州—城子驢	一〇一	同
同	日支合辦	溪 域	(本溪湖—牛心臺) (其の他の支線)	二四	二呎六吋
同	同	天 圖	(龍井坊—頭道溝) (龍井村—局子街)	一一一	同
露 支 合 辦	同	中東鐵路	(滿洲里—安春) (哈爾濱—長春)	一、七二七	五呎

畫の下に日本の再三の嚴重なる抗議にも拘らず支那側に於て敷設したるもので所謂滿鐵包圍線の一部を爲すものであるが、葫蘆島築港未だ成らざるに滿洲國の成立を見るに至つた。

呼海鐵道は黑龍江省官民合辦で沿線は土地肥沃の爲、南滿又は內蒙古の農民の此の地方に移住する者多く盛に耕住を擴張しつゝあり、前途極めて有望である。海倫を起點とし馬船口に於て東支鐵道と連絡して居る。齊克鐵道は齊々哈爾、桑山間二五一杆の黑龍江省官民合辦で東支線の北方黑龍江省の肥沃なる土地の農産物を輸送する目的を以て建設せられたものである。昂々溪、齊々哈爾、省城間の昂齊支線に依つて洮昂鐵道に連絡して居る。

吉海鐵道は吉林に於て吉長、吉敦兩鐵道に、朝陽鎮に於て潘海鐵道に連る。開豊輕便鐵道は開原、西豊間六三杆七で奉天省官商合辦開豊長途鐵軌汽車公司の經營である。營業成績は良好でない。

三 道 路

滿洲に於ける陸路交通は、其の清朝の創めに當り、首都と各省の省城とを連絡する爲に間馬大路を設け、更に大路と稱し驛站(註一)を中心として四方に大路を放射し各省城間或は官路を連ね重要な交通路を建設したが、清朝三百年の平和に慣れるに及んでは政務の廢頽と共に道路の修繕も亦顧みられずして現在に至り、其の荒廢は極度に達し、夏季は雨後の泥濘甚しく自動車の通行は殆ど冬期に限らるゝの状態に在る(註二)

(註一) 驛站と稱するものは昔の官設驛遞であつて要衝の地を選んで局を設け人馬を備へ以て一切の公文及び官物を傳送する機關であつた。現在滿洲各地には既に郵政局設定せられて各樞要地及び各都市間運送の機關を設けられるに至つたが、地方によつては依然として驛站を設け官用唯一の交通機關として重視し地方行政の連絡

は一に之に依つてゐる。

(註二) 從て滿洲各地には夏道、冬道の別あり、季節によつて道路系統を異にするところが多い。

四 河 川

滿洲は海岸線が極めて短い爲に海路交通は微々たるものであるが、内部は幾多の大河貫流して河川に依る交通は古くより大に發達してゐる。即ち南滿洲地方は鴨綠江本支流、遼河本支流、大凌河等あり、殊に北滿地方に於ては水量豊富な嫩江、第二松花江、松花江本流、牡丹江、烏蘇里江等の大河があつて航運の便、漁業の利、共に大いに見るべきものがある。右の内松花江、烏蘇里江は北滿の二大水系をなすもので、前者は大小興安嶺に發源して黑龍江省中部の廣大な地域内に於ける水を集めて流るゝ嫩江と、他は白頭山に源を發して吉林省を東西に貫通する第二松花江との合流より成り、且つ其の下流に於て吉林省を南北に貫通する牡丹江を合せて緩かに流れて黑龍江に注いでゐる。本水系の抱擁する面積は實に五十二萬方杆に達する。後者は露國と新興滿洲國との境界を爲すもので、航運の上より見れば北滿に於て松花江に次ぐ大河である。而して松花江の航行權に關しては露支兩國間に屢々紛争を生じ未だ根本的解決を見るに至つてゐない。即ち露國側が一八五八年の愛琿條約、一八六〇年の北京條約及び一八八一年の露都條約等を援用して其の航行權を主張するに對して支那側は右條約文に現れたる松花江は古の混同江にして松花江、黑龍江の會流點より下流の烏蘇里河の會流點までの區域を指すものと主張してゐるのである。

五 鐵路總局の設立

[106]

滿洲國政府は滿鐵との間に、滿洲國固有鐵道及び之に附帯する事業の委託經營契約を締結し、其の旨を昭和八年二月九日、交通部布告及び訓令を以て發表した。一方滿鐵は同年三月一日社報を以て次の如く之を發表した。今回本社ハ滿洲國政府ノ委託ヲ受ケ滿洲國固有鐵道ノ經營ニ當リ、併セテ新設鐵道ノ建造ヲ請負フコトナリタリ、鐵路總局ヲ奉天ニ鐵道建設局ヲ本社ニ設置シ、本日ヲ以テ其ノ業務ヲ開始ス。

上記社報に明示してある通り鐵路總局は昭和八年三月一日以降、滿洲國固有鐵道の經營に當ることとなつたが、尙ほ委託經營の契約要旨については次の通り發表された。

滿洲國の治安を維持し、その産業を發達せしめる爲めには國內交通、就中、鐵道の整備發達に俟たざるべからず、然るに現時國內には未だ鐵道網充分に普及しあらざるのみならず小鐵道分立し、其の經營個々に行はれ不利大なる實情に在り、故に之等現在の諸鐵道を統一し、合理的經營に習熟せる滿鐵をして之が統一經營に當らしむるを最適當とす、加之右は滿洲國諸鐵道に關し、滿洲國の滿鐵に對して有する巨額の債務を處理する上に雙方の爲め便とする所なり、之即ち滿洲國政府が滿洲國鐵道の經營を滿鐵に委託する所以にして固より滿鐵としても異議ある所に非ざるを以て、茲に快く之を引受くることとせり。

而して鐵路總局の事業は、鐵道の外に水運、港灣、自動車及び其の他種種の附帯事業を包含するも其の大宗が鐵道經營であること勿論である。(昭和十年三月廿一日東京朝日新聞所載)

第二節 通信事業 一 序 説

滿洲に於ける通信事業は從來中國政府交通部の統制下に在り、殊に郵政に關しては其の業務が外人の統制下に在り東北政權も之に敢て干渉するところが無かつた爲め、業務状態も比較的良好であつたが、最近滿洲國の成立に伴ひ同國政府は滿洲に於ける通信事業の接收を圖り、爲に一時郵政局閉鎖問題等を惹起するに至つたが、滿洲國は着々交渉を進め、本年八月一日迄には殆ど通信機關の一切を擧げて同國政府の接收するところとなつた。左に電信、電話及び郵政の概要を述べやう。

二 電信及び電話

滿洲に於ける電信は日本、滿洲國及び東支鐵道の三者鼎立状態に於て經營せられて居る。即ち關東州及び滿鐵附屬地内は専ら關東廳通信局に於て之を管掌し、東支鐵道地帯内に於ては滿洲國並東支鐵道の業務交錯し、其の他の地方は主として滿洲國側の經營するところである。而して日本が滿洲に於て有する通信事業經營に關する權益は遠く日露講和條約に基き露國より承繼したるに根據を有するものであり、爾來拮据經營二十五年、現在では全管内に亘り殆んど普及完備の状態に在る。東支鐵道に於ける電信、電話は一八九七年東支鐵道建設に伴ひ電信線を架設せるに始まり、後一九〇〇年支那に於ける團匪事件に依る露國の電信、電話の經營權を公認せしむるに至つたのに基く年露支間に於ける取極に於て東支鐵道地帯内に於ける露國の電信、電話の經營權を公認せしむるに至つたのに基くものであるが、露國革命後に於ける東支鐵道の諸權利は逐年支那側に回收せられ電信、電話に關しても屢々東北交通委員會と東支鐵道管理局との間に交渉せられたが解決を見ずして滿洲國の成立に至つた。滿洲に於ける滿洲國側電信は光緒十年(一八八四年)天津より山海關を経て營口方面に架設されたのに初まり、翌光緒十一年には遼陽より

[107]

朝鮮釜山に至る電線及び奉天より吉林、齊々哈爾、愛琿、山海關方面に至る電信線を架設し、特に日露戦役後に於ては急速なる發達を遂げ主要都市間の連絡は清朝時代に於て概ね完成するに至つた。又電話の創設は光緒二十六年（一九〇〇年）頃電報局をして市外通話を兼營せしめたのを最初とし、民國十二年乃至十四年の間に於ては特に著しい擴張を見た。

尙ほ民國十一年東北政權は東支鐵道所管哈爾濱無線電信局を強制回收して以來、東三省無電計畫案を樹て之が實現の爲め東三省無電監督處を設置し、奉天及び長春に専用無線電臺を建設し、民國一二年吉林、齊々哈爾電臺完成するに及び此等各電臺を公衆通信にも解放し、更に民國一六年には獨逸との間に、同一七年には米國との間に無線通信路を開くに至つた。尙ほ民國一五年には奉天及び哈爾濱に放送局を設置し、又其の翌年には奉天、哈爾濱間、奉天、天津間に寫眞電送業務をも開始した。

滿洲に於ける電信電話局所は關東廳並に東支鐵道の施設に係るものを除き左の如くである。

區域、局所	局所數	
	電報局	電話局
奉天省	五七	一一九
吉林省	四七	九〇
黑龍江省	四四	五六
合計	一四八	二六五

尙ほ最近三箇年間に於ける電報取扱通數は左の通りである。

年度別	取扱通數
民國十七年	八三九、四一四
同 十八年	八三二、二八七
同 十九年	八九八、六二〇

三 郵 務

滿洲國の郵務制度に關しては新國家成立以來日尙ほ淺い爲未だ確立せらるゝに至らず、現在では従來の中國側の制度を其の儘踏襲してゐるに過ぎない。

而して支那に於ける郵便事務は古く驛站、文報局、信局の三機關に依つて掌られて居たが、時世の進運に伴ひ總稅務司ロバートハートの努力に依り改制せられ、交通部に屬する郵政總局の下に統轄せらるゝに至つた。

即ち奉天省及吉、黑兩省を夫々郵務區となし奉天及び哈爾濱に郵務管理局を設け之に屬せしむるに一、二、三等郵便局を以てする。一九三一年現在の一等郵便局は奉天省に於て奉天、安東、營口の三箇所、吉、黑、兩省に於て吉林、長春、齊々哈爾、滿洲里、大黒河、海拉爾、龍井村の七箇所を算ぶ。

第八章 滿洲國各論

第一節 吉林省

一 地形と位置

吉林省は清朝發祥の地である。清朝國を建て、から三百十餘年の今日、一度は中絶し廢帝となつた清朝の後裔溥儀氏は、新滿洲共和國の建設と共に三千萬民衆に迎へられて、新國家の元首となり因縁深き吉林省の一都市、國都と定められた長春にあつて執政の任に膺つてゐる。感慨無量のものがあるだらう。

滿洲新國家が國都として選定した程、重大性を帯びてゐる、長春の隸屬する吉林省は、一體如何なるところかといふと、滿蒙の東北隅にあつて東は烏蘇里江を隔て、露領沿海州と界し、北部及び西北部は同じく松花江を以て露領ハバロフスキー郡及び黑龍江省と相接してゐる。西部は松花江を隔て黑龍江省と相對峙し、西南部は奉天省と界し、南部は我が朝鮮の咸鏡北道、咸鏡南道及び平安北道と界する。東經百二十三度二分より百三十五度二分、北緯四十二度二分より四十八度二十五分の間にあつて、我が北海道の旭川附近と同緯度である。

山脈は東北から西南に縦走する三條の山脈と、これを横斷して東西に馳走する一條の横斷山脈からなる。縦行せるものは老翁嶺山脈、張廣方嶺及び老松嶺山脈で、横行せるは有名なる長白山脈である。一帯に北東は高く南西に至るに従ひ低くなり、山嶽丘陵地は北東に多く、南西は平野が多い。従つて北東地方に於ては、吉林省第一の產物木材を出し、南西地方は五穀稔る農耕地が多い。

吉林省の面積は、各方面の測定に可なりの相違があるが、大體一萬七千三百六十方里と算定してゐる。

人口亦面積と同じく、完全なる統計なく正確數を知るを得ないが、吉林省は八百五十九萬二千二百人とされてゐる

二 氣象及び氣候

吉林省の氣象は大體において、平原地帯の蒙古及び興安嶺の影響を受ける松花江流域の地方と、中部以東の山嶽地帯上に分れる。大陸氣候として冬は寒くてその期間が長い。夏は非常に暑く、春夏の期間は甚だ短い。十一月より四月に至る半年は冬で、氷雪に封ぜられ四月中旬大河の開ける頃から、五月上旬に至り各種の花木一齊に開花する頃までの一箇月半を春とし、五月の下旬から六月にかけて酷暑となり、六、七を絶頂とし八月に入つて朝夕既に冷氣を覚え、九月下旬に降霜あり、十月始めに薄氷を見、下旬暖房を用ひるに至る。

大平原は溫熱に對する吸收放射共に激烈であるから、氣壓の變化が甚しく、夏は大陸内が暑熱高く氣壓低きを以て太平洋方面より海風送られ、東風又は東南風となり、冬はこれに反し蒙古高原地帯より、寒き氣流を太平洋方面に流すので北風又は西北風となり、恰も高山下ろしの裾野におけるが如き現象を呈し、寒威凛烈を極める。

特に滿蒙内陸に高氣壓あり、楊子江方面に低氣壓あるときは強烈な西北風が吹いて、寒威特に猛烈でハルビン地方の平野においては住々零下四十度に下ることがある。これに反し楊子江方面の氣壓高上し滿蒙方面に低氣壓の現はれる時は、やゝ氣候が緩和する。冬季における三寒四溫は、この氣流の交互轉換によるものである。

夏期は海洋季候のおよばざる地方において特に暑く、最高溫度三十四五度に及ぶ。長春では三十八度に上つたことあり、これ夏期農作物の成長盛んなる所以である。日中は暑氣甚だしきも、蒸熱きことなく夜間は涼風至つて暑熱を一掃する。これ内地と趣を異にする所である。

吉林においては西部平原地方と、東部山嶽地方とによつて多少氣候に差等あるも、大體に前記の標準で動きつゝあることは同じである。降雨もほぼ一定の形式で變化する。即ち氣流の交代期たる春は雨少く、東風、東南風に變る

[112]

五月上旬から降雨を見、六、七月の二箇月に一年の雨量の大半を下し、八月中旬に至つて天気晴朗となり、九月十月は最も雨少く謂はゆる滿洲日和となり、十一月初旬降雪を見翌年三月末に至るまで時々降雪あり。年によつて降雨量に差異あるが、平均して吉林地方は全平均七百ミリから九百ミリで、東京地方の千五百、青森の千三百等に比して雨量少きも、その降雨量の八割が植物生育期の五月下旬から八月月上旬までに注がれるので、特別の旱天ならざる限り植物生育には妨げない。殘餘の二割は冬期積雪となつて地上に凍結し、三月末に至つて漸次融解して地下に浸透し、地下水となつて保存され、農作物下種時の水分の効力を移す。吉林の雨量が南滿地方に比して、約三割多く冬季南滿地方より降雪多きは、農業上惠まるゝ所甚だ豊かで、由來吉林人は夏期の多雨を恐れ、早年に不作なしと稱してゐる。

滿洲の經濟は農業の上に布置してゐる。農業は爾餘の産業の上に卓立して住民の主義となり、これに基いて工業も貿易も活動してゐるのが、滿洲の經濟的特質である。滿洲は「大豆の國」とも稱せられ、滿洲の主要農産物たる大豆高粱、玉蜀黍等の中でも特に大豆は豆油、豆粕の油房工業を起し、對外貿易品の主要部分を占めてゐる。

今滿洲の耕地面積は約一千三百萬町歩であるが、中吉林省は四百九十一萬六千四百四十三町歩で、奉天省の四百五十三萬五千百一十一町歩、黑龍江省の三百八十二萬六千八百六十八町歩に比する時、吉林省は隨一の耕地を有してゐる。又産額においても左の如き數字を示す。

大豆	三七、二四三、八八〇	一五、七五三、七〇〇
三 省		吉林省

高粱	三六、五六二、七三〇	一三、三九七、五三〇
粟	二八、七二六、三五〇	一〇、五三二、二〇〇

その他は玉蜀黍四百九十萬石、大麥百六十四萬石、小麥三百六十三萬石、陸稻四十五萬石、水稻百十萬石(粳)雜穀三百九十八萬石等である。右の内小麥は平野地方の西北部阿城縣北部、雙城、榆樹地方、また山嶽地方に於ては牡丹江の流域寧古塔、敦化、額穆の盆地等比較的地味肥沃の寒冷地帯に産するのを良品とする。水稻は専ら鮮農の手によつて産出されてゐるが、商租權の事實上認められなかつたにも拘らず、年々その産額を夥しく増加し滿洲總産額百五十萬石(粳)中吉林省は百二十七萬石を産する。東三省の水田五萬町歩の大部分も亦吉林省内にあること勿論である。近く商租權若くは一步進んで土地所有權の確認さるゝに至らんか、將來東三省の水田可耕地とされてゐる、百萬町歩の耕地は茲數年を以て開墾しつくされるに至ること疑ひない。

三 吉林省の特農産物

吉林省で特殊農産物として見るべきは、葉煙草、麻、藍等で葉煙草は松花江上流の樺甸、磐石、吉林、舒蘭、五常額穆の各縣に産し、年産額約五十萬斤で、その半數は省外に移出する。麻も山地帯の肥沃地及び穀類栽培地に産する。多くは自家用となるので、産額明かでないが六、七百萬斤を下ることはあるまい。藍は以前相當盛であつたが現今はドイツ染料の輸入によつて減退し、産額亦多大ではない。

その他將來有望と見られるのは、ホップ及び亞麻である。ホップはドイツ、ピールの原料産地チエコ、スロウアキヤ地方と氣候の状態相似の點があるので、良質の物を産すと云ふ。吉會沿線一帶の山間地方は特に栽培に適する。

[113]

[114]

亞麻の試験の結果北海道産に劣らぬものを出す。他に藥草があり、目下は林業の副産物として農家の副業に、自然野生のものを採取するに過ぎないが、それでも年額百萬斤を下らぬ。多くは營口方面に送り更に南方に進んで製藥するのである。將來藥草栽培は重要な産業となる可能性がある。なほ人蔘があり、その効力朝鮮人蔘に劣らない。茸類栽培も好個の産業たり得る。目下は自然生ものを採收乾燥して市場に送るに過ぎないが、年額四、五百萬斤を算す。日常の支那料理に茸類は欠くべからざるもの、一つであるから、その栽培は今後山地帯農家の副業として重視されてゐる。

四 牧畜業と毛皮

吉林省は廣漠たる荒地良草あるに係らず、牧畜業をなすものが稀で唯處々少數の山羊放牧を見るのみであるのは、これ全く本省の開発が農業を主とし牧畜を知らざる山東、直隸の移住漢民によつてなされたのによるもので、牧畜の有利なことを知らざるのに基因する。

滿洲の農家では、牛、馬、驢の役畜を少くも三四頭有せざるものはなく豚、鶏を飼はざるものはない。支那人は家畜を愛すること必ずしも邦人に勝るとは思へないが、これを馴致同化する技能に於ては邦人の及ぶところではない

- 一、馬 滿蒙の地は良駿を出し、自然の産馬地である。その産馬は全部蒙古系であつて、滿蒙の頭数は約二百五十萬頭と稱せられてゐるが、吉林省は七十一萬六十頭である。

- 二、らば「らば」は牝馬と牡驢の交配によつて産する雜種で、耕作運搬に使用せられ堅忍よく重役に服し、役用期間長く、粗飼少食、加ふるに粗管理に堪へ、價額も馬より高い。吉林省に産するもの二十七萬頭と註せられる。

- 三、牛 牛は朝鮮牛系統、山東牛系統、滿洲牛系統等あるが、前二者はその數尠く大部分は滿洲牛と、蒙古牛である。支那人は力役の爲に蒙古人は乳を取る爲に飼養し、肉は副産物としてゐる。吉林省に四十九萬五千頭が飼養されてゐる。なほ吉林省では最近肉皮等によつて經濟的價値を増して來たためと、馬賊の横行によつて馬は廢馬ならざる以外は盗み去られるが、牛は頗る安全なため漸次飼育を増しつゝある。

- 四、綿羊及び山羊 共に蒙古種であつて従來は肉用及び毛皮用として飼育せられ、羊毛及び絨毛は副産物として取り扱はれてゐた。牧羊は南滿洲の支那人は山羊を本位とし、蒙古における蒙古人は綿羊を本位とするが、共に皆多少の混牧をしてゐる。羊毛及び絨毛の産額より、その頭數を推測するに吉林省は十八萬頭である。

- 五、豚 豚肉は回教徒以外の支那人の最も賞用する食用獸である。燒酒屋では一戸千頭内外を飼養するものがある。通常七、八十頭乃至二、三百頭の豚を養ひ、一般農家にあつても常に十頭内外を飼つてゐる。仔豚は酒屋、燒酒屋、製粉所、穀物問屋等に賣却されるが、長春、吉林等が主要なる産地である。吉林省には二百二十七萬頭が飼育されてゐる。

肉用畜類としては豚以外鶏、鴨、鶩等があり、鶏四百八十萬羽、鴨八十五萬羽、鶩八萬五千羽が飼育されてゐるがその品種は全く改良を知らざる在來種である。

[115]

山地帯において農家の副業として家畜ではないが、藥用として角及び筋を採取する目的を以て、鹿を飼育する者がある。他に見ることを得ぬ産業である。

皮革は牛皮が最も貴ばれる。吉林地方の牛皮は多くは燻揉を用ひ、農家の使用する烏拉鞋を製するのを主なる用途

とし、その他は市場に出して賣却する。數量は年産額五萬枚を出せず、品質は佳良でない。馬皮は馬を屠殺しない故全部死馬の皮である。年産額七、八萬枚を出す。

豚皮は食肉が主であるため製革用としては顧みられない。多くは烏拉鞋の代用品に作るか、または膠の原料となすのみである。

畜産ではないが、毛皮類は尙吉林省における重なる産物である。古清朝時代においては吉林省より皇室に貢物を納める中、毛皮類を指定されてあつた。冬期寒氣凛烈で密林深き當省は能く毛皮の良好なる野獸を産する。その種類は左の如くである。

虎、豹、熊、野猪、豺、鹿、狼、貂、獺、栗鼠、花栗鼠、山猫、兔、狸、しや狸、密狗、灰鼠、鼯。

獵法は銃射と、陷阱法とを用ひ夏期は獵をせず、冬期に行ふ。獵者は多く藥草採收を兼ねてゐる。

五 水産事業

吉林省には大小の河川が多く、平野地方には調はゆる水泡子、溜池があり、湖水としては鏡泊湖、興凱湖があり、淡水魚を産す。松花江には鮎、草根魚、鯉、粗鱗魚、即魚、遍花魚、頭魚、鮭、鱈、干條魚、あおほわ魚、鮮頭魚、鱧子魚、黃魚、鱸、青物魚、捻魚、馬口魚等が上流、本流及び各地方に亘つて漁獲される。

又省各地の河川には古來珍珠と稱し、鳥貝の中から河眞珠を産し、指定の貢物となつてゐた。人蔘と共にその名甚だ高く、價格亦低廉でないが近來は産額非常に減少した。

六 森林及び林業

吉林省の産業で他に誇り得るものは、森林と鑛産である。就中森林は森林の吉林省と稱せられる程で、省の大半は森林地帯である。従つてその蓄積量の如きも一千二百七十七萬八千六百六十九町歩、立木石數四十六億五百七十一萬二千石と調査されてゐる。

吉林省は由來清朝發祥の靈地として、久しく他省民の移住を許さなかつたので開墾、伐木等も起らなかつたのであるが、今より二、三十年前山東地方の大凶饑により、飢民の渡滿するものが増加し、一面吉林省各地には金、銀、銅、鐵等を初めとして山野には人蔘、毛皮、鹿、茸等の埋没が多いので、これ等を獲へんと秘かに禁を犯かして入る者が増加し、何日とはなしに封禁が破れた。そこで政府は今より二十數年前封禁を解除し、同時に招墾局を設けて移民の積極的招致と、開墾の助成を策した爲め、爾後これ等の移民が増加すると共に伐木業が次第に盛んとなり明治三十年の東支鐵道敷設は更にこれ等の伐木業を刺戟して今日の發達を促進した。

吉林省の森林地帯を構成する主要山脈は種々あるが、就中長白山脈、老爺嶺山脈、張廣才嶺山脈、老松嶺山脈をもつて主なるものとする。

七 吉林材の用途

針葉樹中(一)朝鮮松(果松、裸松、紅松)は外邊白色、心材は微紅を帯びて加工に易く、樹脂に富み能く水漏に耐へ保存力及び強度大で、通直棟梁の材によい。現に支那人間に建築、家具、造船材として使用されるが、屋内諸部、戸障子、天井板、電柱、橋梁、土工材としての販路は逐年擴がりつゝある。

(二)朝鮮樅(沙松、杉松、柏松、魚鱗松)は材白色、質輕軟に木理通直で、一種の光澤を帯び、加工容易であつて強

[118]

度は朝鮮松に優るが、保存力は劣つてゐる。用途は建築材、家具材、棺材として用ひられ長持、戸、障子に用ひ輪木、マツチ箱、経木、割箸、家根板、製紙原料等に用ひられる。

(三)唐松(黄花松)は邊材淡褐色で、心材は赤褐色である。建築材殊に土葺、橋梁、電柱、土工用、枕木、枕木その他造船材によく、特に棺材として著名である。

(四)唐白楡(臭楡)は白色で、質軟かく木理通直であるが、保存力は弱い。製紙材料、粗箱その他粗材には適する。

(五)赤松(油松)は建築材料に好適であるが、數量が少ないため價値が薄い。

(六)一位(赤柏松)は外邊白く心材は紅色を呈してゐて、家具、裝飾、鉛筆材によい良材を得ることは難い。

潤葉樹においては(一)楡(柞木)は邊材は淡黄色で、心材は淡褐色を帯び、體線太く光澤甚だ強く、塗上げか殊に美しく脈管大きく材は軟であるが強く、負擔力、抗壓力共に大で弾力も可成で保存力強く水漏に耐へる。用途は建築、枕木、裝飾材、西洋家具、陳列棚、車材、樂器等に廣く用ひられる。

(二)ひん(しあむろ)は材は淡褐色を呈し、一種の光澤がある。箱、櫃、卓、腰掛、椅子、家具、家根、軸木等に用ひ、また棺材に用ひられる。

(三)滿洲楓(白牛)鬼目葉(寧斤子)板屋楓(色樹)共に材重く、堅く、淡紅色である。櫓及び車材、西洋家具、室内裝飾材、経木、彫刻材、靴型、漆器木地、銃床用として將來多くの販路を開拓できる。

(四)よつ(水曲柳)は邊材帯褐色、心材は淡褐色であつて、脈管大きく肌理密でないが、堅硬であつて紋理鮮明である。家具、天秤棒、建具、車輛、枕木、杭木に使用される。

(五)白樺(樺樹)は淡紅色で、光澤があつて樺材に類似する故に、樺やマホガニーの模擬材又は代用材として北海道北米、濠洲等に輸出される。材質堅く緻密であるが、狂ひが頗る大きく、製作に困難であるけれども、肌理密で美しいため家具材に重寶がられる。樹皮は樺皮油として黒龍江省から産出する。

(六)春楡(楡木)オヒョウユレ(山楡)は質が密で、重く堅く割れ易く、加工困難であるが、車輛、體材、樺材に用ひられてゐる。

(七)滿洲胡桃(核桃木、楸木)は軽く軟かく、質は粗であるが割れや狂ひを生じないので、銃床用、測量機械用、三脚として最適である。日本のクルミ材の代用となるものである。

(八)ドロノ木及びヤマナラシ(楊木、廉梨、楊樹)は共に白色で光澤があり、質柔であつて、靱性に富み、安全マツチ用軸木として勝れてゐる。また車軸用として良い。

八石 炭

吉林省内における鑛山は森林に次ぐべき主要なものであるが、交通不便のため吉長鐵道沿線にある小炭鑛以外は、殆んど開發されてゐない。石炭鑛方面は將來相當注目に價するものがある。樺甸縣揮發河沿岸の炭田、吉敦沿線拉法河流域の炭田、吉林、舒蘭二縣に互る紅窩炭田、穆稜、密山二縣穆稜河流域炭田、間島、延吉、和龍地方の炭田等を主とし、他にも小炭鑛諸所に散在する。

[119] 一、揮發河に沿ふ官街の上流十二キロの處に天和屯部落がある。その部落を中心として河に沿ひ、東西約十二キロにあつて炭層があるが、附近に大需要地なきため、最近は休採してゐる、同炭坑の延長として東南二里餘の處に

蘇密溝の炭礦がある。この地方の地質、地形等より見て炭層は相當面積に及ぶものゝ如く、奉海、吉海線の開通せる今日、徐々に開發せられるに至るだらう。

二、吉林省城の東南二〇キロ餘、拉法河流域一帯に發達せる侏羅紀層の地は夾炭層であつて、その主なるものは蛟河の東南一三キロの五龍屯炭田、杉松街炭田である。共に德興公司の名によつて古くから採炭せられてゐるが、交通不便で附近に需要地なく、遠く吉林市場に搬出する結果、經費關係において經營困難のため近年殆んど休山状態である。

三、紅密炭田は吉林省城の東北六八キロ紅密鎮附近に始まり、舒蘭縣内に及び一方棒槌溝より更に東北走し、斷續して東支線一面坡附近に達す。密山炭礦と共に省内に於て最大の面積を有す。目下口前、西溝、老君堂、小頂子、閻家溝、大石頂子、二道河子、地局子、棒槌溝の順を以て炭礦があり、炭層約十二メートル、質は亞炭であつて揮發量多く、吉林北方地方の焼酒製造と一般温突に使用せられる。將來吉五鐵道が貫通すれば有望である。

四、穆稜、密山炭礦は穆稜縣内より東北して密山縣に入り、更に東北して穆稜河上流域に達する一大炭田である。撫順、新阜に次ぐ炭量を有し、埋藏量約八億トンと稱され東支鐵道に近き穆稜附近は既に開發せられてゐる。

五、延吉方面には小礦區散在し、特に朝鮮國境方面に多い、この地方の炭質は良好ではないが、石炭に乏しい朝鮮に接してゐるので、將來交通完備すれば相當開發を見るべく期待せられてゐる。

六、吉長鐵道沿線營城子驛附近に産する營城子炭は、吉林、長春兩市に使用せられてゐる。

その他約五十に近く吉林省實業廳に登録せられた礦區があるが、大正九年以來の不況のため、小炭礦の大部は休止

の状態である。

九 鑛業の状況

本省には金屬鑛では砂金と銅鑛以外に目星しいものはない。

一、磐石石咀山銅鑛は吉林省有の銅山で、邦人間に有名である。吉林省城より一六、七キロ磐石縣城より東北二十キロのところにある。

二、延吉天寶山銀銅鑛は日支合辦の銅鑛として内外に著名である。銅鑛其の他二、三を數へるに過ぎない。滿洲國では國家統制の下に滿蒙の資源大開發の計畫を樹て、未開拓の滿蒙各地方の鑛山を官營として一氣に開發することに決し先づその第一着手として吉林省並びに北滿各地の砂金鑛を近代的技術によつて採取する意圖らしい。吉林省は黒龍江省とともに古來砂金に富み、山川各地無數に砂金を産出したが、現在では殆んど採集しつくされた觀がある。併し新政府の謂はゆる科學的の採鑛を以てすれば相當有望なものとなるかも知れない。同時に新に發見されるものも相當出て來るに違ひない。今省内各縣の砂金鑛を挙げれば左の如きものである。

吉林	五	伊通	二	濛江	三	農安	一
舒蘭	一	樺甸	六	盤石	三	延吉	四
寧安	二	揮春	一	東寧	五	額穆	二
江清	二	和龍	一〇	依蘭	三	密山	三
綏遠	二	樺川	三	穆稜	五		

その他鐵、鉛、亞鉛、銀、アンチモニー等の金屬、非金屬礦もあるが今日までに發見されたものとしては、大して有望のものはない。

一〇 工業の状況

吉林省は穀類の産出多く、しかも原料のまゝ輸出せられる關係上組織化した工業は至つて幼稚である。

一、製材 豊富なる森林を擁してゐるにもかゝらず、交通不便のため運賃割高の結果、輸出せられるもの少なく、滿洲の地方的需要を満たしてゐるに過ぎない。

二、製粉 麵類は貴賤の別なく常食とする關係上、嘗てはハルビン、吉林、長春等に大規模の製粉工場があつたが、米麵の壓迫を受けて漸次衰微の傾向である。

三、油房 製油事業は滿鐵の油房業大連集中策に影響せられて、大規模の工場は設立されてゐない。ハルビンと長春に數箇の工場を見る程度である。

四、燐寸工業 原料である楊柳樹に富めるために、今後は益々發展の可能性がある。吉林燐寸會社、新京の日清燐寸會社は邦人の經營に係るもので、その他吉林、三姓地方にも二、三の工場を有し省内の需要を満たしてゐる。

五、醱糖業 原料を砂糖大根に仰ぎ、未だ成功の域には達してゐないが、省内の氣候風土が原料の栽培に適してゐるから、將來は相當有望な事業の一つであらう。

六、燒鍋業 紅根を原料とし、地方人の嗜好に適した火酒分強烈な燒酒を製造するもので、他地方と何等異なる所はない。

以上に述べた工業以外は未だ家内工業程度であつて、動力を使用してゐても手工業の範圍を脱し得ない。

十一 産業上より見たる吉林省

滿洲新國家は建國早々の重大國務に忙殺されてゐたが、政府諸機關の整備と、人材の登用を終つたので愈々輝かしい建設の大事業に着手した。同國家が建設のモットーとして決定した基本政策は、諸般の事業に對する公營主義である。即ち新國家はこの主義によつて、産業の國家的集中ならびに統制をはかり、併せて國家財政の確立を期せんとするものであつて、ロシアの國營政策の特徴を採つたものである。

現在決定してゐるのは獨立した關稅、鹽稅、郵便稅、電信電話稅の外、今回新たに決定を見たのは、都市、採礦、電力、阿片、國道、牧畜等である。叙上の如く採礦關係にては、吉林省が主であるが更に電力問題に關しても、吉林省は舞臺上に活躍せねばならなくなつた。

即ち従來南滿電氣會社提供の電力は、發展途上の滿蒙全般には供給し得ないので、官營の大電力事業を起さんとするものであつて、政府が第一に着目してゐるのは、吉林北方の鏡泊湖の落差を利用せんとするにある。將來電力は各般の開發設備の前提となるので、恐らく異常の發展を遂げるであらうが、その利益を蒙むもの、第一は吉林省であらねばならぬ。その他國道においても都市計畫においても、吉林省の將來は多望といはねばならぬ。

十二 吉林省の河川交通

大河川の本支流が省内を貫流し、水量多く舟楫の便が多いが、物資輸送期が冬期であるため、折角の能力を發揮することができない。漸く夏季少量の物質と、流筏の便を與へてゐるに過ぎない。

松花江本流

1. 吉林より樺甸官街まで、樺甸、濛江二縣と額穆、磐石二縣の一部を經濟範圍とし、十萬斤程度の舟を通じ、相當の水運効果を發揮してゐる。吉林に集中する木材、大豆、葉煙草等約二十數萬噸は、この水運の恩恵を受けてゐる。官街より上流は主として木材の流下に利用されてゐる。吉敦線の西部盆地、老爺嶺、張廣才嶺の溪谷を流れる拉法河は、蛟河より上流は木材の管流をなし下流は四、五萬斤程度の舟を通ずる。

2. 吉林より伯都訥まで、この間は烏拉街、秀水甸子、五棵樹、陶賴昭等の小都會を流れるため、相當利用せられてゐる。百噸以下の小汽船航行し、早魃時以外は十萬斤以上の舟を通ずるが、陶賴昭、伯都訥間は水流悪しく舟行困難である。

3. 伯都訥よりハルビンまで、三岔口でチヘル方面から流れる嫩江と合し、水深水量共に多く舟楫非常に便利である。支流に拉林河があるが拉林より下流、サダ迄約五十哩程、一萬斤程度の舟は運航出来る。五常方面の木材は同河によつて流下し東支線蔡家溝で揚運する。

ハルビン下流

吉林省東北部、松花江沿岸地方は早くより開發されてゐるが、距離甚だ遠く陸路輸送が困難であるため、解氷期を待つてハルビンに輸送する關係上、水運能く利用せられ、舟楫に便利である。江南岸に新甸、方正、三姓、悅來鎮、富錦、拉哈蘇々等吉林省における重要都市がある。北岸には呼蘭、巴彦、木蘭、大通、湯原、綏東等の黒龍江省における都市がある。臨江縣より黒龍江本流を溯れば、烏雲、愛輝、大黒河に到ることが出来る。この間は交通上重

調を醸してゐる。白亜塗の家のかたまつた部落、丸太造のイズベ(小屋)建築材が風雨に黒ずんだ家々の並んだ村の桔槔、そこに露西亞式の荷馬車、プラトック(頬被りの布)を被つた女、驛附近の鐵道従業員宿舍町の落付いた街路一村落の中心に立つ希臘正教寺院の十字をつけたコバルト色の尖塔、それらが東支線列車の窓からあちこちに眺められる。手近かに露西亞流の大村落のプランを見やうとするならば寛城子に赴くが便利である。街路の惣じて廣闊なこと、これは昂々溪で驚くべき幅員の街路を見受けるのと同様に、火災に對する用意からも來てゐる。聚落の中央に寺院のあること、それから各の家が同じやうな廣さの菜園を持つて、揃つて道路を挿みながら、兩側に並んでゐることは最も典型的である。木造民家のすぐれた技巧を覗はうとするならば、海拉爾を見るがよい。破風にも門柱門扉にも實に凝つた彫刻と色彩とを施した家が多い。それは北露西亞の森林地方に見出せる建築様式である。

日本人は最も進んだ文化を以つて植民してゐる。その治政下にある關東州と滿鐵の附屬地とは近代的文明の智識と明るさをもつて經營せられ、大連、旅順、營口、遼陽、奉天、撫順、鐵嶺、開原、四平街、長春、安東を始め沿線の諸都市は整然たる秩序のもとに殷盛な市街を成してゐる。特に大連は世界的の自由港として名高いばかりでなく、その街衢が放射形式を採つてゐる點、奉天や長春の附屬地は矩形形式のシステムを採つてゐる點など、すべて西歐の都市計畫の新味を出してゐる。兎に角一般に植民者が便利で心地よい生活にいそむやうな組織制度が遺憾なく施されてゐる。而して此等の施設經營は租借地關東州内にあつては旅順の關東廳、鐵道附屬地に於ては大連に本據をかまへた南滿洲鐵道株式會社がその中心となつて努力してゐる。純粹な農村としては關東州の小部落愛川村がある位で、日本の植民政策の立場からはもつと多くの植民が行はれ着實な農村が各地に興られなければならない。

尊い犠牲を拂つて満洲に獲得した特殊な地位權利と、日支の眞の提携が經濟的にも文化的にも此地域の歩みを押し進めて行くことに想到すれば、日本國民はより深切な配慮と拓植の實行とを此地域に示さなければならぬ。

火田民としても亦水田經營者としても秀でた技能を多分に持合せてゐる朝鮮人は、現在夥しく北鮮から滿洲東北部に移住しつゝある。間島方面、吉林省各地例へば水に恵まれた海林地方にも、或は更に進んで奉天省の鐵嶺附近にも、黒龍江省海拉爾の郊外にも、洮昂線洮南の附近にさへも、水田を起し得るところには隨所に彼等のさゝやかな聚落が見受けられる。彼等こそ支那無産階級の植民者にも匹敵すべき隻手空拳の眞のバイオニヤである。白衣姿の彼等が大地に描く業蹟は淋しい民家を點じつゝ隨所に特有ある開拓景を成してゐる。

衰頹の滿洲族の家構は日本人のそれに似通つてゐる。彼等の住居の用材は殆んど悉くが木材であり、日本の鳥居と同型の門を構へ或は神杆を立て、屋根の型といひその上に千木を載いてゐることといひ、垣を成す板材が横に張られてゐることといひ、彼我建築の比較研究に貴重な資料を提供してゐる。吉林城内、吉林の對岸の巴爾虎屯、海林阿什河、齊々哈爾城內、齊々哈爾の北郊二家屯、昂齊線の五福の村、洮昂線の興隆など、異民族の地の只中に於て時ならぬ日本式民家が軒を並べて出現してゐることは、旅行者が際會して一種の懐しみを湧かしめられるものである。兎に角滿洲族は支那人に同化しながらも尙幾多固有民俗の床しいものを保持してゐる。

蒙古族の漂泊的の一時の聚落は海拉爾、滿洲里方面で多く見受けられる。彼等の帳幕には夏のもの多冬のもの多が行はれてゐる。牛車を連れ水草を追うて彼等が移動して行く様は漂泊的人種の生活を知る上によい材料である。

如上滿洲は多様な聚落を包蔵し、各民族家構の相異せること、集村の多いこと、都市に附屬地、商埠地、城内の三

◎ 新 京

新京即ち長春は、新滿洲帝國の建設と同時に新しく首都となつた都市である。一時吉長道尹衙門が置かれたところで、その當時は一面政治上の中心地をなしたけれども、民國十一年衙門は吉林に移され、爾來商工業の一中心地として繁榮してきた。

南滿洲鐵道北端の最終點に位し、歐露氣分すこぶる濃厚である。東支鐵道、吉長鐵道が、わが南滿洲鐵道とこゝで相會し、聯絡するので國際的折衝地として重要な地位にあるのみならず、北滿物貨の集散地として商業盛んであり殊に新首都としての今後の發展は目覚ましいものがあらう。

市街は伊通河の左岸にあり、新市街、商埠地、長春城内の三區に別れてゐる。新市街は舊頭道溝にあつて、明治四十年九月滿鐵が百五十三萬坪を買収して、鐵道附屬地として開拓したのに始まり、區劃整理を行ひ九十萬坪の地域に文化的新都市の建設を計畫し、すべて歐米における近代的諸都市に倣ひ、街衢を整備し茫洋大海の如き平原中に洋風の壯麗な都市を現出せしめた。

滿鐵長春停車場前の廣場を基點として、日本橋通、中央通、敷島通の三幹線路は商埠地または城内に向つて直進し中、小の道路が縱横に交叉してゐる。この邊は巨商蝟集し、建物宏壯にして大陸的都市としての面目を備へてゐる。商埠地は支那政府が日本人の新市街に對抗するために建てたもので、歐風都市として建設せられた。壯麗な道路、廣大な建物をもつて新市街と相對し、新滿洲帝國首都としての各官公署、開埠局等の巨館がある。城内は長春縣政府の所在地として、この邊一帯沃野の樞軸を握り、吉林、懷德、農安、伯都訥、伊通河等城を控へ、農産物の集散

大市場として殷盛を極める。

◎ 長春と寛城子

寛城子は舊ロシアの築ける市街で、長春驛の北方一マイルの地點にあり、こゝに東支鐵道南部線の終端驛を置いてあるが、今日は繁榮を新市街に奪はれて寂寥を極めてゐる。

長春は新滿洲國の首都に選定されて日なほ淺きも、長春停車場を中心として周圍數マイルの土地賣買を禁止して、大都市畫計を樹立するとか、百五十萬人に供給し得る上水道の設備をなすとか、その他各官公衙の建設をなすなど首府としての設備に寧日なき有様であるから、基年ならずして、その面目を一新することであらう。

◎ 吉林

吉林は省政府の所在地である。張學良時代までは東北邊防軍副司令長官公署がおかれてあつたが、今は當然廢されてゐる。唯省政府秘書處、民政廳、財政廳、教育廳、農礦廳、吉林全省公安管理局、吉林交渉所は新滿洲政府となつた今日もなほ存置されてゐる。そのほか政治、財政に關する關係各官署もおかれてある。

吉林はかく政治的に重要な都市たるのみならず、また將來滿蒙商工業の中心都市となるべきことは、少しく滿蒙の事情に通ずるものゝ均しく推斷肯定するところで、あらゆる發展の要素を具備してゐる。千古斧鉞を入れざる連峯を背負うて、舟楫の便ある大河に臨むだけでも、他の滿洲都市には見ることのできぬ特長である。

今年中にも開通すべく豫想される吉會線は、吉長線、吉敦線の延長で、これが完成の曉には朝鮮を経て帝國と滿蒙とをつなぐ一大幹線の現出となり、吉林の重要性は一層高められるであらう。

[128]

更に吉林は海龍を経て奉天に連絡する吉海、奉海線の起點で將來は吉林より北上して東支線に接續する豫定線もある。また吉長線で七九マイル、三時間半で新國都新京に達する四通八達の要衝である。

産業上から見た吉林は何よりも、まづ木材の都であり江面を壓する編筏、吉林材の名が高い。木材は松花江上流から搬出せられ、こゝから水路ヘルピンに、陸路新京に送られる。製材業、マツチ製造業等はその他の工業を特色づけるもので、その他には葉煙草を産し、藥劑「烏拉草」毛皮、穀類などの取引もある。

松花江畔に臨む吉林は、三面を山に圍まれ山河襟帶の風光は、わが京都に彷彿たるものがある、吉林の舊稱吉臨烏喇の吉臨は「沿ふ」烏喇は「大江のほとりなる都」の意を表はしたもので、誠に「水の都」の名にふさはしい。また「船廠」なる吉林の別名が支那人間に一般に呼稱せられてゐるが、これまた江畔の都市としての面目を現はしてゐるので、既に古く明時代から造船所があつたらしく、史上に明記されたところでは、清初順治十八年に吉林西關外、今の船營街には造船廠と水師營とが設けられ、當時邊疆を侵したロシアを征すべき一の海軍根據地としたと云れると、かく河川の交通は吉林の武器で、夏の舟運のほか、河上凍結の冬は、馬車や櫓や自動車によつて物資が集散される。河岸に水院子と呼ぶ馬車宿ができて、奥地から穀物を搬出して來た馬車夫達が江岸の宿に泊り、馬は江の氷上に結んだ橋の中に入れられてゐる光景など、見なれぬ旅客にとつては實に珍らしい感じを與へる。

◎ 吉林附近の景勝

龍潭山は省城の北方二里、松花江の對岸に千五百尺の高さで聳えてゐる。冬は江の氷上を渡つて行くもよく、夏は輕舟で渡るもよいが、吉敦線によつて龍潭山驛まで行くと、そこから登山の便がある。山上に龍鳳寺があり、前清

[129]

時代には降雨を祈つた寺である。寺の西北、龍潭と呼ぶ深い池は年中水の潤れぬ靈池とされてゐる。龍潭山は特に秋色がよい。また山頂から西望する全吉林の雄大な風光はえもいはいはれぬ。

團山子の古城跡は、松花江に架した吉敦線の鐵橋を渡つて、右手に見える丸く低い山である。このあたりの部落を團山屯といふ。山は高麗の城跡と稱せられてゐる。

江南公園は吉林の沿岸の碼頭から渡舟で渡つた對岸の地にある。古木が茂り、岸一帯が遊歩地となつてゐる。松花江の雄大な景觀は、こゝに來て一入深く感ぜられる。

北山は普通吉林の展望地點とせられてゐる。こゝに立てば吉林全市が脚下に集り、巴形に曲流する松花江が光つてゐる。山腹には關帝廟、藥王廟、坎離宮、玉皇閣が建てられ、その建物もまた立派である。

歡喜嶺は迎恩門を出て十餘町、一の峠をなしてゐる。新京街道に續くところで、峠の上から吉林の街を遠望し得る。小白山は吉林の西南郊一里餘のところ立つ。靈山と稱せられる長白山の山神を祭る舊習から、清朝雍正十一年こゝ小白山(滿洲名溫德亭山)上に、長白山望祭殿が建造せられた。今も山上に正殿が残り、官養の神鹿十數頭を飼つてゐる鹿苑が山麓にある。

阿什哈達摩崖の碑は省城の東約二里のところ、松花江岸の石壁で、往時明將が女真征伐の際、度々この地を過ぎたものと覺しく、石壁に刻む四行、四十五字によつてそれが推される。

飲馬河は吉長沿線にあつて、清の高宗が東巡の際、河水を馬に飲ませたといふ故事からこの河名が生じたといふ。この一帯地味肥沃で農産物が多い。

飲馬河から下九臺の間には、かの清初蒙古との疆界を定めたといふ柳條邊牆が横切つてゐる。いま堤防は殘存してゐない、このあたり、往年の史實が回想されて興趣深い。

土門嶺はその名の示す如く、山と山とに挟まれて五六里の間、門のやうに挟まる。こゝに千六百尺のトンネルがある。この地は杏花、鈴蘭、蕨の名所として名高く、吉長間の遊覽地となつてゐる。

九站は松花江の河港である。吉林の下流二十五支里にあつて、吉林の副港となつてゐる。松花江からの貨物も吉長鐵道によつて發送するに便利のために、榮えてゐる。

◎ 吉林城内の商業

吉林の人口は日本内地人九百五十五人、朝鮮人二百三十七人、支那人十八萬九千五百二十七人、外國人百八人、合計十九萬八百二十七人である。

城内は七キロにわたり、不規則な城壁をめぐらし、その形から琵琶湖の名もある。商業區としては河南街、糧米行街に諸銀行、輸入雜貨商、綢緞布疋商多く、北大街、西大街には藥劑、葉煙草、麻、穀物等吉林の特産物を扱ふ店あり、牛馬行街の牛馬市、苦力市、野菜、肉類等の市場はすこぶる殷盛を極め、山貨店には大問屋が揃比してゐる。しかし一步屋敷町に入れば、誠に靜閑にして滿洲旗人の大きく古雅な家構へが、旅人の心を惹く。

[131] 吉林は滿洲の舊都であり、清朝發祥の傳説にからまる故地であるため、省城全體を包む景團氣がどこことなく落ちつき、滿洲人の民俗、生活様式が漢人化して亡びつゝある今日でも、さすがに他地方に味ひ得ぬ古典的のものが漲つてゐる。木材に裏まれてゐる關係上、建築に材木が豊富に使はれてゐるのも面白い。

商埠地は近年急速の發展をなし、吉林停車場を出れば、新開門まで東大馬路、西大馬路の大道が左右に横がつてゐる。日本人は多く商埠地に居住し、日本總領事館のあるものこの地區で支那側では舊吉林省議會、文廟などがある。北郊致和門外は回教徒の居住地で、清真寺があり、また城西迎恩門外の迎恩街の通りは、いはゆる御路にあたり、古來貢物の進路であつた。寺廟多く古都の面影をしのぶ心地がする。

◎ 教化の特産物

教化から東方に向へば吉敦線の終端驛教化に達する。こゝは人口一萬五千内外にすぎぬが、清朝の發祥地として名高く、吉會線全通の曉には、吉會線の中央における唯一の都市となり、豊富な森林地帯の恩恵により、有力な木材鑛産の集散地として活躍するに至るであらう。

教化の特産物に人蔘がある。滿洲語で額爾私多といひ、貴重な高山植物のことである。百年の樹齡でなほ二尺にみならず、一根數百圓、數十圓に賣買されてゐるといふ。

◎ ハルビン市街

ハルビンは一八九六年、ロシアが清國との條約により東支鐵道の敷設權を得るや、松花江畔の無人境約五平方露里を馬蹄銀六百萬兩で買収し、市街を建設したにはじまり、東洋のモスクヴァたらしめんとした理想は、忽ちにして實現され滿蒙の大平野に夢の如き大都市が築かれた。

しかし帝政ロシアの崩潰に伴ふ對外勢力の失墜に乗じて、支那側は國權の回收に努め遂に一九二〇年九月、ロシアの治下にあつた鐵道沿線の司法權を回收し、鐵道附屬地を東省特別區として、ハルビン市に高等法院、地方法院を

設け、次いで漸次行政權、教育權をも回收したが、民國十六年七月二十一日大元帥令で、東省特別區行政長官公署の官制が公布されるに至り、爾來行政長官は各省省長と對等の地位にあつて、ハルビンに駐在し管内の一般行政に當ることとなつた。そして複雑な國際關係を有するハルビン市は、特別市として特殊な制度の下に自治制を布いてゐる。新興滿洲共和國政府でも多小問題となつたが、結局この制度はそのまゝ存置することに決定した。

ハルビン市は吉林省の北境に位置し、松花江を隔て、黑龍江省と相對し、産業、經濟、交通の三方面から見ても、また典型的な國際都市として、政治上に反映を來す上からも、眞に全滿洲の重心となつてゐる。滿洲の穀倉と謂はれる松花江流域平野の農産物に對して、ハルビンはその集散市場であり、北滿輸入貿易の中心地として商業金融に重きをなし、また日、滿、露その他各國民の折衝舞臺として、中にも露、滿兩國の勢力消長を如實に現はす地として、著しい特色を帯びる。

そしてこれ等の現象が、一に交通に胚胎してゐることは否まれぬ事實で、東支線(中東鐵路)はこの地を中心として東はウラジヴオストークに西はモスクヴァを経て西歐諸國に、南は新京から我が滿鐵線により東洋諸國に通じ、また呼海鐵路は、對岸馬船口から海倫に延びてゐる。一方水路は松花江を溯つて吉林へ、また下つて黑龍江に合し、ハバロフスクから沿海州方面の諸市に至る。

[133]
人口は市及び附近を集めて、昭和五年十二月末現在で、日本内地人三千九百、朝鮮人四千五百、ロシア人九萬、支那人二十三萬、その他四千、それを人種別にするといギリス、アメリカ合衆國、ドイツ、フランス、イタリヤ、ポランド等その數實に三十餘種族に及び、頗る多岐にわたつてゐるが、これ等を合して總數三十三萬三千餘、市勢

の活潑が窺はれる。

ロシア人によつて新市街と呼ばれるところは、支那人には南崗または秦家崗と稱せられ、土地高燥にして主として官衙のあるところ。モスクヴァを模して都市計畫を進めたといはるだけに、各戸建築の粹をあつめ、道路清潔、綠樹に恵まれ、露西亞の全盛期には支那人の居住を制限してゐた。

新市街を建設する以前即ち露西亞が最初に市街を建てた舊ハルピンは、今は工場地として残つてゐるにすぎない。西方病院街附近には沖、横川兩烈士の「志士之碑」が立つてゐる。

馬家溝は新市街の南方、馬家溝河を隔てて展げ、白系露人によつて形成された街で、現在は露、支人雜居の郊外住宅地である。

埠頭區は支那人間には道裡とよばれ、隣接支那街、傳家甸の道外と相對してゐる。ハルピン市の商業區で、正に下町である。キタイスカヤ街は、ハルピンの銀座にあたり、宏壯な百貨店が櫛比し、邦人居留民も多く、我が銀行、會社もここにある。ナハロフカ區は、一時は「惡の巢窟」といはれたところで、傳家甸は舊東支鐵道附屬地外に隣接する、濱江縣廳の所在地、八站は埠頭區と傳家甸との間に介在し、工場、油房及び倉庫地區とも稱すべく、東支鐵道の貨物取扱場である。

第二節 依蘭地方

一 概 説

依蘭地方は吉林省の東北部を占め、松花江、黑龍江、ウスリー河の三流に圍まれ、その間十二縣を領する地域であ

る。元來この地方は漸く近年に至つて開發されかけたところで、すべては今後の開發に待つべきである。都市の如きも重要性を待つものは少い。しかし砂金の埋藏量も多く、水田も有望視される地方であるから代表的のものについで少しのべる。

二 三 姓

この町は前清の依蘭府で、當時は副都統を設け、或は三姓廳の置かれたこともある。中華民國に至つて依蘭となり縣廳所在地となつた、且つ前清と同じく道治となつた。清朝の興亡史上には特に重要な位地を占め今日、吉林省北境の要都をなす。牡丹江の松花江と合流する地點、その東岸にあり、人口二萬餘と註せられる。

三姓城は東西に長く、南北に短い長方形の土城で、周圍三、二七〇メートル、壁高三・九三メートル、四門を有してゐる。外路狹隘城内の太平街は物資集散の市場として常に雜踏を極めてゐる。

集散物資は高粱、大豆、小豆、煙草、粟、麻、木材、皮毛等で、眞珠、魚類、砂金なども見られ、加工品としては麥粉、燒酒等が擧げられる。松花江岸、牡丹江岸の要津で、常に帆船、小汽船の繫留するもの數十隻、北滿の營口ともいひたいが、陸路も開け、密山その他の奥地にまで通じてゐる。

附近の都會としては西南に方正がある。土名では方正泡といひ、方正縣署がある。また東方樺川に近く、人口一萬を有する、もとの樺川縣治、佳木斯がある。佳木斯は松花江汽船の寄泊地で、海關出張所あり、大豆、小豆、薪材魚類等の産あり。雜穀と共にハバロウスク、ハルピンの二地に搬送してゐる。この他東南方に勃利縣の所在地勃利がある。人口千餘、地方の中心をなす。

[135]

[134]

三 樺川と富錦

[136]

三姓の東北約一三軒、松花江畔に樺皮河と呼ぶ砂金採集地がある。土民は悅來鎮と稱し、中華民國になつて樺川縣署がここに移され、今は樺川と改名してゐる。太平河とよぶ有望な、附近の砂金地と共に清朝のはじめ、この砂金は採集を嚴禁せられたが、法令ゆきとどかず土民は絶えず採集して露西亞人に密賣してゐた。附近には今日なを一帶に砂金が多く、今後とも樺川は相當に發展する地と見られてゐる。

富錦は人口一萬餘、佳木斯と同様、松花江來往船舶の寄港地である。大豆、小麦、粟其の他の雜穀、麻、煙草等の農産物の他、獸皮、豚毛、木材等の産あつて、市況繁榮してゐる。物産はハルビン、ハバロフスク方面に移輸出せられ、交通の要衝にもあたり將來發展の素地を有する地と見られる。舊名を富克錦といひ、樺川と共に渤海以來、純粹の靺鞨人のゐるところで、清朝初期には黒斤人の本據であつた。三姓及び樺川、富錦附近には靺鞨の築いた幾多の古城址が存する。

四 同 江

吉林省と黒龍江省、露西亞領アムールの三境界の集中し、また松花江が黒龍江に合流する地點に同江縣が置かれたが、一帶は雜穀の産地で將來大いに開發さるべき地域である。縣全體の人口は一萬に達せず、その中約二千は、縣廳所在地の同江に居住する。同江は前清末の臨江府で民國になつて、同江と改めたところで、明代はに拉哈蘇々と呼ばれた。古來滿洲族の住地であつたが、今日では住民の大部分は漢人である。

五 綏遠と饒河

同江の東北、黒龍江とウスリーとの合流地點に綏遠縣がある。吉林省の北端で、滿洲國東北隅の關門をなす地域、綏遠はこゝに町をなす。渤海の渤海洲で、金以降は伊力嘎とよばれた。密輸入の本場である、

綏遠の直南、ウスリー河に饒河の注流する地、江を隔て、ウスリー鐵道のスナルスキー驛にのぞみ、饒河縣が置かれた。舊名は諾羅、この語は滿洲語で禽鳥群集を意味する。時期になると無数の鴨や雁などが密集する。この滿洲語が支那語に轉じて饒力となり、饒河となつた。人口五萬に充たぬ。

六 虎林、密山

饒河の下流、七虎林河のウスリー河と交流する附近に、ウスリー鐵道のイマン驛と江を隔てて對峙する虎林縣がある。明時代には江東を奇雅とよび、江西即ち虎林地方を木倫とよんだ。清朝には呢鳴縣がおかれてあつたが、宣統二年、七虎林河の虎林をとつて現名とした。

虎林から東支沿線の穆稜までは、密山を経て國道もあり、穆稜河の水運もある。この地域は長白山脈の北東麓で、虎林以南は大沃野である。水田有望で、虎林の西南約八〇キロの地點、穆稜河の南岸に密山縣がある。清朝の末、窮民の移住を獎勵してから發達した地である。

第三節 東支沿線の都邑

一 阿 什 河 (阿 城)

[137]

東支沿線には重要な都市が多い。阿什河、一面坡、海林、穆稜、綏芬河など、いづれも見のがせぬものである。うち阿什河は阿城縣署の所在地で、古くは阿勒楚喀といひ、今は専ら阿什河と稱してゐる。共に附近を流れる河名に

よつた稱呼である。市街は周圍に土壁を環らし、屋宇壯大、街衢清潔である。城内人口四萬と稱せられ、往時は商業盛大であつたらしいが、ハルビンの發展に伴ひ、近來はやゝ不振の傾きがある。工業は行はれて、阿什河製糖會社の名は知られてゐる。外に油房、製粉焼酒製造等の手工業がある。吉林省のうち、ハルピンは別として近年吉林について繁榮だつたのはこの阿城である。特にこの城内外には回教徒が多い。城南に白城がある。金の上京會寧府の遺址である。

二 一面坡

阿城以東の東支線は、少しづつ南下して進む。小嶺までは沃野、年々耕作地が増加する一方で、小嶺を越すと帽子山がある。山の東麓に近年烏珠河と改名された烏吉密河がある。改名と共に一行政廳が置かれ、十數年前に一僻村があつたことは、俄かに人口増加し、農産物の集散地となつた。この烏吉密河の南方のテーブル・ランドに一面坡がある。

一面坡は東支沿線中の重要驛の一つで、烏珠設置局の管下に屬し、人口四萬に近い。舊帝政時代ハルピン人のロシア人の避暑地であつただけに、洋風の別荘が軒をつらねて、今でも異國情調濃やかである。

大豆、玉蜀黍、米、小麥、高粱、葡萄等の農産物、豆油、豆粕、燒酒等の工産物及び木材、新炭、蜜蜂等物産牧擧に違がない。近年この地から鐵道便で搬出される穀類は、年十五萬トンを下らぬといはれる。火酒、麥酒、ガラス製粉などの工場も多い。

三 海林と穆稜及び綏芬河方面

一面坡をいでて東に進む東支線は、濱江道から延吉道に入り、木材運輸路として名高い牡丹江を渡つて穆稜に進むその穆稜と一面坡との略中間に海林がある。工業盛な都市で、もと東支線の機關用木材及び枕木採取の本場であつた。近年牡丹江の水運を利用し、製産物の集まるものが多く、また水運によつて雜貨の搬出も殖え、最近更に建築用途材の産地となり、前途を期待されてゐる。

穆稜は金時代の女眞の拉必瑪察の本據で、水使阿里罕往が統治した。東支線の開通後に再興し、縣廳所在地となつた。穆稜驛は炭礦支線の分岐點で、城は支線驛を西に離れること一六キロの地點にある。穆稜驛を後に東支線は太平嶺を越えて東に進み、露領に向ふ。ここに小綏芬河あり。更に進むと國境驛綏芬河に達する。綏芬河は五站ともいはれ人口一萬内外、支那開市場の一つであつた。國境關門であるため、露滿兩國の大小官衙があり、税關があるしかし經濟的發展は望まれない。

第四節 同島地方

一 位置

同島の名は、やかもすれば邦人の間には、一孤島であるかの如き感じを與へるが、事實は決して然らず、廣漠たる滿洲の一角、裏滿洲即ち東滿の東南端たる豆滿江下流左岸一帯の地域をいふのである。嚴格にこれをいへば、豆滿江の發源地たる長白山脈の東麓より、同江に沿うて北鮮威鏡北道、威山、會寧、鎮城の各郡の北境を劃し、穆城の對岸涼泉子に至る豆滿江の左岸一帯に屬する地方即ち滿洲吉林省管下の和龍、延吉、汪清の三縣及び奉天省に屬する安圖縣の南端部を包含する、南北一六〇キロ東西一〇〇キロの地方を指すもので、隣接の敦化縣、樺甸縣及び安

圖縣方面を西間島と稱するに對し、前記の地をば東間島とも呼ぶ。しかし俗に間璋地方又は間島地方と通稱せられる場合には上記東間島の内安圖縣に屬する地方を除き、更に琿春縣を加へたものを一括併稱するのを常とする故、ここにもこの慣例によることとし、従つて西間島方面を除外する。

間島の名稱の由來については種々の異説あり、その眞偽を分ち難けれど、その一説に間島は鑿島、坤土または鑿土の轉訛で、往昔鐘城、穩城の間に、豆滿江の分派があり、自然その間に中洲を形成したことがあつて、その中にある現名古島(古間島ともいふ)と稱する地が地味膏腴であつた爲め、慶應三年の頃附近の土民がこれを開墾し、その後明治二三年頃咸北北部の大凶作に際し、鮮民大舉して對岸に進入し、その一帯を開墾したのにより、遂に初墾の中洲の地に用ひた間島の名を全體の地方に及ぼすに至つたのである。

二 地勢と都市

間島は茫漠たる滿洲の中にあつて、地勢全く特別なる一地域を形造つてゐる。即ち北に大高麗嶺、太平嶺、老松嶺の連山を負ひ、西は松義嶺、哈爾巴嶺、窩等嶺、英額嶺が連互する山間の地域で、その中を豆滿江の本支流が潤はしてゐる。

支流には琿春河、密江、嘎呀河、布爾哈通河、海蘭河等あり、此の他北方には露嶺に注ぐ綏芬河がある。それ故この地方は山脈多きも、豆滿江岸及びその流域等に廣大なる平地を擁し、地味肥沃にして灌溉に適し、丘陵の緩斜面また耕耘によろしきため、既耕地約二十五萬町歩(内水田約一萬町歩)に達し、しかも年々一萬町歩から一萬五千町歩の新規開墾地を加へつつある。農耕者は殆ど全部朝鮮人である。

市街地の主要なるものを挙げれば、龍井、局子街(一名延吉)頭道溝、百草溝(一名汪清)及び琿春で、龍井には我が總領事館があり、その他上記の各地には領事館分館が置かれてある。また和龍(大拉子ともいふ)汪清、琿春、延吉には知事に公署がある。この他小市街としては老頭溝、銅佛寺、甕登階子、朝陽川、八道溝、四道溝、凉水泉子、密江等がある。

三 農林及鑛業

産物としては第一に擧ぐべきはいふまでもなく農産物で、粟、大豆、小豆、大麥、小麥、玉蜀黍、馬鈴薯、菜豆、米等で、穀類輸出年額平均百萬圓に上る。水田は直播法で別に苗代を用ひず、肥料も殆ど加へずして相當の收穫を見てゐる。畑地は鮮人の常として例の火田式で、中耕による粗放な農法である。將來用排水工を施し、農法を指導改良せば、收穫量が増進しよう。

林産は汪清、琿春、延吉の三縣の山岳部に鬱蒼たる針闊混清美林を有し、紅松、杉松等の出材年額八十萬石内外二百萬圓と稱せられ、擴大増進の可能性が多い。

鑛産は間璋地方には砂金、石炭、銀銅鑛等の地下に埋藏せられてゐるもの多量に上る見込みであるが、まだ開發せられぬ。現時大規模に採業中なのは天主山の銅、老頭兒の石炭で、共に相當盛況を示してゐる。なほ天主山東麓の銅佛寺は人口一千内外の小邑であるが、往昔この附近で原始的な銅鑛精鍊が行はれたものらしく、部落内各所に銅滓が残つてゐる。市街の東端に銅佛寺と稱する伽藍があり、二十五體の銅佛を祀り、銅滓の大塊を神として祭る。諸所に砂金鑛があるが、まだ土民が原始的な採取法でやつてゐるにすぎない。

四 交通の状況

[142]

間島地方の交通は、現時唯一つの鐵道があるのみである。大正十一年起工し、翌十二年完成せるもので、日支官商合辦である。北鮮國門線上三峰驛の對岸國門江岸驛から起り、火狐狸嶺を越え、龍井を経て朝陽川驛に至り東西に分岐し、本線は銅佛寺を経て老頭兒溝に達し(本線一〇一キロ)支線は延吉に通じてゐる。

本鐵道の本來の目的は天主山の銀銅鑛、老頭兒溝の石炭鑛を運搬するにあつたが、將來は吉會線の一部として買収改築される筈で、既に新滿洲國建設の今日においては、必ずや急速にその實施を見ることであらう。そして東支鐵道と朝鮮とを結ぶ延吉海林線計畫が更に實施されることもならば、間島地方は單にその中心部に大動脈たる鐵道線を得るに止まらず、近き將來には新滿洲國の首府たる新京——長春を中心として、北鮮の雄基、清津等の諸港のうち何れかに海口を求める吉會線、否新京——北鮮線が間島を横斷して、歐亞連絡の世界的國際鐵道幹線となり、今日の裏滿洲たる間島は、滿鐵本線の大連に代つて一躍滿洲國の表玄関となるであらう。蓋し新京より大連に出て神戸に到る線よりも、新京より清津に出て敦賀に到る線の方が遙に距離を短縮し便利だからである。

第五節 奉天省

一 地域と面積

奉天省は遼瀋道、東邊道、洮昌道、蒙古未開放地から成り、關東州も地理的に見るときは、奉天省に屬してゐる。東邊道は滿洲の東端、朝鮮と接壤せる鴨綠江並びにその支流々城地方を指し、遼瀋道はいはゆる遼西、遼東地方、遼河の流域並びに瀋陽(奉天の舊稱)附近一帯の地方をいひ、洮昌道は東部內蒙古の一部と、これに接する地方、即

ち洮南を中心とする地域と、昌圖以西の遼河沿岸地方を併稱せるものである。しかして蒙古未開放地は、主として哲里木盟族の居住地域である。關東州は遼東半島の一角に位し、地勢上かさすれば奉天省に屬するも、日露戦後、日本の永代租借地となり、爾來二十餘年、我が國の統治下にある地域であつて、これを依然支那の領域と見るか、或は滿洲國の版圖に屬すべきものと見るかは、議論の岐れるところであらう。

今前記の區域を大別して、面積を比較對照すると左の如くである。遼瀋道三、六三四方邦里。東邊道四、八六八方邦里。洮昌道二、七四〇方邦里。蒙古未開放地三、六九〇方邦里。關東州二一九方邦里。計一五、一五一方邦里。即ち奉天省の全面積は、關東州を加算して、なほ且つ滿洲全體の四分の一弱に過ぎない。

二 地勢

次に地勢上から見るに、東邊道は鴨綠江とその支流域、伊通河流域の平野を除けば大體に山岳起伏し、滿洲の山岳地帯に屬してゐる。遼瀋道は遼西地方の支那本土に接壤する附近と、遼東半島附近に丘陵山岳ある外はほとんど一帯の平原である。更に洮昌道に至つては一望千里の曠野であつて、西方遙かに興安嶺の山容を望み得るのみである。即ち奉天省は、東は長白山脈によつて境界線を劃し、西は陰山山系と興安嶺によつて蒙古と境を接し、萬里の長城によつて支那本土と區別されてゐる。しかして中間に南部分水嶺山脈あり、千山、和尚山等遼東の山岳地帯を形成し、旅順附近の老鐵山岬に終つてゐる。

[143]

長白山脈中の最高山峰、長白山(朝鮮人は白頭山、土人は老白山とよぶ)は省内長白縣にあり、清朝の開祖と因縁淺からぬ名山で、古來附近の土人はこれを聖山と稱へて崇拜したといはれる。金國の太定十二年に至り、曩廬山とし

[144]

て祭祀し、明昌四年には開元安聖帝の祠廟を建てて長白山と稱した。「開國方略」によると

「山の東に布庫哩山あり、その下に池あり、布勳湖哩池と稱する。天女姉妹三人あり、降りて浴す。神鵲朱果を御みて季女の衣に置く。季女口中に含み、忽ち腹に入る。遂に一男を生ず。名を布庫哩雍順、姓を愛親覺羅といふ。これを清帝室の祖となす……」とある。

曩の滿洲國執政溥儀氏の祖先愛親覺羅は、長白山に天くだつた天女の落胤とあるのだから因縁はなかく深い。それで清朝歴代の帝は雍正、乾隆以來、春秋仲月に、吉林城外の祭地で、長白山神の祭を行つて來た。

南部分水嶺山脈は、長白山系から分岐したもので、南に至るに随つて低くなる、この山脈中で人口に、くわいしやしてゐるのは、湯崗子温泉の東にある千山、金州の大和尚山等である、西方、陰山山系の山岳中には、滿洲に於ける名山として知られた醫巫闔山がある。

三河川

奉天省内の河川は鴨綠江と遼河の二大河を中心とし、別に西の方、遼西地方に大凌河、小凌河がある。鴨綠江は滿洲と朝鮮の境界をなす東邊の重要水路であつて、その源を白頭山の西麓に發し、北鮮の支流と滿洲東邊道内を流れる渾江、雙河を合して安東縣に出で、末は黃河に注ぐもので、木材の輸送路として、筏流しをもつて、世にその名を馳はれてゐる。

遼河は奉天省開發上、重要な役割を演ぜるもので、鐵道開通以前に於ける南滿洲の幹線路となつてゐた。古來この河あるため、遼東の地名が最も著名であつたのにも見ても、如何に重要性を有してゐたかゝ窺はれる。

遼東半島といひ、遼西地方といふは、すべてこの遼河を中心に、その以東にある半島、或はその西にある地方といふ意である。遼河はその上流が、東西二派に岐れてゐて、西の方、内蒙古克什克騰部に源を發するものを西喇木倫河または黃河といひ、東西安縣の東方、長白山の西北支脈の山麓に源を發する東遼河に比し河幅が大きい。黃河は東北に流れ、南部から流れる老哈河を併せて西遼河となり、更に進んで東遼河を併せ、遼河の本流、即ち大遼河となる。

遼河の支流に招蘇基河、涼子河、清河、柴河、范河、太平河、小河、新開河、渾河、蘇子河、太子河等があつて、奉天省を縦横に貫流してゐる。かうした水道の便が古來、如何程奉天省の開發に裨益したかは敢て説くまでもないこの外、奉天省の北部、洮昌道を貫通するものに洮兒河（その下流の嫩江に注ぎ末は松花江となる）と、その支流歸流河、交流河がある。また東邊道の一角を流れる伊通河は、西北に注いで松花江に入る。かゝる多數の水路と大連、營口、旅順、安東等の海港をもつことは、奉天省特有の地の利といふべきで、南滿洲の平野は、これ等の河川の流域に拓け、滿蒙の文化もまたこれに沿うた。

四 氣象と溫度

[145] 奉天省は、極南點北緯三八度四三分即ち旅順老鐵山の岬南端から、北は北緯四六度を越える範圍に跨つてゐて、其の内には海洋の影響を受ける海濱地方と、蒙古の沙漠に近い地方と、山嶽、森林地帯などがあつて、氣候、風土は必ずしも一樣ではないが、旅順、大連等、遼東半島の氣候は日本の東北地方や北海道よりも凌ぎ易い。しかし北方に進むに随つて、大陸的氣候が漸次に顯著となり、冬季の極寒には零下三、四〇度に達するところが稀しくない。

【146】

加へて盛夏の候の酷暑は眞に炎熱灼くが如く到底關東州の比ではない。気温は概して、一月が最も低く七、八月の交が最も高い。日本内地と比較してみると、夏季は東北地方と大差なく冬は樺太と相似たるものである。

降雨量は概して少く、日本内地の二分の一乃至三分の一であつて、降水量は北するにつれて多いが、奉天以南は比較的雨が少い。しかして降雨期は七、八月の交で、冬は雨が極く稀なばかりでなく、降雪も割合に少く、凍結するので、農作物の凍害を蒙ること甚だしく、冬季の保存には特別の設置を要する。

農業上からみると、肝腎の種期に降雨が少ないため往々にして發芽しないが、たとへ發芽しても甚だしく遅れて、早害を受けることがある。これに反して七、八月の雨期には、殆んど一箇年の半分ぐらゐの降雨がある。しかもこれが豪雨となつては作物を害し、殊に麥類の收穫期に於けるかうした降雨は、農家の患の種となる。

降雨量が均一を缺くのと、その分量の少いのは、滿洲に於ける農業上の一大缺點と謂ふべきであらう。

尙ほ温度は日本内地よりも著しく乾燥してゐる。乾燥の度は、夏季よりも冬季が甚だしい。

いま旅順、大連、營口、奉天の四箇所について、昭和五年中の気温、降雨、温度を比較對照すると、大體左の如くである。

	旅 順	大 連	營 口	奉 天
平均気温	一〇、五度	一〇、六度	九 度	八 度
降雨量	六六三、五ミリ	六二九ミリ	七〇九、七ミリ	六八四、五ミリ

【147】

霜は日本内地と比較するに、北海道より晩霜は早く、初霜は遅い。即ち晩霜は大連、奉天方面では四月上旬、北部地方は五月上旬であるに對し、北海道の晩霜は五月下旬である。初霜は大連方面が十月下旬、奉天地方が十月上旬、北部地方が九月下旬であるが、北海道では九月の中旬から下旬にこれをみる。

降雪は北部地方に多く、北部の降雪日數は一箇年四十日と註されるが、その他の地方では大概二十日内外である。結氷期もところによつて様でないが、遼河の結氷は十一月中旬に先づ流水を見、十二月中旬には全く結氷する。また氷の解けるのは三月下旬からで、四月上旬には全く氷がなくなる。

奉天省は、大體に於て風が多く、しかも強風をみる。殊に春さきから初夏にかけて、空氣乾燥した候にしばしば暴風が襲來する。これがいはゆる黃塵萬丈の蒙古風である。風速は奉天附近が最も弱く、遼東半島方面が最も強い。従して三寒四温と普通に云つて居る通り、寒い日が三日ばかり続いた後に比較的暖かな日が四日位あるのは滿洲の

雨天	七一日	七九日	七七日	八八日
湿度	六六パーセント	六八パーセント	六九パーセント	七一パーセント
快晴	九七日	一〇八日	一二二日	一〇二日
曇天	一〇五日	八二日	九五日	九五日
暴風	一〇八日	七九日	二〇日	七六日
日照	六一日	六三日	六八日	六三日
日照	二六日	二二日	一九日	二五日

通有性で、殊に曠原地帯に於てこれが著しい。これは寒さを齎らす高気圧と、暖氣を催ぼす低気圧とが三四日間て交替するからである。

そして夏季の氣候も海岸に近い地方は海洋の影響を受けるが、奉天省奥部地方では、日中は非常に暑く九五、六度に及ぶも、夜に入ると急に冷却して涼風袂を拂ふといった有様。日中の高温は農作物のよく生育する所以で、夜間の涼風は住民の凌ぎよい所以だが、一面また土地慣れぬ人が病氣する素因をもなす。

五 産 業 状 態

◎ 農業と牧畜

奉天省は廣袤一二、〇〇八方里、熱河省よりはやゝ廣いが、吉林省に比べると狭く、黒龍江省の半ばに及ばない。しかし開拓された地域は、滿蒙を通じて、この奉天省が最も廣く、既耕地面積に於ては他の三省（吉林、黒龍江、熱河）を遙かに凌駕してゐる。けれど地理的關係上、支那本土並びに朝鮮に接壤せる奉天省、古來交通の要衝たりし遼東地方が、まづ第一に開發され、開墾されるのは、當然の歸結といふべきであらう。

滿洲開墾の歴史を緝いて見るに、遠い昔は知るによしないが、戰國時代に、漢民族が遼河沿岸を開拓して、燕國とした事蹟や、東陸からする朝鮮人の移民が、鴨綠江と、その支流々域を開墾したことなどから見ても、歴史的に奉天省が、滿洲開拓の魁をなしたことは知るに難くない。しかして滿洲文化の先驅だつただけに、この省内の農業の發達は他の三省の比較でなく、今やわづかにその六分の一が、處女地のまゝ、残されてゐるに過ぎぬ有様である。随つて農業上から見ればほど、大體の荒削りができて、これから正に仕上げ時代に入らんとするもの、といふことが

できる。これを地方的に見ると、まづ遼瀋道ひらけ、東邊道も開墾されて、残る北邊の洮昌道だけが、未墾の處女地に富んでゐる。

大正五年の滿蒙産業誌（關東都督府陸軍部編纂）によれば、既耕地面積は遼瀋道が二五〇八、二八四天地（一天地は日本の三反六畝餘）東邊道が八二萬四、八〇七天地、洮昌道一、二〇〇七六三天地であつて、未墾地面積は、遼瀋道が三二二、八九六天地、東邊道が二六七、二百四一天地、洮昌道二、八二七、九九七天地と誌さある。その後、既墾地面積の増加をきたし、昭和三年度滿鐵會社の調査によれば、奉天省の既耕地面積は五二四萬五千町歩（五一九七、九九陌）未墾の可耕地面積は一七萬八千町歩（一一六七、三〇〇陌）となつてゐるが、洮昌道が最も多くの處女地を有する點に於て變りがない。

いま省内各縣の開墾状態を知るため、昭和五年度に於ける各縣別土地開拓統計を掲げて見よう。

縣 別	總面積 <small>方里</small>	既耕地 <small>方里</small>	未耕地 <small>方里</small>	不可耕地 <small>方里</small>
瀋 陽	二一八	一九七、八四〇	三九〇	一三七、七五〇
鐵 嶺	一五八	九九、一九〇	二二、三二〇	一一二、〇〇〇
開 原	二二九	一〇四、三四〇	二四、五八〇	二三九、四三〇
東 豐	一六四	一四八、一七〇	四、二四〇	一〇〇、三五〇
西 豐	一五五	一二七、九〇〇	一六、六三〇	九四、三六〇

撫順	撫松	安圖	長白	輯安	臨江	桓仁	寬甸	鳳城	通化	新賓	安東	錦西	綏中
一四六	三五三	二六七	二六四	三二〇	三〇六	二四七	二九八	四〇三	二六七	三五六	九三	八八	一三四
六五、七三〇	一〇、七九〇	八、五〇〇	一八、五一〇	四四、五四〇	二〇、三二〇	六五、一七〇	四九、九六〇	一九三、一五〇	四三、九四〇	六六、一〇〇	三九、八〇〇	六七、一七〇	七八、五〇〇
五、九八〇	三三、一五〇	二八、九五〇	二二、一八〇	一八、〇九〇	二一、〇八〇	三、三五〇	二九、〇四〇	七八、二七〇	六、六七〇	九、〇七〇	一、四八〇	六四〇	二、〇四〇
一五三、三一〇	四九八、五六〇	三七四、〇五〇	三六六、一九〇	四三〇、五六〇	四三〇、二一〇	三一二、一六〇	三八〇、二八〇	三四九、六九〇	三六〇、八九〇	四七三、五〇〇	一〇二、〇五〇	六七、八二〇	一二五、九八〇

(以上遼瀋道)

興城	義縣	北鎮	盤山	彰武	新民	錦州	海城	蓋平	黑山	臺安	遼中	遼陽	營口	西安
一一〇	一五一	一〇〇	一四三	二〇七	二二一	一七六	二二二	二五四	一三四	一〇五	一一六	三四八	六四	一四三
七二、六九〇	一〇七、一〇〇	九一、五一〇	六四、〇七〇	三二、六七〇	一三一、五八〇	一〇八、八六〇	一三三、八六〇	一一一、二七〇	八九、三一〇	七七、〇一〇	一三一、五七〇	二一七、七三〇	五三、六八〇	一三三、〇九〇
一、四〇〇	一八、五七〇	五、四三〇	一、六一〇	八、八〇〇	二七、八二〇	三、四四〇	一六、四五〇	五四、三二〇	五三〇	六、四九〇	四一、八六〇	七三〇	一、〇六〇	二、八九〇
九五、四四〇	一〇七、〇五〇	五七、一八〇	一五四、七一〇	二七七、五六〇	一八一、二一〇	一五八、九五〇	一九一、八四〇	二二五、八八〇	一一六、六八〇	七八、三三〇	四六、四八〇	二七六、七五〇	四三、九〇〇	八四、四一〇

遼 東 洮
瀋 邊 昌
道 道 道

既 耕 地
一、五四四^{方里}
六九五
八一七

未 耕 地
一七〇^{方里}
三三五
五九一

前表を道別に累計し、方里に換算して見ると、左の如くなる。

(以上洮昌道)

康平	梨樹	開通	洮安	安廣	鎮東	法庫	懷德
一八七	一九四	二二二	一二八	二一八	二四二	一三一	一三九
八三、四九〇	一一六、三五〇	五一、八三〇	五九、二一〇	五四、五八〇	三七、四三〇	八〇、六七〇	一三六、八六〇
一一、九一〇	八三、六八〇	四七、七三〇	一九、九〇〇	五八、六五〇	一〇六、五四〇	三四、六一〇	二三、八一〇
一九二、八〇〇	九八、九六〇	二四二、五九〇	一一八、一六〇	二二二、七五〇	二二九、〇〇〇	八六、六二〇	五三、五六〇

本 溪
海 龍
輝 南
柳 河
岫 巖
莊 河
復 河
遼 源
通 遼
雙 山
洮 南
突 泉
膽 榆
昌 圖

(以上東遼道)

三六三	一八二	一〇六	二一五	二一四	二七三	二九六	二〇三	六五〇	九四	一八一	二八〇	二八四	二三七
二五、九八〇	一〇六、六二〇	一五、七二〇	三三、二四〇	四九、八八〇	一〇六、〇五〇	一〇八、一九〇	八八、九二〇	一五六、六七〇	六一、七八〇	五五、三二〇	三〇、三三〇	四〇、二九〇	二〇五、六七〇
八三、六〇〇	四七、六五〇	四九、六三〇	七五、七八〇	七、一五〇	二、九二〇	一、三〇〇	一四、〇一〇	一九三、九五〇	八、四四〇	五四、〇三〇	一三〇、六三〇	九九、七七〇	二三、三五〇
四五九、八八〇	一二六、二三〇	九八、〇二〇	二二二、三四〇	二七二、四三〇	三一、七八〇	三四六、七一〇	二〇九、九三〇	六五一、一六〇	七四、六五〇	一六九、六一〇	二七〇、五八〇	二九七、六四〇	一三六、二四〇

農業上から見れば遼瀋道は、らん熟期に在り、洮昌道は開拓の途上にあることを知るを得べく、前者は原始的農業よりやゝ一步を進めた高級農業地帯たるべく、後者は原始的農業地帯としての生命を多分に有することも推測するに難くない。これを農作物の品種別に見るに、大豆の生産高においては、奉天省は北滿地方に及ばざるも、高粱、包米(玉蜀黍)稻作等に於ては他の二省は奉天省に及ばざること遠く、漸次に高級農作物に轉向しつつあることを觀取し得るであらう。

いま、各省別に農作物の種類毎に、その作付面積と收穫高を示せば、左の如くである。(昭和五年度現在)

作物別	奉天省	吉林省	黒龍江省
大豆	九九〇、六八〇	一、七六一、五七〇	一、三六六、二〇〇
大豆	一、一八三、〇四〇	二、三六三、九七〇	一、七五〇、八一〇
豆類	一六九、一六〇	一一六、五四〇	六四、五二〇
豆類	一八一、三六〇	一二九、四三〇	五八、四八〇
高粱	一、六〇七、四〇〇	九一九、四〇〇	五〇四、六二〇
高粱	二、六三八、〇四〇	一、四四三、八六〇	六九七、七九〇
高粱	六〇七、六五〇	九二九、七六〇	六七二、二六〇
粟	九三六、八五〇	一、三九八、五七〇	九四一、〇六〇

包米	小麥	水稻	陸稻	雜穀	煙草	棉花	その他
四九一、八〇〇	一〇三、八七〇	四六、九九〇	四七、二五〇	四二八、四五〇	二七、六三〇	三三、八八〇	一八八、五八〇
二三四、八九〇	五二二、一八〇	四七、九四〇	五二、七六〇	三三五、一八〇	一七、四六〇	—	五五、九三〇
一三八、八三〇	七五四、一五〇	三、二一〇	八、三七〇	三三二、六九〇	—	—	—
二二二、〇二〇	七四五、〇四〇	六、三一〇	一二、六四〇	四二〇、七二〇	—	—	—
—	—	—	—	五三二、一二〇	—	—	—
—	—	—	—	七六九、九二〇	—	—	—
—	—	—	—	七六九、九二〇	—	—	—
—	—	—	—	四二八、四五〇	—	—	—
—	—	—	—	六四、四七〇	—	—	—
—	—	—	—	八〇、七三〇	—	—	—
—	—	—	—	八〇、七三〇	—	—	—
—	—	—	—	四七、二五〇	—	—	—
—	—	—	—	四七、二五〇	—	—	—
—	—	—	—	四六、九九〇	—	—	—
—	—	—	—	七七、一七〇	—	—	—
—	—	—	—	七七、一七〇	—	—	—
—	—	—	—	九五、九二〇	—	—	—
—	—	—	—	九五、九二〇	—	—	—
—	—	—	—	一〇三、八七〇	—	—	—
—	—	—	—	一〇三、八七〇	—	—	—
—	—	—	—	九二八、九〇〇	—	—	—
—	—	—	—	九二八、九〇〇	—	—	—
—	—	—	—	四九一、八〇〇	—	—	—
—	—	—	—	四九一、八〇〇	—	—	—

(備考) 表中(陌)は作付面積 (趙)は收穫豫想高を示す。

次に林業について見ると、吉林省並びに黒龍江省の興安嶺森林地帯を主たるものとし、奉天省に於てはわずかに鴨

[156] 緑江流域、松花江上流、豆満江流域の一部に森林を有するに過ぎない。左にこれ等奉天省内の森林面積及び立木蓄積量等を掲げて見よう。

森林地域	森林面積	針葉	樹・澗	葉	樹
鳴緑江岸	四六九、三三六		約二三五、〇八一、六八〇石		
渾江流域	四三三、八四五		約一九八、二七〇、〇〇〇		
松花江岸	六八二、四一一		二三五、五七二、二〇五		二三一、二五五、四〇五
豆満江岸	六〇、四八〇		二四、〇四〇、八〇〇		一八、七九九、二〇〇
合 計	一、六四六、〇七二		九四三、〇一九、二九〇		

立木の主な種類は朝鮮松、朝鮮樅、朝鮮唐檜、エゾ松、朝鮮唐松、ヤチダモ、満洲胡樹、楓、楡類、春楡、黄バク、ハリギリ、白樺、ドロノキ等であつて、關東州を除けば、殆んど全部が天然林で、まだ植林などの人工を施されたところはない。しかし鳴緑江流域の森林は、針葉樹と澗葉樹の混淆林で、本流や各道溝に近い流域は、移民によつて逐年、伐採開墾せられ、または火入開墾の際延焼して、原野や散生地となり、森林として残る部分は、多く澗帯に屬するに至り、奥に入るほど針葉樹の数を増加し、分水嶺近くはまだ原生林を見ることが出来る。現に有望な地域は、鳴緑江流域では帽子山から上流の各道溝の上半部、及び長津江、南社水等の支流域で、渾江流域では、通化から上流、哈泥河、羅圖江、紅木崖、三盆子等の上半部に存在してゐる。

樹種は前掲針葉、澗葉兩種の混在であるが、赤松は渾江の上流域では、森林として見ること稀である。現在一町歩の材積量は鳴緑江及び渾江流域が九六石乃至四二〇石、松花江上流々域が約八〇八石、豆満江流域が約五〇五石と見られてゐる。その樹種は普通針葉四〇パーセント、澗葉六〇パーセント内外であるが、原生林では針葉六〇パーセント、澗葉四〇パーセント内外である。

針葉樹中には樹齡二百年内外、胸高直徑三尺以上、樹高十五、六間以上で、樹幹直通な良材が多い。鳴緑江右岸の森林蓄積量は上下流を通算し約二七、六〇〇萬石と註せられる。渾江流域の森林は伐採、開墾、野火等のため、大いにその蓄積量を減じ、流域面積の廣大な割合に蓄積量は鳴緑江流域よりも少ない。加へて未だ調査さへ行はれてゐないので、正確な数字を擧げることが困難であるが、その蓄積量約二億萬石と推算されてゐる。松花江上流の安圖、撫松兩縣地方には原生林多く、有用材に富んでゐる。しかしその蓄積量は、鳴緑江右岸及び渾江流域地方よりも豊富である。

尙ほ奉天省の奥部、東部内蒙古一帯には、農業本位よりも牧畜を本業とするところが多い。随つて東三省の内では奉天省が最も牧畜の旺んたとされてゐる。昭和五年末現在の家畜数を各省別に見ると左表の如く、奉天省を最とする。

[157]

家畜別	奉天省	吉林省	黑龍江省
牛	五一六、六七〇	四二九、九五〇	六五八、六五〇
馬	六六九、二二〇	七三五、〇七〇	一、〇三三、七〇〇

馬	三二一、五三〇	二六九、二五〇	一五一、九二〇
驢	三四九、三三〇	八三、四一〇	四六、〇〇〇
羊	五一八、二〇〇	一八二、四三〇	一、九三九、九三〇
豚	三、四四四、〇三〇	三、九七三、八七〇	一、七八九、四〇〇
鶏	約六、一四〇、〇〇〇	四、八〇〇、〇〇〇	一、八二〇、〇〇〇
合計	一一、九五八、九八〇	一〇、四一九、六〇〇	七、四三九、六〇〇

次に各種畜産について検討するに、豚は滿蒙家畜の主體をなしてゐる。即ち農家では、豚や鶏を飼はない家はないといふも過言でなく、豚は毎戸十頭内外を飼ひ、回教徒以外の支那人の、最も賞用する食用獣である。飼育の主要目的は肥料と、食料、猪毛其の他の畜産収入を得るにあつて、焼酎業者の如きは、一戸で千頭内外を飼育してゐるのがある。

牛 牛は蒙古牛最も多く、滿洲系、朝鮮系などもある。體軀一般に矮小で、肉量少く、且つ肉味において朝鮮牛や山東牛に及ばないが、忍耐力強く、粗食にたへるのを特長とする。今後、近代的飼育及び管理方法をもつてすれば、肉食用或は乳用として、相當重要性を加へる可能性をもつてゐる。

馬 馬は豚とともに滿蒙家畜の主體をなしてゐて、古來良駝の産地として知られてゐる。殆んどすべてが蒙古系で、體軀矮小、各部の均勢良好で、性質温順、強健、粗食に堪へて、持久力強く、粗放的管理に適してゐる。これ

もまた種畜の改良を行つたならば、相當優良なものを得ることが出来るであらう。

羊 羊は蒙古の在來種を主とし、緬羊と山羊との二種がある。蒙古では專業として旺んに飼はれるが、南滿洲では農家の副業として、多く山羊を飼ふ。従來は主に食肉用及び毛皮用として飼育されたので、羊毛や絨毛は副産物として取扱はれた。随つて羊毛工業原料としては、あまり重要性をもたなかつたが、種畜の改良や飼育法の改善に意を須ひたならば、前途非常に好望なものといふことができる。

現に滿鐵會社の公主嶺農事試験場では、在來の蒙古種とメリノ種を交配することによつて、滿洲の氣候に適した優良雜種を得た。この雜種は、在來種（蒙古種）の牝に、メリノ種の牡を配して生れた牝に、メリノ種の牝を配した第二回雜種）であつて、在來種の羊毛産出量一頭に付三ポンドを超えないのに對して、この第二回雜種は一頭から八ポンド乃至九ポンドの羊毛がとれた。若しこれが一般的に普及したならば、日本の原毛問題解決のやく鍵となるであらう。いま奉天省の重要地方別に各羊毛皮及び羊毛生産高を示すと左表の如くである。

(單位枚、羊毛單位斤)

種別	營口	奉天	鄭家屯	洮南
緬羊生皮	四、一〇〇	五〇、〇〇〇	六、五〇〇	二二、五〇〇
同 鞣皮	—	—	—	一、五〇〇
山羊生皮	五〇〇	二〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇	六七、五〇〇
同 鞣皮	—	—	—	一、五〇〇

牛	同	犬	同	猫	同	兔	同	羊
生皮	鞣皮	生皮	鞣皮	生皮	鞣皮	生皮	鞣皮	毛皮
五、二〇〇	一、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	六〇〇	四五〇	一〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	一、五七〇、〇〇〇	一、五七〇、〇〇〇
一三〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	一、八〇〇	一、三〇〇	一四、〇〇〇	二、三〇〇	一四、〇〇〇	四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇
五、〇〇〇	五〇〇	六九、八〇〇	二〇〇	一、七〇〇	三〇〇	四六、五〇〇	五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇

◎ 礦産と工業

滿洲に於ける鐵の主産地は奉天省の鞍山、弓張嶺一帶、本溪湖附近の廟兒溝、七道溝等である。品位は概して三、四十パーセントから、五十パーセント内外の貧鐵が多いが、埋藏量に至つては實に夥しい額に上り、鐵量の點では世界屈指の鐵礦と目されてゐる。加へて滿鐵の鞍山製鐵所に於て、特殊の貧鐵處理法が完成したことは、石炭其の他の原料の豊富なことと相俟つて、奉天省が將來に於ける重工業の中心地帯として、大いに伸ぶべく約束づけられてゐることを示すものといふを得るであらう。左に奉天省に於ける鐵礦山の主要なものについて、その鐵礦埋藏量

と採掘高を掲げて見よう。

鑛山名	埋藏推定量	平均品位	年採掘高
西鞍山	三〇六、七〇〇、〇〇〇 <small>噸</small>	四三〇 <small>パーセント</small>	五〇四、二五四 <small>噸</small>
東鞍山	二五三、〇〇〇、〇〇〇	六〇—六五 <small>以上</small>	二四四、一六七
廟兒溝 <small>〔本溪湖〕</small>	一、二二〇、〇〇〇	六五 <small>以上</small>	一四一、〇〇〇
弓張嶺	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇	三五 <small>以上</small>	同
八盤嶺	三三〇、〇〇〇、〇〇〇	三〇 <small>以上</small>	未稼行
歪頭山	一、三五〇、〇〇〇	五〇	休業中
大栗子溝	一、二四〇、〇〇〇	五五	同
七道溝	一、二二〇、〇〇〇	三五 <small>以上</small>	同
子西溝	一、二二〇、〇〇〇	五〇	同

〔162〕

石炭は滿洲鐵產物中の大宗をなすもので、全滿洲國を通じて、その埋藏量三十億トンと註せられ、撫順、煙臺、本溪湖、西安、新邱等々と大炭田枚舉に遑なく、その主要なものみにても、その數四十を算する有様である。いま奉天省に於ける主要炭田について、その推定埋藏炭量と一個年出炭高を掲げ、これを他の三省と比較對照すれば左の如くである。

炭坑別	推定炭量	年出炭高	備考
撫順	九二六、七〇〇、〇〇〇 ^{トン}	七、三二四、五八二 ^{トン}	
煙臺	四二、八〇〇、〇〇〇	二〇八、五九〇	
石門塞	六、四二三、〇〇〇	四五、〇〇〇	
五湖嘴	一三、八九九、〇〇〇	二二〇、〇〇〇	
炸子密	七〇〇、〇〇〇	—	休業中
本溪湖	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇	五二一、〇〇〇	
牛心臺	一〇、〇〇〇、〇〇〇	六八、〇〇〇	
塞馬集	六、〇〇〇、〇〇〇	一、五〇〇	土法稼行
田師付溝	二〇、五〇〇、〇〇〇	一三、〇〇〇	同上

合計

六九六、八三〇、〇〇〇

八八九、四二一

〔163〕

尙ほ炭礦の副産物として、重大な一資源をなすものに油母頁岩がある。油母頁岩は炭層の全表面を蔽ひ、東西一

小市	二、〇〇〇、〇〇〇	—	一部同上
西安	三三、〇〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	
柵鹿	三、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇	土法稼行
杉松崗	一、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	同上
三家子	四六三、〇〇〇	五、〇〇〇	同上
入道濠	三〇〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	
大窩溝	一、〇〇〇、〇〇〇	—	休業中
紅螺峴	三、五〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇	一部土法
鐵廠	一、二二一、〇〇〇	—	休業中
その他	二、五〇〇、〇〇〇	—	同上
合計	一、二七四、〇〇六、〇〇〇	八、五六四、六七二	
吉林省	三八、八五〇、〇〇〇	五六三、〇〇〇	
黑龍江省	二四三、三八七、〇〇〇	三〇六、五〇〇	
熱河省	一、二五五、〇〇〇、〇〇〇	四九〇、七七五	

マイル、南北一マイルに亙り、南方では殆んど露出し、北に至るに随つて傾斜をもつて下向し、最低四千尺の深さに達する。しかしてその埋蔵量は實に五三億トンと稱せられ、同炭礦の露天掘計畫に基いて、餘儀なく採掘排除するものゝみにても、裕に二一、五〇萬トンに達するといはれてゐる。含油量はその層位の如何によつて一様でないが、平均六パーセント内外で、重油採收率を四パーセントと見ても、前記露天掘から出るものゝみで裕に五百萬トン以上の重油を採取し得るわけである。

昭和四年末から油母頁岩一日四千トンを處理し得る撫順の重油工場の操業を開始したが、いよ／＼全工場完成の曉には、年額約五萬四千トンの重油と、硫安、パラフィン、ピッチ、骸炭等の副産物の生産を見るべく、前途に多大の期待をもつて見られてゐる事業である。

天然曹達は洮南附近、洮昂鐵道沿線に於て見受ける。東部内蒙古の曹達地帯に産し、低溫の草原、沼湖及びその附近一帯は春秋の乾燥期に至ると一面霜の如き天然曹達をもつな覆はれる。有名な大布蘇といふ曹達湖、ハリ山、甸城子と稱する西遼河上流沿岸の曹達平原をはじめ、數多の産地がある。中につき採集加工の旺んなのは哲里木盟であつて、將來ますます開拓されるものである。

菱苦土礦は大石橋、海城驛間東方一帯にあり、鑛床の雄大な點に於て世界に比類のないものと稱せられてゐる。品質は粗粒結晶質で、白、淡褐色、淡紅色または灰色を呈し、また黑色の縞状を呈するものあり、極めて良質で製鋼用鹽基性爐材料、リグノイト、マグネシウム等、工業原料に用ひられ、年々ともに利用の範圍が擴大し、重要性を加へつゝある。昭和四年度の産出高は三一、六八一トんに上り、大正十四年度は二倍三分強に當つて居る。

苦灰石も菱苦土礦と互層し、關東州方面にかなり多く産し、昭和四年度の産額一〇三、二三五トンに達してゐる。滑石も工業的價値を多分に有するもので、重要工業原料として、その産額の殆んど全部を日本内地に供給してゐる産地は蓋平から海城に至る滿鐵本線に沿うて、北東から西南に連る山地一帯に散在してゐる。昭和四年度産出高は四萬トンと算せられる。

耐火粘土は煙臺炭礦、複縣五湖嘴炭礦の如き、二疊石炭紀の炭田に豊富に産出する。即ち二疊石炭紀層の一部をなし、一般に石炭の直下に發見される。品質は日本内地産よりも遙かに優良で、その耐火度の高いのと、鑛量の大なる點に於て、内地産の追従を許さない。昭和四年度産出額は六四、六三九トんに上り、その多くは日本内地に輸出されてゐる。石灰石、硅石等も有望な鑛産で、前者は年額六二九、五〇二トン、後者は二萬トンの産出がある。

六 都 邑

◎ 奉 天

奉天は滿洲新國家建設前まで、滿洲の首都として政治、軍事、經濟、教育等萬般の中心地たりしところである。随つて支那側の樞要な官衙をはじめ、經濟上の機關、諸施設も、この地に集中され、國際外交上にも重要な地位を占めてゐた。殊に滿洲事變以來、我が軍事上の中心がこの地に移り、我が滿洲經營の策源地と化した觀がある。交通上に於ても渾河の北、廣漠たる沃野の中に立ち、滿鐵本線、安奉線、奉海線(潘海線)奉山線(舊北寧線)滿鐵撫順支線の結節點に位して、滿洲交通の樞軸をなしてゐる。

この地は渤海國時代には瀋州と稱し、元朝に及んで瀋陽と呼び、明朝の頃には瀋陽衛を置かれてゐた。この地が一

躍、史上に大きな役割をもつに至つたのは、清朝興起以後である。即ち清の太祖が帝業を創めるや、天命年中、都を遼陽からこゝに遷し、盛京と改稱した。後順治初年、北京に遷都するに及んで留都となし、順治十四年に奉天府を設けて、奉天といふに至つたが、民國十八年(昭和四年)張學良の易幟とともに、瀋陽の故名に復し、更に滿洲事變後、またく舊稱、奉天に復歸するに至つた。

鐵道附屬地、商埠地、城内の三區域から成り、附屬地は日本の行政區域、商埠地は外國人のために開いた居留地、城内は支那側の行政區劃となつてゐる。

新國家の建設とともに首都は新京に遷つたが、依然、奉天省の政治、經濟、軍事等諸般の中樞地として、市街の發展を示しつゝある。人口は左表の如く、近來増加の傾向を示してゐる。

人種別	附屬地	商埠地	城内
日本人	二四、〇〇〇人	三、九一五人	二〇四
支那人	二〇、九七〇	三九、〇九〇	二七二、五五七
外國人	一、〇六八	五七三	一七五
合計	四六、〇三八	四三、五八二	二七二、九三六

即ち附屬地、商埠地、城内を通じて人口三六萬を超える大都會である。省内に於ける商工業の中心たるだけあつて近代工業の發達に見るべきものがある。いま奉天市の工場表を掲げると左の如くである。(昭和四年末現在)

種別	工場數	資本	労働者數
紡織	五四	三、二六二、二〇〇元	五、五四〇
染色	三三	一五一、五〇〇	一八〇
鐵工	二五	一、一九一、五〇〇	一、五二〇
車輛	八二	八七、〇〇〇	四二〇
印刷	二五	二四〇、〇〇〇	一六〇
製油	一七	一四四、〇〇〇	六〇
窯業	五六	一、二〇九、〇〇〇	三、二四二
皮革	六五	五一五、〇〇〇	三七〇
石鹼	七	六、一〇〇	六〇
醸造	八	一六二、〇〇〇	六〇
煙草	五	四六、五〇〇	四〇
燐寸	一	一八〇、〇〇〇	二〇〇
精米	三九	五八二、一〇〇	一九〇

[168]

木	一二七	二四五、〇〇〇	八九〇
飲	三	三三〇、〇〇〇	一七〇
齒	一	二〇、〇〇〇	一一
磨	一	二〇、〇〇〇	一一
粉	一	二〇、〇〇〇	一一
油	二六	五八、七〇〇	一〇九
合	五七四	八、四三〇、六〇〇	一三、二二三

支那側の主要工場としては紡紗廠、兵工廠等が最も著名で、日本人側では製糖、毛織、製麻(休業)煙草製造など、各種の大工場がある。名所舊蹟としては、清朝時代以來の古址多く、北陵、奉天城、著名な佛閣、戦跡など見るべきところが豊富である。

◎ 撫順及び鞍山

撫順は埋藏量九億餘トンと註せられる炭田でもつ鑛業都市である。人口八萬に近く、附屬地の隣接地や、舊撫順城内を合すれば人口十五萬に達するといはれる。滿鐵會社經營の炭鑛とその附帯施設、油母頁岩工場、モンド瓦斯工場、硫安工場等がある。炭鑛が露天掘を行ふやうになつてから、今の様に市街の大變革が行はれた。

鞍山は本溪湖とともに鐵鑛山と製鐵所によつて立つ市街である。製鐵所は滿鐵の經營にかゝり、一日出鉄能力三百トンの溶鑛爐二基とアメリカ式五百トン爐一基とがあり、増産計畫完成の際には年額四拾萬トンの出鉄を見るだろうといはれてゐる。現在人口一萬七千人内外で、將來重工業地として伸びる素地を十分にもつてゐる。附近に湯崗子温泉、千山などがある。

◎ 遼陽及び營口

遼陽は滿洲最古の都城で、奉天遷都以前に於ける政治、經濟、交通の中樞をなしてゐた。随つて城内及びその附近は史蹟に富み、舊都の面影を存し、日露の戦跡と白塔とをもつて知られ、支那酒の名産地である。且つ我が駐滿師團司令部や滿洲紡績會社工場などがある。

營口は、大連開港前までは滿洲の門戸として重きをなした遼河の河口港である。今では沿岸貿易港として、相當重要な役割をもつてゐる。昭和五年度に於ける同港の輸出入貿易額は左表の如く、支那諸港との貿易が重要部分を占めてゐる。

(單位海關兩)

支那沿岸	三五、五六二、九七四	三五、九六八、七七七
日本	八、八四四、〇六八	五、七九二、九一〇
其他	一、七二八、一八〇	一六、〇一七、六〇〇
合計	四六、一三五、九七四	五七、七七九、二八七

[169]

現在人口十萬と註せられ、主要工業としては油坊、燐寸工場、煙草工場、煉瓦製造所、醸造工場、電氣、瓦斯等である。

◎ 安東と本溪湖

[170]

安東は滿鮮の國境、鴨綠江の河口港である。農産と林産に富んだ鴨綠江流域を背後地に有するため、製絲、製材、油坊、榨蠶糸工場、精米工場等が多く、これ等が安東の生命と目されてゐる。

人口は鐵道附屬地六六、五〇〇人、支那側を併せて日支鮮人十數萬人と稱される。河口港としてよりも滿鐵線と朝鮮鐵道の連結點として、陸路貿易上重要な役割を演じつゝある。

附近から安奉線沿岸地方は、柞蠶、木材、薪炭、石炭、硫化鐵、石材等の産地で、高熱の温泉五龍膏もある。

本溪湖は鐵と石炭の産地で、日支合辦本溪湖煤鐵公司のあるところである。市街の南端を洗ふ太子河には、筏と獨木舟が群がつてゐる。製鐵所は二十トン爐二基の設備を有するも、斯界不振のため一基休業し、最近一箇年出鉄高八五、〇六〇トンである。

◎ 鐵 嶺

遼時代には錦州と稱し、滿洲一の銀座があつた地で、のち地形の天險のため今の名に改めたものだといはれる。

西に遼河の大水運あり、北に柴河の流れるあり、滿鐵開始前までは大豆、雜穀の一大集散市場として榮え、先年まで滿鐵沿線に於ける綿糸布の中心地と目されたところである。今でも製粉工場、綿布織物工場等がある。

◎ 東山地方

潘海鐵道の沿線は、その名の如く山岳地帯多く、平野は尠いが、海龍平野があるのと、丘陵の傾斜が緩漫なため、到る所耕作が行はれ、土地も極めて肥沃で、降雨潤澤旱魃の懸念が尠い。昭和四年度に於けるこの地方の農作物收穫高は大豆三六九、六〇〇トン、高粱三〇四、三〇〇トン、粟一九八、七〇〇トン、玉蜀黍一九七、五〇〇トン、

水稻四一、三〇〇トン、その他雜穀二九〇、四〇〇トンで石炭や木材の産出もある。

山城鎮、海龍、朝陽鎮、東豊、西安(大カク炭坑所在地)掏鹿などが、主要都邑として知られてゐる。

第六節 黑龍江省

一 地勢と位置

黑龍江省は、滿洲國の最北部を占め、北緯四六度三〇から五二度まで、また東經一二四度を中心とし、東は吉林省に接し、西は興安特別省に連り、南には吉林省と奉天省がある。また北の一帶はソヴィエト聯邦の黑龍州と界する。面積約二六、四五〇邦里餘で、省内をもと黑河、綏蘭、龍江、海滿の四道に分つたが、海滿即ち呼倫貝爾は、今回の新國家建設に際し、興安特別省の所管に屬した。

黑龍江省の地勢は概ね高原地帯をなし、且つ東に小興安嶺山脈あり。西には大興安嶺山脈が、西南から東北に隆起し、この兩山脈より發する諸水は、高原地方を潤ほし、且つこの地方特殊の降雨雪によりて水量潤澤、水運の便をも供する。地質は一般に黑色を帯び、腐葉土の如く、穀類その他の農作物に適し、また樹木の繁殖著しく、まことに北滿第一の豊土である。

二 山 脈

[171] 即ち大興安嶺の主脈は蒙古地方の陰山々脈の喀喇喀山附近より起り、東北方に向つて殆んど一直線に走行し、起伏連互、數百里に及ぶ。そしておのづから内外兩蒙古の境界をなすが、今では興安嶺の脊梁たる觀を呈する。省の西部はこの山脈から派出する大小の支脈あり、またその東部は別に一連をなして、大興安嶺とへ形に、北西から南東

[172]

に向ふ小興安嶺の地域であつて、これら兩嶺の支脈の間を下る大小幾多の支流は、省の中部に於て合して嫩江となり、南流して流域に盆地を展開し、首都チムハルを置く。その大興安嶺山脈は、省の南部では肯特山脈と交叉し、呼倫貝爾、布特哈境山に蟠旋し、索倫山または伊勒呼里山脈となり、つひに蘇領に入るのである。そして嫩江の水源たる伊勒呼里以西を西興安嶺、以東を東興安嶺と稱するが、省内に於て興安嶺は龍江道と呼倫貝爾とを境し、また嫩江と額爾古訥河との二大水系の分水嶺をなしてゐる。

また小興安嶺山脈は、北部に於て東内興安嶺に連接し、訥謨爾河、湯泛河、額爾芬河の三流の發源地方から、東方及び南方に分岐せる瑪哈拉山にわたる總稱であつて、その山脈は、頗る森林に富み、樹木鬱蒼として晝なほ暗く、眞夏の候といへども時に冷涼を覺える。最高海拔一、〇一〇メートル餘、東方の支脈は松花、黑龍兩江の分水嶺をなし、烏雲、羅北、湯源の三縣の境界をなす。その東走するものを佛思山脈となし、南に突出して松花江岸に盡き、るものを珠山々脈といふ。なほ山勢は更に南に奔つて薩哈連山、白蘭山、倭鼓山などを隆起し、通北、慶城、鐵崖および湯源の諸縣との境をなしてゐる。また別に老鐵山脈によりて湯源、通河二縣を畫し、三姓附近において松花江岸に走り、江中に入つて終る。

三 河 川

次にこの二山脈に發して流下する諸河川について概説せんに、まづ江の大宗をなすものとして、境北を孤狀に半環流して東に向ふ黑龍江がある。この江は古來名稱多く、種々の名で呼ばれるが、黑龍江とは水色より來るもので、また遼代に始まるといはれ、また南北朝以來、黑水と呼ばれるともいふ。

ウシヤ人はこれをオムールと稱するが、朝鮮語のムル(水)滿洲古語のムール、蒙古語のムレン等と同一語源に屬するものとの説がある。江はその源に二流あり、主流は什爾喀、アングル河等より來る。その什爾喀河は外蒙の烏蘭巴塔兒河他(舊庫倫)地方より發するオノン河と後貝加爾州より發するインゴク河とで、兩河屈曲東流して翁多格の東に合し、初めて什爾喀河と稱する。

アルグン河も源はオノン河とひとしく外蒙、烏蘭巴塔兒河他の東部より發し蜿蜒して克魯倫の南に至り、克魯倫と稱し、これも屈曲北東流して達賴諾爾(湖)に注ぎ、更にそこより東流するものをアルグン河と稱するのである。什爾喀河はシベリヤ鐵道東線にほと接沿しつゝ東流し、漠河の西に達する。そしてこの間に各地から來る大小數流を受け、アルグン河もまた國境に沿つて北流し、海拉爾河、根河、章室哈喇爾河、塔洛浦喀河等、大興安嶺山脈から發する諸流及び國境外の西方より來る烏洛甫河、喀吉米爾河、及びその他の諸流を受け、漠河の西で兩河合して黑龍江となるのである。

[173]

そしてこれより以下、主流は屈曲して國境に沿ひ、ひたすら東流し、薩坡什喀河、額穆爾河、旁穆河等支流を併せつゝ、更に南東に向ひ、呼瑪の南に至り、呼瑪爾河を受ける。これらの諸河は何れも大興安嶺山脈より發するものである。そしてこれより蜿蜒國境に沿つて南流し、黑河の南に至り、ゼーヤ、セレンガの兩河の合したるを受け、河幅頗に擴大する。更に南に流走して省の東境尖嘴に於て松花江の省南を洗つて來るのに會し、以下吉林省北境を東に流走するのである。

然し黑龍江は省の北邊に沿つて流れるだけで、省としての重要性は寧ろ嫩江にある。嫩江は省の大動脈とも稱すべ

く、省内中央を縦貫し、その沃地平野を形成する。源を墨爾根、愛琿の分岐點のかた、伊勒呼里山に發し、共に南流して門腔、庫魯その他の河流注入し、墨爾根に至り、甘河及び土拉河等の各支流を迎へ、こゝで水流を増し、更に南下して、訥、奎尼、楚勒加利、胡裕爾、阿倫、雁羽等の諸河を受け、齊々哈爾の城邊を洗ひながら昂々溪に至つてやゝ東に折れ、省の南境端に突出せる茂興沾に於て吉林省南を流れ来る松花江と合流してより、急に直角をなして東北流し、松花江本流となり、兩省境を走り下り、東北境尖に於て上記黒龍江と合するのである。

嫩江の河幅は下流で二〇〇メートル乃至八〇〇メートルに及び、水深また二乃至四メートルに及ぶ。従つて齊々哈爾を起點として、齊々哈爾、墨爾根間、齊々哈爾、松花江間に舟楫航運の便がある。結氷期間、即ち十月中旬—四月下旬の外は、各種帆船の航行絶えない。又この嫩江に注ぐ雅爾河はその源を興安嶺中の堂倫山附近に發し、東南流して巴里木、阿敏元、烏德伊、濟心、哈代罕等の諸河を合せ、昂々溪の南に於て嫩江に注入する。

その流域は約一一〇邦里あり、幅員は上流で三四メートルあれど、下流は漸次擴大してつひに四〇〇メートルに至るが、沿岸は概ね高原で、斷崖が多い。今一つ綽爾河は源をひとしく興安嶺山脈の一なるカルベオハ山より發し、各種の小流を吞みつゝ、くつ曲し札賚特の北部地方を横斷して塔子沽の西北、綽爾城で分流し支流は北東に向ひ、本流は南東に向つて、煙筒屯の南に至り、嫩江にそゞぐのである。

次に省境に沿ふ松花江は、これも古來數名ありて、明の宣德年間に松花江と稱した。源を長白山に發し、まづ西流し二同江に於て嫩江と合する。こゝをまた兩江口ともいふ。また松花江本流の中途に於て合する呼蘭河は、源を小興安嶺中の鐵山包の東北に起し、諸流を合して綏化の北部で呼海鐵道を横斷し、西南に流れて濱江(ハルビン)に至

り、松花江にそゞぐるのである。

四 農 林 業

黒龍江省は地形上平坦のところ少く、殊に東部一帯及び北に進むにしたがひ、地勢いよゝ高峻となるが、然し中部の嫩江流域から南するにつれて、平坦な廣野開け、且つその地方は一帯に殆ど開拓しつくされてある。殊に齊々哈爾附近を主とし、景星、林甸、明水、青岡、呼蘭等の各地方は最も開けてゐる。

綏化、海倫、拜泉等もまた殆ど耕作至らざるなく、開墾後すでに四五十年を経たところも少くない。従つて部落も安定し、年々の收穫も豫定し得られる。またこれに次ぐ北通、北龍鎮地方の如きは、未だ開墾地五分の一に過ぎず今後益々移住者多きを必要とする。

之等の地方に於ける農作物としては、雜穀類は勿論好適し、野菜類の如きも南滿に比して一層成育よろしく、多量の收穫を得られる。其の主要なる穀類の作附反別地左の如し。

大豆	町步
高粱	五八〇、〇〇〇
粟	六〇〇、〇〇〇
玉蜀黍	一五〇、〇〇〇
小麦	六八〇、〇〇〇